

表紙, 目次, 雑纂, 抄録, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38629

明治三十七年二月二十六日發行

十全會雜誌

第三十一號
第三十二號
合刊

（非賣品）

全澤醫齒學專門學校十全會

十全會雜誌第三十二號目次

原 著

○十二指腸虫病ニ就テ

特別會員 米村吉太郎

○先天梅毒ニ因スル脊髄病

特別會員 岡本京太郎

○脱胎ニ用ヒシ異物ノ一例

特別會員 諸角友平

○筋病性進行性少年性筋肉萎縮ノ二例

特別會員 眞柄佐一郎

雜 纂

○頭部並ビニ前膊ニ於ケル肉腫ノ一例

醫學得業士 志 裳 無 良 生

○實験片々(其の一)

志 裳 無 良 生

抄 録

○北豐吉氏ドクトル學位論文請求ノ梗概

志 裳 無 良 生

○蕪便検査ニ於ケル寄生虫第一統計報告

志 裳 無 良 生

○解剖論(多發性肉腫標本供覽)

志 裳 無 良 生

○藥物學(コナチンニ就テ)

志 裳 無 良 生

○心分難化(コナチンニ就テ)

志 裳 無 良 生

○内科(肺チスル病ノ一實験)

志 裳 無 良 生

○者ノ乳酸血症ノ發見

志 裳 無 良 生

○脚氣預防ノ特効藥

志 裳 無 良 生

○劑ノ應用(熱所見ノ豫防)

志 裳 無 良 生

○小兒科(初小兒肺癆ノ一實験)

志 裳 無 良 生

○耳鼻咽喉科(耳聾ノ一實験)

志 裳 無 良 生

○テ破室乳嘴管及ヒ硬膜内ニ生ズルコレラ

志 裳 無 良 生

○眼科(老人眼病ノ一實験)

志 裳 無 良 生

○部帶狀ヘルペスノ二例ニ就テ

志 裳 無 良 生

○脚氣ニ於ケル糖尿病ニ就テ

志 裳 無 良 生

○大根ノ應用

志 裳 無 良 生

○胸膈症ノ一例

志 裳 無 良 生

○解熱

志 裳 無 良 生

○赤痢

志 裳 無 良 生

○一實験

志 裳 無 良 生

検査ニ際セル眼科的觀察○對馬ニ於ケル小學生徒ノ眼科的検査小報○高

度近視眼底ニ於ケルエケダシト一例○涙道吸引作用ニ就テ○化膿性眼病

性眼病○一例○糖漿性眼病○一例○虹彩ノ變質ニ就テ○所

謂テ手術式ノ効價ニ就テ○網膜炎ノ一例○眼瞼下垂症ニ對スル河本

氏眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

眼瞼下垂症ノ一例○網膜炎ノ一例○劉羽野ニ於ケル眼瞼下垂症ノ一例

漫 録

○異郷ノ新年(雨城)○姫小松(中峰)○甲板上ノ感(矢峯)○白山登山ノ記

○米溪生○立身ニ其ノ人の伎倆如何ニ由ル(原田龍也)○交友茶話(無菌)

○七五三君を送る(董)○學費九起す(一強)

○會 報

○會 告

○會 員 名 簿

○會 費 領 取

○會 員 名 簿

○會 告

○會 員 名 簿

○會 費 領 取

○會 員 名 簿

○會 告

○會 員 名 簿

○會 費 領 取

○會 員 名 簿

○會 告

○會 員 名 簿

○會 費 領 取

○會 員 名 簿

○會 告

○會 員 名 簿

○會 費 領 取

○會 員 名 簿

○會 告

○會 員 名 簿

○會 費 領 取

○會 員 名 簿

○會 告

○會 員 名 簿

青帝曆を回らし蒼玆に新に、瑞雲九阜に鬩黷き祥氣九重を達る、光輝八絃に普く洗氣六合に滿つ、擊攘鼓腹俱に謳はずや、

回顧すれば本誌が呱呱の聲を擧げしは實に明治二十九年。今や八歳の兒、栴檀萌芽より馨はしこも掬養當を得ざれば雜草と何ぞ異らむ、生等誤り擧げられて此兒保育の任に當る、唯菲才淺學其の任を全ふせざるを恐る、兒尙總角、然かも青春の血もゆるが如く希望を未來の光明によせ他日吉林社會の本繹を以て自任し宛然蒼龍昇天の氣概あり、本會千餘の諸賢！熱誠生等を指導し此兒をして將來有爲の材たらしめよ、生等亦眞摯其任を全ふせんこ

す、聊蕪辭を述べて回歳の辭となす、

雜誌部長兼編輯部長 小川 勝 陳

委員 松田菊治 野崎芳孝 宇野益之

全 有壁一雄 小原芳雄 (醫科四年)

全 渡邊 疆 建部鈴次郎 (全 三年)

明治三十七年一月元旦 全 吉田誠一 吉野 要 (全 二年)

全 永井人雄 藤井一雄 (全 一年)

全 柳澤秀吉 (醫學科三年)

全 川勝寛治 (全 二年)

全 木村知義 (全 一年)

廣告

謹賀新年

祝各位御健康

明治三十七年元旦

於奥國アラীগ府

山 碓 幹

尚ほ當地切上時日切迫致居り候段取紛れ乍略儀茲に御年首申上候也

恭賀新年

在 廣 島

藤 浪 謙
太 田 長 作

遙賀新年

工兵第九大隊事務室

清 水 秀 夫

謹賀新禧

獨逸國ライプチヒ市

北 豐 吉

居轉

金澤市百々女木町七十番地
十全會長 高 安 右 人

日本內科學會廣告

來ル四月四日ヨリ同六日ニ至ル三日間東京市神田區一ツ橋外東京高等商業學校ニ於テ第二回日本內科學會總會ヲ開ク舉行順序左ノ如シ

一庶務會計報告、議事

一宿題(肺結核治療法)報告、演說

一懇親會、參觀

入會希望者ハ原籍現住所ヲ記シ入會金參圓會費金參圓ヲ添へ此際申込マレタシ

明治卅七年二月

東京市日本橋區本銀町二丁目拾番地

日本內科學會幹事

▲第二拾回產科 婦人科學講習▼

○募集人員 醫士三十名

○開講 二月二十九日

○講了 四月二日

○講習時刻 每日午後一時ヨリ二時半迄

○申込期限 二月二十五日

東京日本橋區涙町三丁目七番地

產婦人科楠田病院教室

雜 纂

○頸部并ニ前膊ニ於ケル肉腫

ノ一例

四學生生 佐 藤 潮

昨年十二月 宮田外科部ノ一救恤患者臨床實習用トシテ
 余ニ擔當ヲ命セラル、雖然余ヤ未ダ一般醫學ノ門口ヲ窺
 フヲ得ズ從テ此ノ學ニ對スル才ナク又能ナシ唯一見以テ
 其腫瘍ノ大ナルヲ奇トナシ再視以テ其全瘉ノ望ミナキヲ
 憐ミ呆然トシテ精シテ既往ヲ尋門シ現症ヲ探知スルノ勇
 氣ナキニ至レリ而メ患者モ亦充分ノ應答ヲ與ヘス且ツ余
 ノ命ニ從ハズ只寢台ニ仰臥セシ儘其死期ヲ待ツモノ、如
 シ此ノ如キヲ以テ粗漏ノ檢査ヲ遂ゲツ、アリシガ遂ニ同
 十三日午後七時黃泉ノ客トナレリ因リテ十四日午前十一
 時金澤醫學專門學校病理解剖室ニ於テ恩師村上教授ノ執
 刀ニテ解剖セラル余モ亦師ニ乞ヒ介者トシテ親シク其病

變ヲ目撃シ且恩師ノ懇篤ナル教示ヲ忝フシ大ニ得ル處多
 カリキ曩日學友小原氏來リテ之レヲ十全會雜誌ニ投書シ
 學友諸氏ニ頒ツノ故ヲ以テス余其厚意辭スルヲ得ス此處
 ニ余ノ淺學ニシテ檢査ノ不完全ナルト且文意拙ナルヲ顧
 ミズ原稿ヲ草シ小西講師ニ乞フテ解剖記事ヲ摘録シ聊カ
 本紙ノ餘白ヲ汚シ諸氏ノ示教ヲ仰グニ至レリ

患 者 金澤市宗叔町五番丁六番地平民

機業場織工 平 櫻 ヨ 子

二十年

血族ノ關係 父方ノ祖父ハ四十年前不明ノ疾病ニテ斃レ
 祖母ハ患者四才頃ニ老衰ニテ逝ケリ母方ノ祖父母ハ何レ
 モ數年前不明ノ疾病ニテ死亡セリト云フ父ハ壯年ノ頃ヨ
 リ日雇業ニ依リテ生計ヲ建テ未ダ嘗テ重患ニ罹リシ事ナ
 ク本年五十五歳ニシテ今尙健存ス母ハ五十歳ニシテ之亦
 生來健全ニシテ夫ヲ助ケ勞働ニ從事シツ、アリ而メ兩親
 華燭ノ典ヲ舉ゲタルハ父二十九歳母二十四歳ノ時ニシテ
 患者ハ其長女ニ當リ同胞三人ヲ有シ皆健全ナリ其他血族

中遺傳ノ徵スベキモノナシ

既往病歴 患者生來強健ニシテ麻疹ハ十歳ノ頃ニ經過シタルモ痘瘡ニ罹ラス種痘ハ數回之レヲ施シ初メノ一回ハ善感ナリシト又幼少ノ頃頭部ノ濕疹ヲ患ヒ月餘ニシテ治セリト云フ其他麻疾梅毒等ハ患者之ヲ自覺セズト云フ

患者既往ノ生活法、患者十一歳ニシテ尋常小學ヲ卒ヘ十五歳ヨリ機業場ノ工女トナリ本年二月迄機業ニ從事セリト云フ而シテ其生活ノ程度ニ至リテハ先ツ下等ニ屬スルモノナラン月經ハ十六歳ノ春初メテ潮來シ以來正順大抵三―五日持續セリ然ルニ本年一月ヨリ全ク閉止セリト云フ

現病既往症 患者十七歳ノ暮乃チ今ヨリ三年程前ニ左耳垂ノ後方ニ當リテ二錢銅貨大ノ硬キ扁平ナル腫瘤ヲ他人ノ注意ニ依リテ初メテ發見セリ然ルニ該腫瘤ハ其後増大スルノ傾ヲ有セス患者モ亦疼痛等ノ自覺症ヲ感セザルニ依リ別ニ意ニ介スルコトナク其儘放置セシニ昨年七月頃ヨリ漸次増大シテ同八月頃ニ至リ鶯卵大ニ達セリ同月更ニ

左ノ鎖骨上窩ニ於テ胡桃大ノ腫瘤ヲ發見セシガ該腫瘤ハ俄カニ増大シテ本年春頃ニハ頭部ノ廻轉運動ニ障害ヲ來ス而已ナラズ輕度ノ疼痛ヲ感ズルニ至レリ依リテ金澤病院宮田外科部ニ於テ診ヲ乞ヒ其惡性腫瘍ニシテ手術ニヨリ摘出セザレバ生命ニ危險ナルベシトノ注意ヲ受ケシモ患者手術ヲ怖レテ再ヒ來院セザリシト云フ四月頃ニハ二個ノ腫瘤共ニ著シク増大シテ鎖骨上窩ヨリ發生セシ者ハ小兒頭大ニ達シ耳垂ノ後方ノモノハ手拳大ニ達シ互ニ癒着シテ瓢狀ヲナシ其表面ハ緊張シテ光澤ヲ放テリ當時左前膊一般ニ剛硬ヲ感シ左ノ第四及第五指ノ第一二節屈曲シ伸展運動ヲ營ム能ハザルニ至レリ八月頃ニハ二個ノ腫瘤ハ互ニ全ク癒着シテ大人頭大ノ一個ノ大腫物ト變シ其表面ノ一部ニ潰瘍ヲ生シ腫物ノ周緣ハ著シク疼痛ヲ發セリ依リテ再ヒ來院乞フテ九月二十二日金澤病院救恤患者トシテ入院セリ十一月頃ニハ潰瘍四個ニ達シテ腫物ハ少シク縮小セシト雖モ全身ノ衰弱ハ一層高度トナリ食氣進マス歩行ハ勿論躰位ノ變換サヘモ營ムコトヲ得ザルニ至リ

シト云フ

現在症候 患者ハ自働的ノ運動著シク衰へ絶へズ半仰臥ノ位置ヲ保チ只僅ニ上肢ノ運動ヲ營ミ得ルニ過キス而シテ其躰格ハ中等ニシテ營養極メテ不良全身ノ皮膚一般ニ乾燥シテ蒼白色ヲ呈シ皮下脂肪層ニ乏シク諸種ノ筋肉ハ著シク瘦削シ肋間著シク陷没シ胸骨并ニ肋骨ハ皮下ニ突出セリ之レニ反シテ左前膊ハ瘦削セサル而已ナラス反テ肥大セルヲ認ム此部ヲ觸珍スルニ極メテ硬固ニシテ撓骨動脈ノ搏動ノ觸知スルコト能ハズ左ノ第四指及第五指ノ第一、二節ハ共ニ屈曲シ自働的ハ勿論他動的ニ於テモ之レヲ伸展スルコト能ハズ試ミニ腕關節ヲ屈曲セシムルキハ指節ノ運動ニ障害ヲ來スコトナシ顔貌ハ稍々瘦削シ顴骨部少シク突隆ス眼窩ハ中等度ニ陷没シ眼瞼結膜口唇粘膜炎共ニ貧血ヲ呈シ瞳孔ノ大サ左右均等ナラズシテ左側ハ右側ニ比シテ少シク散大ス然レモ其反應ニハ異常ヲ認メズ鼻腔ヲ檢スルニ異常ナシ左側頸部ニ於テ一ノ大ナル腫物アリ其大サ大人頭大以上(上下ノ縦徑二十三仙迷前後ノ

横徑二十二仙迷)ニシテ表面ハ凹凸不平ナリ而シテ其外側ニハ四個ノ潰瘍ヲ有シ(潰瘍ノ縦徑九仙迷横徑四仙迷)其形何レモ橢圓形ニシテ邊緣ハ鈍ク底面ハ暗赤色ニシテ汚穢帶黃綠色ノ膿ヲ附着シ極メテ惡臭ヲ放テリ其他ノ部分ハ鷄卵大ノ腫瘤數個隆起シ表面ハ皮膚ト癒着シ又深部トモ深ク癒着シテ移動シ難シ其硬度ハ一般ニ硬シ然レトモ處々一樣ナラズシテ腫物ノ周縁ニ於テ尤モ硬ク中央ハ稍々其硬度ヲ減ズ腫物ノ範圍ハ上方ハ左耳朶部ヨリ前方ハ下顎隅後方ハ項部ノ中央下方ハ鎖骨上縁ニ達ス右腫物ノ爲メニ頭部ハ著シク右方ニ傾斜シ下顎ノ運動ハ著シク障害セラレ僅カニ口ヲ開クニ過キズ爲メニ口腔内ノ檢査ヲ充分遂グル能ハズト雖モ口腔粘膜炎一般ニ貧血ヲ呈シ舌ノ表面ハ白色ノ苔ヲ以テ被ハレ齒列ニ異常ナキガ如シ咽頭喉頭ノ檢査ニ至リテハ之レヲ行フコト能ハザリキ然レドモ呼吸障害及ビ聲音ノ變化等ナシ右側頸部ノ淋巴腺并ニ右腋窩ノ淋巴腺ニハ腫脹ナキモ左腋窩部ニ於テ豌豆大以上ノ硬結物二個ヲ見ル左右乳房ヲ按ズルニ一般ニ小硬

結ヲ觸ル

胸部ノ理學的檢査 右肺ノ上縁ハ打診ニヨリテ鎖骨上縁ヲ去ル一指横徑半ノ部ニ認メ下縁ハ正中線ニ於テハ劍狀突起ノ基底部ニ達シ乳線部ニ於テハ第六肋骨ノ下縁ニ達セリ而シテ其打診音ノ性質ハ破壺音ニシテ聽診上少シク肺胞呼吸音ノ微弱ナルヲ聽取ス左肺ノ上縁ハ腫瘍ノ爲メニ之レヲ定ムルコト能ハザルモ下縁ハ正中線并ニ乳線部ニ於テハ第二肋骨ノ下縁ニ相當シ前腋窩線ニ於テハ第六肋骨ノ下縁ニ達ス打診音ノ性質ハ清音ニシテ聽診上亦異常ナシ心跳ハ第五肋間ニ目撃シ心跳ノ外第二、三肋間ニ於テ心臟收縮時ニ當リテ突隆スルヲ見ル心臟ノ打診界ハ上方ハ第二肋骨ノ下縁ニ達シ内方ハ正中線ニ外方ハ乳線ヲ越ル二指横徑ノ奇ニ達セリ聽診上異常ナキモ搏動高ク且急速ニシテ一分間ニ百十八乃至百八搏ヲ數フ

腹部ノ理學的檢査 腹部ハ一般ニ陷沒スルノ外變化ヲ認メズ又肝臟脾臟等ノ腫大等ヲ認メズ

尿ノ檢査 ハ數回之レヲ行ヒシガ常ニ蛋白質ヲ多量ニ含有

セリ

血液ノ檢査 ハ一回之レヲ行ヒシモ不熟練ノ結果好成績ヲ得ザリシハ遺憾ナリキ(以上ハ昨年十二月下旬起草セシモノナリ)

剖見上ノ處見左ノ如シ

第一 外表檢査

一、一女屍躰重四十三磅躰格中等營養不良全身ノ皮色一般ニ蒼白ニシテ屍斑ハ未ダ發生セズ

二、死硬ハ下顎關節ニノミ輕度ニ存ス

三、頭髮部變化ナク頭部ハ頸部ノ腫瘤ノ爲メニ右方ニ傾斜シ兩眼瞼結膜蒼白滑澤角膜ハ左右共ニ透明瞳孔散大ス

左頸部ニ於テハ一大腫瘤アリ其大サ大人頭大以上(中畧)該腫物ノ切斷面ヲ檢スルニ一般ニ帶黃白色ニシテ所々ニ乾酪狀ヲ呈スル部アリ比較的液分ニ富ム左腋窩部ニ豌豆大ノ硬結二個アリ左右乳房ハ良ク發育シ之レヲ按スルニ一般ニ小硬結物ヲ觸ル之レヲ切開スルニ灰白色ニシテ麥粒大ノ硬結多數表面ニ突出ス腹部ハ陷沒シテ皮下ニ腰推

ヲ觸知ス可ク外陰部變化ナク肛門弛緩シ脱糞ス左前膊ハ右ニ比シテ一般ニ太ク按ズルニ澀潤性ヲ呈シテ硬シノ部ヲ開檢スルニ諸筋ニ變化ナク深層ノ筋間ニ太キ索狀ノ黃白色ヲ呈スル腫物様物存在ス骨膜ハ之ノ腫瘤狀物ニ關係ナク骨質從テ變化ナシ左手背及両足背浮腫ス

第二 内部検査

四、胸腹軟部ヲ切開スルニ皮下脂肪層極メテ菲薄中等ニシテ其色淡ナリ腹腔内ニハ少許ノ漿液ヲ含有シ腸管ノ上行及ヒ下行面ハ淡紅灰白色ヲ呈シ腹膜滑澤子宮ハ四十五度右方ニ傾斜シ然シ癒着ナシ之ノ他内臟器ニ位置ノ變狀ナク横隔膜ノ高サ左六肋間右第四肋骨ノ上縁ノ高サニアリ

其一 胸腔臟器

五、胸腔ヲ開檢スルニ右肺縁露出、心囊ハ膨大シ爲メニ左肺後方ニ退縮ス左胸腔内ニ絮狀物ヲ混ズル帶黃色ノ稀薄液ニ〇立方仙迷肋膜滑澤癒着ナシ右胸腔内ニモ同上液ニ〇立方仙迷ヲ含有シ右肺ハ一部横膈肋膜ト癒着ス

六、心囊内ニハ稀薄透明黃色ノ液ニ一〇立方仙迷ヲ含有シ内面滑澤蒼白色ナリ

七、心臟ノ大サ本屍拳大ニシテ表面滑澤白色左心ハ硬右心ハ軟右上房内ニハ豚脂様凝血多量ヲ含有シ房室間孔ニ三指ヲ通ズ左上房ニハ少量ノ血液ヲ含有シ間孔ニ二指ヲ通ズ大肺兩動脈ニ摘出後水ヲ注クニ辨克ク閉鎖ス内膜及辨膜ニ變化ナク筋ノ厚サ左一右〇、四仙迷筋色稍淡ニシテ柔軟重量一四〇瓦


八、左肺表面一般ニ滑澤色淡紫赤色ヲ呈シ葉間ニ溢血点數個存ス上葉ノ下縁ノ中部ニ於テ白色ノ癍痕収縮部アリ之ノ部ノ硬結竈ハ蠶豆大ニシテ斷面黃色乾酪様物ヲ呈シ周圍ニ皮膜ヲ有ス下葉ノ上縁ノ一部ニ小豆大ノ肺石一個アリ斷面血量中等上葉ハ鮮赤色下葉ハ暗赤色ニシテ空氣及漿液ニ富ム氣管枝内ニ泡沫液ヲ多量ニ含有シ粘膜暗赤色ヲ呈ス右肺表面ノ性狀左ニ全シク輕度ノ葉間癒着アリ上葉ノ上方ニ溢血点及斑点アリ斷面ノ性狀亦左ニ全シク但シ硬結竈ナシ氣管枝ノ性狀亦上ノモノニ同ジ

九、喉頭ハ少シク腫瘤ノ爲メニ右方ニ偏シ内面ニ變化ナシ左頸靜脈ハ直接ニ腫瘤ヨリ圍マレ著シク後方ヨリ迂回シテ上行スルヲ見ル然シ血管壁ト目撃スルヲ得ズ

其二 腹腔臟器

十、脾臟ノ大サ九、五―五―三仙迷表面滑澤色帶褐藍色ヲ呈ス斷面血管少ナク其色小豆様色ニシテ實質内所々ニ出血部アリ重量八四瓦

十一、左腎莖膜剝離シ易ク大サ一一、五―四―三表面澤澤赤褐色ヲ呈シ血管網ノ充盈著明ナリ斷面中等皮質稍混濁シ皮髓不明硬サ通常重量一二四瓦右腎ノ大サ一〇、五―三、五―二、八表面及斷面ノ性狀左ニ同シ然シ血量左ニ比シ稍々著シ重量一〇二瓦

十二、膀胱内ニハ淡黃赤色ノ稀薄液約二〇立方仙迷ヲ含ミ内面赤色ニシテ血管網ノ充盈著明ナリ尿ヲ鏡檢スルニ顆粒狀ヲ呈スル扁平上皮及狀ノ細胞多數ト赤血球多數等ヲ含有ス蛋白試驗ヲ行フニ尿ハ少シク溷濁ス

十三、十二指腸内ニハ少許ノ粘濁ナル黃色内容ト蛔蟲一

條ヲ含有ス内面帶灰白色ノ總輸尿管克ク并通ス

十四、胃中ニハ蛔蟲一條ト帶黃灰白色ノ稀薄液中等量ヲ含有シ粘膜ハ一般ニ淡紅灰白色所々ニ線狀ノ長キ溢血部アリ

十五、廻盲辨部ニ暗黑色ノ血液様物ヲ含有シ粘膜ハ一般ニ充血シ鞭蟲多數寄生スルヲ見ル小腸ノ内面可記變化ナシ

十六、肝臟ノ大サ二二―一三―六仙迷表面滑澤其色帶紫褐色硬サ通常斷面血量多ク病竈ナク實質内ニ出血アリ胆囊内ニハ少許ノ内容ヲ有シ寄生蟲異物等存在セス重サ九五〇瓦

顯微鏡的所見

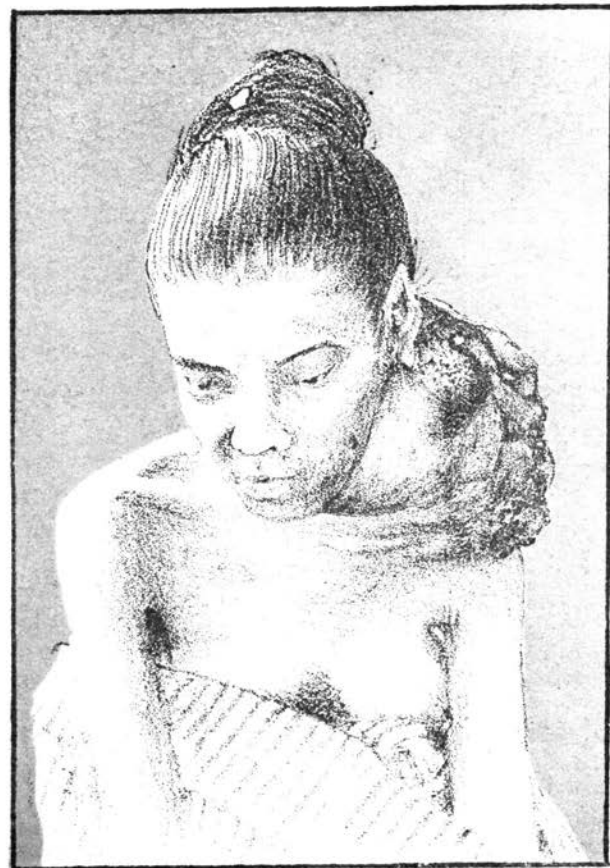
一、頸部腫瘤ノ表皮ニ近キ部ノ切片ヲ檢スルニ乳頭存在スルモ一部淺在性ノ欠損ヲ呈スル部アリ乳頭以下ニ於テハ大小不同ノ太キ結締織梁間ニ小ナル球形ノ細胞彌蔓性ニ存在シ組織中粘液組織狀ノ呈スル部ト全ク壤疽ニ陥リテ無組織ニ變化セル部トアリ前記腫瘤ノ稍々深部ノ切片

圖 二 第



スハ現ヲ面正ノ腫肉

圖 一 第



ル見リヨ面前ノ体ヲ腫肉

頸部ニ於ケル肉腫

(二五頁參照)

ヲ檢スルニ梁狀結締織間在スルモ切片全体尽ク小ナル圓形ノ細胞ヨリナリ微細糸狀間質存在ス又一部壞疽ニ陥ラントシツ、アル部アリ以上共ニ血管ハ比較的モカラス

二、前膊筋間腫瘍ヲ檢スルニ其處見全ク前記ノ后者ノ處見ト同一ナリ然シ壞疽ニ傾キシ部ヲ認メス

三、腋窩腺ヲ檢スルニ單核淋巴球ノ成形過多ヲ呈シ球狀及索狀濾胞ノ形痕不明血管ノ怒積擴張セルモノアリ腺被膜ニ變狀ナシ

診斷 (一)左頸部肉腫 (二)左前膊筋間肉腫 (三)左腋窩腺轉移肉腫 (四)子宮右傾 (五)肋膜癒着 (六)心嚢水腫 (七)左肺及右肺水腫 (八)両氣管枝加答兒 (九)腎臟炎 (十)蛔虫及鞭蟲

終ニ臨ミ宮田教授ノ本例ノ報告ヲ許可セラレ、村上教授并ニ小西講師ノ懇篤ナル教示ヲ鳴謝ス

○ 實驗一束

八 田 生

題して實驗と云ふ、任して其衝に當りたるに非ず、同

僚醫員並に學生、產婆講習生等と共に親しく小川教授指導の下に實驗し得たる落葉雜りの一束に過ぎず、古今を涉獵し東西を探查する如きは我等が能にあらざ、世幸に博雅の君子あり、今また何をか贅せん

第一例、石川郡乙丸村清水某、年齢三十五歲(四月生)、十四歳春月經潮來し爾來整然として亂れず、未だ正式の結婚せざるも本年一月四日月經一日ありてより經行を見ず、雇主に使へる身とて日々農務に従事せるも健康舊に増して壯にして惡心嘔吐等の如き不快の感更に無くたゞ四五日前より少しく感冒の氣味ありて時々咳嗽するのみ十月十二日四年級高生外來診察に伴はる、

容貌槐梧身体偉大赭黒の面、歌々たる眼光は一見男性体格をなし、さなから亞拉比亞土人其儘なり、從て生來頗る健全なして曾て藥匙に親みたることなしと云ふ、

腹部を檢するに腹壁緊滿強くして平等に膨大するも胃部は特に稍強く膨隆し臍窩部扁平にして子宮基底は臍劔尖の中央より一指半徑上方に在り、胎位は正規の第一頭蓋

位第一胎向第一分類にして左側臍下に於て明に胎兒心音を聴取し百四十六至を算す、左右前腋窩線に於て腋窩に近く色素の沈着せる小豆大の各一個の副乳を認む

臍圍 八四 cm、 宮基底圍八二、五 最大腹圍(臍下

六 cm)八五、 臍耻骨上際間距離二〇 臍劍尖一七、

臍宮基底一〇

左右腸骨前上棘二四 腸骨櫛二六 外結合線一八、

翌日入院、日々彼は其無聊に苦みつゝありしか全月二十

八日夜輕微の腹痛あり、二十九日晝全く止み夜九時頃よ

り陣痛再び發作し其分娩前驅期なるに係らず間歇時却て

短くして發作稍長く宮基底は臍劍尖の中央に位し左方に

胎兒の大部分を右側に小部分を觸れ、上下に移動せざる

兒頭は恥骨縫際の後に在りて尙少しく左右に移動し、臍

下白條に近き部に於て心音百五十至を聴けり、十二時内

診せし所によれば子宮腔部は少しく短縮せるも尙約二 cm

を有し外口未だ開大せず、前穹隆部を隔て、兒頭を觸る

ゝも顛門は明あらざりき、

三十日、午前零時廿分兒頭全く骨盤に箝入して上下左右に少しも移動せざるに至り、陣痛發作は前に反して甚た間歇時よりも短くなり僅に三十秒乃至一分を計へ三時半頃よりは一層微弱となり産婦は鼾聲を放ちて睡眠を貧るに至る、朝八時四十分導尿の爲陰部を檢せしに股間及大腿内面に於て血液を混ぜし粘液の附着を認む此際宮腔部は胎胞狀に腔腔に向て膨隆し長さ五 cm 斗り之を隔て、兒頭を觸るゝも顛門並に縫合全く明ならず、外口は消息子徑大に過ぎずして口縁硬く柔軟ならず、尿量五百瓦を得たり、九時半頃よりは發作漸次瀕々となり發作間歇各一分を示し、十時二十分陣痛に伴ひて黄色の軟便中等量を排泄す、十一時に至ては外口は既に一圓銀貨大に開張して胎胞は膨隆し來り宮口縁左方二—三 cm、后右方三—四 cm、を存し、卵膜を隔て、兒頭を觸れ小顛門は宮口の左前方に矢狀縫合の其后方に走る、内診中一回強き陣痛來り宮口俄に開大して口縁凡ろ一 cm を減せり、大顛門は尙高くして觸るゝこと能はざりしも腰部を少しく擡舉せし

めたるに僅に之を觸接せり、十二時第二回の排便あり、之より陣痛發作毎に不隨意に糞便を漏らすに至れり、午後一時、卵膜は何時の間にか自他共に知ることなくして破れたりと覺しく兒頭を直接指頭に觸れ、産瘤の發生著しくして宮口全く開大し小顛門は僅に前左方に矢狀縫合は少しく右后方に在り、大顛門は觸れざるも産瘤は小顛門の右前顛頂部に在りて后方より前方に膨出し、脣裂を通過して外方より僅に頭髮を窺ふを得るに至れり、一時廿分腹部濕性熱法を施し併せて按摩を行ひしも陣痛催進することなくして寧ろ微弱となり軟便のみを却て絶へず少量を漏らすに至れるを以て偲利攝林院腸をなせしも排する所少かりき、二時四十分に及んては小顛門は前方に耻骨縫際の直後にありて僅ま之を觸れ矢狀縫合は后方に在りて全く骨盤の前後徑に一致し陣痛は稍強くなれり、四時半大顛門は明に觸れ得るに至り、母体の右側に兒頭の右耳を觸知す、心音百六十二至、空腹の訴により産婦に鶏卵を與ふ、

爾後陣痛發作更に強盛すること無く、傍觀的態度に到底自然的娩出を遂行し難しと決し七時エルゴチン液一筒注射、次て又一筒を注射して鉗子手術の前驅となす、此際兒頭と産瘤との關係を見るに小顛門は下隆せしと雖少しく右方に偏し所謂彼の過剩廻轉をなしたるものなるを以て指頭にて之か矯正に力めたるも容易に整復し得ず、乃ち鉗子一葉を法の如く貼せしに幸に特種の抵抗を見ることなく挿入するを得、且つ之か爲に兒頭は稍整復せしに依り更に他葉を挿入し兒頭の過剩廻轉を正復しつゝ稍大なる力を以て全く娩出せしむ、時に夜八時なり、胎兒は仮死の状態に在り、諸師の人工呼吸法も其効を奏せず敢なく事ついに休せり、而して充分なる保護法を施せしにも關せず、高年の初産婦に間々少からざる會陰破裂を起せり、八時半后産クレーデ氏法により娩出、終て腔内及外陰部を清拭し、縫合を行ひ、沃度仿膜末を散布し、ガゼを當て丁字帶を以て固定し腹帶を施したるに、産婦は頗る平穩安靜に經過せり、

胎兒は成熟したる女性死胎にして、

身長四八 頭圍三三 胸圍三三 縦徑一二 大横徑八、

五 小横徑八 大斜徑一三 小斜徑一〇、五 体重八七

〇奴

臍帶長四七 胎盤重量一二五奴 胎盤長徑一八 短徑一

四 周徑五五

第二例、十二月八日午后市内開業の某醫來て曰く一昨六

日午後四時頃より陣痛發作せるも、宮口は五厘銅貨大よ

り更に少しも開大の徴なく加之危険なる舊産婆か徒なる

内診を無暗に行ひし爲既に破膜せしかとも思はるゝ三十

七才の初産婦あり或は帯切開術にても要すべきことは思

惟するに就産婦及其一族の承諾を得來れり、希くは入院

手術を望むと、小川醫長快諾、午后五時すなはち入院せ

しむ、

慶應三年十月八日生の体格榮養共に中等のハンカチーフ

工、十四才三月天癸こゝに萌し持長四日常々整調にして

其量中等、何等の障害をも覺むざりしか四五年前半年余

經閉せしことあり、昨年は概ね隔月一回潮來し、本年二

月廿日頃より四日最終月經あり、十四才十一月初て夫を

迎へたるも其後數回の變遷あり、經閉以來妊娠月數の進

むに従ひ腹部膨大するの外、經過極て正中毫も訴ふべき

症状なく食慾常の如く進み精神亦快活にして依然其業に

勤めり、

外診上第二頭蓋位の第一分類にして、子宮基底は稍低く

胎兒心音は臍下右側に於て百六十至を算し、母体脈搏百

二十經、体温三七、三度陣痛は發作一分、間歇四乃至五分

なり、自然に放尿し難きにより不取敢導尿二百五十瓦を

得たり、骨盤の大さ腸骨前上棘二六、五腸骨櫛二七、五外

結合線一六を有し、稍扁平骨盤なるを知らしむ、

六時二十分ゾール腔内洗滌を行ひ内診す、宮口は既に

一錢銅貨大に開大し兒頭は下降して全く骨盤上口に固定

し少しも移動せず、宮口縁は前下方厚くして〇、五cmを有

し后方は菲薄なり、又前右方之短くして后左方に向ひ少

しく長く、前方耻骨縫際部は最厚し、矢狀縫合は后右方

より左前方より走るも大小顱門は産瘤の爲觸れ難く、后頭は耻骨縫際の後に在り、宮外口は其大さ一圓銀貨大にして卵腫は既に破れ直に兒髪を觸れ、産瘤大にして兒骨高く位せり、全四十五分浣腸を施し灰白色の糞便稍多量を排泄す、

開口期斯の如く進むも陣痛弱くして發作數十秒乃至一分間歇時數分乃至十分に互り、兩三日來苦痛と不眠に惱まされたる産婦は其疲勞と腕力の爲に不知不識睡眠を貪るに至る、九時腹部熱鑿法を施し陣痛を催進せしむ、十時五十分發作稍強し、大顱門は高くして尙觸れ難しと雖小顱門は前方耻骨縫際の下に在り、矢狀縫合の産瘤の爲觸れ難く、子宮口縁は厚くして柔軟ならざりしも陣痛の進むに従ひ大小顱門亦觸るゝに至れり、十一時四十分短艇形の据風呂にて仰臥位の儘攝氏四十度の温浴を取らしめたるに心身の爽快を覺ゆるや太し、翌九日、午前一時腔内温浣注を施しひたすら陣痛を催起せしむる所ありしに産瘤は益大となり大顱門は一層觸れ

易くなれら、更に石鹼浣腸よて便通をこかりカテーテルにて排尿をなすも陣痛弱くして發作また分を超わず、厚くして柔軟ならざる宮口縁は開大頗る難きを以て二時半鈍刀にて周圍切開を試む、三時半エルゴチン注射、陣痛の増劇殆んど望むべからず、是よりささ細頻となりたる胎兒心音は程なく全く聴取し得ざるに至り、産瘤は漸次弛緩し初めたるを以て最後の手段として穿顱術を行ふ事に定め剪狀穿顱刀を以て矢狀縫合を通して腦質を破壊しイルリガートルにて洗出し、更にクラニオクラストにて破れたる頭部の娩出を計り、肩胛部以下は直接手を以て之を補け四時娩出、産婦いと安靜なり、后産は十分を経て全く娩出し終れり、胎盤重量一二四匁 胎盤長徑二〇 短徑一七 厚徑二周徑六三 臍帶長三五且つ破碎したる兒頭を有せる死胎は顱頂部の骨片端より身長四三、重量五一五匁、胸圍三二、兩中指間四六を呈せり、

第三例、三十六才八月生の初産婦、金澤市大衆免町八田某、十六才一月月華開きたるも頗る不順潮亡遅速極て不完なり、本年三月二十日頃一日半月經あり、爾來經閉せり、妊娠経過は通常にして何等の異状をも起すことなかりしに二十日余前より消化障害を來し一日四五回下痢し且つ全身は顔面より浮腫し初め、渴、食機不振あり、倦怠衰弱の爲目下歩行するを得ず、以上の訴により十二月九日入院治療を乞へり、

体骨中等にして榮養不良、全身一汎に軽度の浮腫を呈し衰弱の狀著しく身体の自由も殆んどまゝならぬ有様をなし、乳房緊滿、乳暈の着色著しく腹部に其初妊に係らずいたく弛緩し妊娠痕著明なり、腹壁菲薄にして胎兒の觸れ易く腹部膨大と妊娠月に比して小にして子宮基底は臍上三指横徑により、胎兒は大部分を母体の左側に小部分を右側に觸れ兒頭は下降するも尙少しく移動し、臍と左腸骨前上棘結合線の中央に於て心音百四十四至を搏ち母体脈搏八十至、体温三六、八度なり

試に腹部及骨盤の計測をなせしに、

臍圍七五cm、臍耻二一 臍劍一五 腹壁高三、五 両乳頭間一九

臍骨上棘二三 臍骨櫛二五、五 骨盤前後徑一七、五 大轉子二五 骨盤周圍八四、

十日、午前八時頃より腹部微痛ありしが夜に入てより發作性となり其間歇時の如き長短不正にして一向規する所なかりき、十一時粘稠にして少しく赤色を帶ふる粘液を漏らしたるにより、内診を行ひしに兒頭は下降して骨盤に箝在するも尙少しく上方に提擧し得、子宮腔部は柔軟にして殆んど消失し、鉛筆徑大に開きたる宮口と陣痛時緊張して指頭大となり、口縁平等に菲薄なるも大小顚門及矢狀縫合は穹窿部を隔て、觸れ難く、胎位は昨と同一にして臍下左側に於て心音百四十至を算せり、之より陣痛は發作稍長く間歇短縮し反復して來れり、翌十一日午前三時よりと陣痛少しく劇しくなり疼痛及渴を覺ゆること著しかりしに四時十五分羊水少許を漏せ

り、宮口の大きさは前と異らざりしも發作時卵膜は外口より突出し矢狀縫合は弛緩の際稍左前方より右后方に僅に觸れ得るに至れり、母体脈搏七〇至体温三十六度胎兒心音百四十至、九時半多量の便通あり、産婦少しく安眠是より先數回の導尿を施し五〇―三〇〇瓦を排泄せり、十一時子宮外口は容易指頭を挿入し得るに至り、口縁平等に柔軟、穹窿部を隔て、兒頭を觸るゝことを得、發作時には倍大となり胎胞亦緊張して突出し矢狀縫合は少しく左前方より右稍后方に亘るを穹窿を隔て、觸知し得るも顚門は未だ觸れ難く心音百五十至なり、午后三時過攝氏四十度の全身浴を施す、産婦頗る爽快を覺ゆ生來斯る心知の快かりし事會て見ざる所なりとていたく喜を湛え満足を表せり、まことや社會下層の常として幾週日入浴せざりし身の、思ひもかけぬ斯る場合に用意深き方法の下に入手に據りて入湯を試みらる、其喜ころげにさるべき道理なれ、かくて陣痛の發作は一時靜歇せしも次て少しく烈しくなれり、而も夜十一時に及んで宮口尙五厘銅貨大

に過ぎず、

産機や進行極て遅々たり、陣痛ハ此の如く一弛一張強弱其規を得ずして遂に翌十二日をも空しく暮せり、此夜十一時子宮外口は開大して一圓銀貨大に達せり、

十三日、午前零時十五分より陣痛發作は延長し來り五―六分、間歇三―二分となり、發作時に伴ふて其努責につれ絶へず黄色の軟便を漏せり四時稍一時的的精神興奮狀あり而して陣痛頻々反復いよゝゝ烈しくなりて殆んど其間斷を見ざるに至り六時半破水せり全く開大したる宮口より直に兒頭を觸れ、大顚門は后下方より小顚門は耻骨縫合より稍左方に、矢狀縫合は左前方より右后方より走り、産瘤小なりき、

便通の利するや此の如く、度々の導尿は膀胱充盈の憂を來す恐なく、牛乳鶏卵鹽里母赤酒等其食慾に應して可成之を取らしめ數個の湯タンポは放温を防ぐに餘あり、而して娩出や其間幾分時の後に之を完ふすべきや、産婦は刻一刻疲勞を覺ゆ、人工的娩出を希ふや甚だ切にして死

を以て其苦難に代へと叫ぶに至れり、蓋し本産婦は前例中條某と曾知の間よして彼か人工的娩出術により九死に一生を得たるを聞き自ら進んで入院したるものなり、八時子宮收縮を促し陣痛催進の目的を以て腹部に熱罨法を施し更に其上より摩擦を行ひしに兒頭を漸く進み來りて陰門より僅に露はるゝに至れり、されど頻々起る陣痛を伴ふにも關せず兒頭はまた依然として其位置に止るに至りぬ、而して産婦の腕力はいよく甚しく脈搏細數時々欠滞し、不安の狀を呈するに及ひたるを以て、上膊にカシフル依的兒二筒を注射し且つ導尿をなす、時に胎兒心音百五十六至を呈せり、

十時十五分下腹部にエルゴチン二筒を注射せしも不正なる陣痛發作は今や殆んど全く停止し胎兒心音百六十二至を算し、胎兒のみならず、母体の危険もいやが上加はりたるを以て其自然的分娩經過を待たんことは最早望む能はざる所、乃ち人工的鉗子娩出術を行ふに決し、法の如くして可なり大なる抵抗の下に十時三十分男性胎兒は

仮死状態にて生れたり、蘇生法は施されたり、須臾にして初生聲高く室外に響くに至れり、兒の發育不良皮下脂肪乏しく妊娠に應じて稍小なり后産は壓出法により娩出せられたるも胎盤卵膜臍帶等に異常を認めず、産婆の注意周到なる會陰保護法も其効を全ふせず不幸にして第二度の破裂を起すに至れるを以て直に之を縫合せり、産婦は分娩后安靜にして、さきの苦悶状態は全く逝き去り、只深く感泣するのみなり、

胎兒身長四二 体重四八二匁 頭圍三一 胸圍二七 縦徑一一 大横徑八、五 小横徑八 大斜徑一三 小斜徑九、五

臍長四〇 胎盤重量九五、匁 長徑一七 短徑一五、厚徑二 周徑四五、

吾人が分娩に際して最細心注意すべきものは娩出力と抵抗力はなり、娩出力は主として不隨意に發する子宮筋纖維の蠕動的収縮と、並に腹筋及横隔膜の収縮による腹壓とに因り生ずるものよして、抵抗力は之か爲に排除せら

れんとする胎兒と産道の關係如何により生ずるものなり
 娩出力の大小や抵抗の強弱に準ずるものにして、其娩出力は仮令同一婦人に於ても年齢體質營養の狀態、生活及精神的狀態、分娩時の体位姿勢狀態等により異り、或は強く或は弱く或は其當を得るの別ありて、陣痛の過劇微弱、正規、時として痙攣を起すは全く之か爲なり、上記三例の如き正々其陣痛微弱に歸すと云ふべきか、蓋し陣痛微弱たるや其基く所、幾多の元因上種類あるべく、或は元發性に先天的子宮發生障害、子宮筋纖維發育微弱、全身体質虛弱、年齢の幼少、及高年の初産婦、多産婦殊に頻産婦に於ける弛緩性子宮、前置胎盤、羊膜水腫、双胎、急性若くは慢性子宮疾患、良悪各種の新生物、火傷及其他の損傷的癍痕等、或は又繼發性な胎兒の過大殊に兒頭の過大骨盤の狭小、子宮口並に膈の開大困難、便秘鼓腸尿閉等に於ける腹腔及骨盤内臓器の充滿、急激なる精神感動等、尙多くの元因あるべしと雖、要するに抵抗力の大きさに匹敵せざる子宮筋組織の動作よして分娩

爲に甚しく延長したるものに外あらざるなり、而して以上の三例に於て第一と子宮膈部の消失並に宮口の開大困難あり、第二は卵膜早期破裂を起し、第三は腎臓炎を有し且つ體質法弱なりと雖、何れも先天性に將た后天性他に著しき變状なかりしを以て見れば其高齡の初産なる實に陣痛微弱を由來せしものと謂ふべく、殊に第一例の膈部短縮の緩慢なる、宮口開大の遅延せる如きは高年者に於ける筋組織延展性の減弱に基くものと謂はざる可らず、通常初産婦に於ては經産婦に於けるよりも陣痛微弱の多き之に倍すと云ひ、今此等の三者は共に三十才以上の初産婦たるのみならず又實に初妊なり、之を以て其經産婦に比すべからざるは勿論通常の場合に於ける二十才前後の初産婦に比して時を経ることの長さ、終に自然的分娩を遂げ得ずして何れも人工的手術的補助を要するに至れるは、眞個に高齡と初産との關係の一端を推知するに難からずと謂ふべし(三十七年臘月草)

○ 醫談片々 (其の一)

志裳 無良生

是非、何でも宜いから書いて呉、この、雜誌係からの注文、其れでは宜しと、引受けたもの、遣て見れば仲々出来ぬ、漸く之等の聞いた話や、日頃感じた事や、其他いろ／＼の、出鱈目を並べ立つたが、もとより笑はるるは覺悟の上なり

○ 醫學生の一般を見ると、卒業証書を得るのが、唯一の目的の様に心得て居るものが、大ぶ多い様だが、斯様な先生たちの氣が知れない。反古一片の証書を非常に有り難たがつて、之れさへ得れば我事既に成れりと云ふ様に意氣揚々たるのは、何んと馬鹿げて居るではないか。少しは考へて見るが宜い、卒業と云ふ名は空名ではないか、今迄學んだのは唯醫學の端緒のみでは無いか。其れで今日は、實力競争と云ふ世の中であることを氣附いたならば、卒業と云ふ名ばかりに酔ふても居られまい。

○ 勿論卒業の吾人の一大事である事は云ふ迄もない話であつて、將來新らしい生命と、新らしい智識とを興ふるものは此の卒業である。又吾人を墮落せしめ、吾人を卑

屈に陥らしむるものも此の卒業ではあるまいか。されば此の卒業証書の中には、單に卒業其のものよりも、更に大なる責任てふ要求が含まれて居る事を、注意して貰はねばならぬ。

○ 首尾よく學校の方は卒業して、さて愈々開業する様になると、専門的の雜誌でも碌に見られぬものだと云ふ話だが、今日日進月歩の醫界に立つからは、雜誌位は見えて居らなければ、世の風潮に従ふ事が出来ぬだらう。▲ろれで僕の知つて居る醫者だが、雜誌を取るでもなければ、また書も讀まぬらしい、いつ行つて見ても、聽診器の外何にも無いと云ふ様子であるが。此の先生「クレヲソトは肺結核にさくさうだが、何う云ふ譯だらふ」と云ふ様な話を持ち出したので、忽ち界限の醫者社會の評判となつた。此の先生であつた、結核患者と聞いたたら大の禁物で、疑こしい病人の來ると、震ひ上つて近所の醫師の所へ追ひ遣るさうだ。

○ 夫れで彼様な前世紀の醫者先生の、大ぶ多い様子であ

るのは嘆かほしい次第だ。いつや或る醫會が開かれた時、顯微鏡が出された事がある、叩へて居ればよいのに、左様な先生に限つて見たがるもので、大事の標本を忽ち碎はして仕舞つたげな。

○偕て此の前世紀の醫師となるのは、誰れにでも易々たる事で、輕車に駕し美髯を蓄へ、所謂是れ當世の好紳士とあがめらるゝ様なものでも、少し研學を怠つたなら、直ぐ其の方へは及第し得らるゝものださうな。

○僕の友人であるが開業試験に及第したので、眼科専門としてさる所に開業することになった。勿論其地には眼科醫は多かつた。夫れで一日訪問した時に「ナゼ面白くもない眼科などを遣るか。」と云ふたら、其の先生の言草が面白い。曰く「眼科は患者の生命に係はる様なものではない、従つて評判を落す様な事も少ないので、やり易い」と。成程一理ありだわい、斯様な先生に雇るのは危険で堪まらぬ。

○開業した當時には、随分患者がためしに来るものださ

うだ。夫れで話に出た眼科の先生まだ開業した當時であつた、その村の或る若者が晝寢して起きた許りの時に、眼をこすりながら其の先生の所へ見て貰ひに行つたとさア。其處で眼が痒いと云つたか、痛いと言つたか其邊は知らないが、其の先生得意になつて、一診のもとに直ぐトラホームとやつたので、それが忽ち評判となつた。

○極まりきつたる話ではあるが、醫師たるものと學問ばかりでもいかぬ、勿論技倆ばかりでもだめだ、交際も必要だらふ、又御世辭も必要だらふ、其の中でも信用と云ふものが別けても肝腎だ。病によりては、信用のみで治る様なことがいくらかもある。又不治の病とさまつて居るものでも、信用よつて其の者の命を長くすると云ふ様な事もあるまいか。それで、患者の方から、あの醫者に雇れば死してもよい、と謂はる様になると、所謂病人よ安心立命せしむると云ふ様なわけで、恚うなると醫師は、醫師兼僧侶又は醫師兼牧師とでも謂つた様なものだ。

○夫れで僕の知つて居る醫師で、一時の大ぶ評判も善く

て朝日の昇る勢でハヤリ出したが、先生義理ある妻に對しては非道の事を爲すやら、他の女には手を出すやらで、爲めに切角築き上げたる信用も、名聲も、頓と墜して了つた。いくら學問が出来、技倆があるからと謂つて、恠んな没徳の醫者に罹つて死にたいと云ふ病人があるであらふか。

○病家へ臨んで、直ぐ問はるゝものは、病名と豫後だらふ。さて此の豫後と云ふものゝ、醫士に取つては尤も必要なるもので、又尤も六ヶ敷ものである。其豫後の的申すと、せざるごと、直ぐ醫師の信用と云ふ点に係つて來るので、實地醫に取つては殊更に注意して貰はねばならぬ。それで此の豫後を上手にさめると謂ふには、何うしても學問が必要で、多くの書物を讀んで居なくては駄目だ。彼の美服や甚ど壯、金時計や甚だ美、鬚髯や甚だ可、と云つた様な調子でも亦如何せんやで、口舌徒らに長ずと雖とも到底胡麻化せない▲此の豫後を謂ひ渡すのは、丁度裁判官の判決を下す様なもので、此の時の醫師

は、運命を支配する天帝の宣告者の様なものだらふ。

○長く病^{ヲス}らつて居る患者が、掛々しく治らぬので、醫者を代ゆることがあるだらふ。夫れで前の醫者の附けたる病名や、與へたる藥の摸樣などを問ふのは、大抵の醫者のする所であつて、また患者の方からも是非云ひたがるものである。所で診察の結果は矢張前の醫者と同じであるのよ、わざと異なる病名を附けて置き、陰では眞の病に對する療治を爲て居る醫士があるさうだ。其處で少しでも善い方へ越くと云ふと、先生直ぐ得意になつて、前の醫者の事を何んとか彼とか種々の罵評を加へるので、患者の方では其れを眞ま受けて、此の先生仲々エライ……▲書生さんが下宿屋の二階で、意氣軒昂盛んに露國を亡さん謀をめぐらして居るよりも、策の上々たるもので、恠う云ふ名案ハ出まいテ。

○僕は都會の地で開業する事は何んだか好かぬらしい。と云ふのは、例へ田舎にもせよ勉強さへ爲て居れば、敢て日進醫學の風潮に後れはずまい。成程都會の地には患

者が多い、収入も多い、研究の材料も多い、又田舎よりも意氣で、ハイカラ的で善い。然し考へて見ると、都市には既又既に多くの醫師があるので、其の中へ初めて乗り出すのだから、ヨシ技倆學識は高しと自信することも、

一時世人の信用を得る事と逆も先進醫師に及ぶまい。然も生活程度も高い、交際費も多い、而已ならず輕車も整へざるべからず、美服も作らざるべからず、玄關も構はざるべからず、之等の有形的競争の爲めに、大ぶ骨が折れる。其れに収支償はずとでも來たら、其れこそ台所は火の車で、學門修養とこの話でない。之れに無形的の競争の加はるので、反目する、嫉視する、中傷する、讒誣する、罵辱すると云ふ様になる▲嗚呼、閑靜氣樂なる茅屋中に、心長閑かに書を繙き得る、田舎住居の何れぞや。

○然し氣概ある有爲なる諸子は、單に僕の如き考で、徒らに僻陬に隠れんとする様な引込思案を出す勿れだ。宜しく醫界の舞台に乗り出して、専門的技倆を奮つて貫ひ度い。學界は公平なるもので、學閥に私しない。勉強し、

經驗を積み、アルバイトを出し、醫學に忠實ならば、何にもさう恐るゝものもあるまい。引込思案をするにも及ぶまい。

○我々は小學校中學校で歴史を學んだ様に、吾人醫士たらんとするものは、今日の我が醫界が如何に變遷して來たか、宜しく其の歴史を尋ねて見ねばなるまい▲吾人は學ぶならん、古の漢方醫は西洋醫に葬られて了つた事を。吾人は學ぶならん、昔の開業醫の現今門前雀羅を張つて居る事を。▲斯如き簡單の歴史よ、しかも之れが如何なる事を吾人に教ゆるか……▲眼を轉ぜよ、而して現今の醫育の階級ある事を見よ。彼の醫學士先生は年と共に増加しつゝ、其の肩書の看板を振り立つて、ぞしく押し出して來るではないか。それで得業士は遠き將來に於て、否々近き將來に於て、此の肩書の爲めに益々追窮せられ、愈々肉迫せられ、終には田舎へでも立籠り、餘勢を張つて居らねばならぬと云ふ様な時代が來るだらふ……(?)▲是れ之れが歴史の教ゆる所よ、此處に至つて

吾人豈覺悟なくして可ならんやだ、意氣地なる青年諸子よ、近き將來に於て此の事あるを知りつゝ、拱手傍觀し得る乎……………。

○之等の事柄は、敢て肩書其者のみよ依るでもあるまい。實力競争に依る自然の結果が然らしむるのであらふ。然り、しかし單よ實力競争其者のみに依るでもあるまいよ……………。未だ社會が肩書崇拜の癖が去らざる以上は、否々將來長く此の習慣がある以上は、意地よも之れを打破せんずる決心無くてこなるまゝ。

奮へよ慨ある我が青年醫よ、
立てよ熱血ある我が青年醫よ、

春秋に富む余力を以て、

勉強てふ唯一の武器を以て、

睡手奮進するところ、

先進の徒何ぞ恐れんや。

肩書の士何ぞ恐れんや。

* * * * *

○誰れでも初めは大なる希望を懷き、大なる決心を以て進むので、雄心落々天を衝き、霸業堂々世に響かせん、ずる勢仲々すさまじいものだ、夫れていつても慙ふ云ふ工合に進んで貫ひ度いのだが、少しでも思ひしからずと來ると、忽ち失望する、悔恨する、慚憤するのである。されどされども我が友よ、失望する勿れ、悔恨する勿れ、憤慚する勿れ、汝恰も大海に漂ふ小舟よ……………。

波瀾怒濤の大海よ、

乗り出したる汝が小舟。

前途は如何に遠くとも、

前途は如何に暗くとも、

研ける腕よ穢取りて、

最後の港に着けよかし。

希望の星を目ざしつゝ、

* * * * *

○田舎で開業せらるゝ諸君に申すだが、田舎でい未だ専門ばかりでも面白くあるまい、否面白黒と云ふてはない

が、患者が尠ないので、従つて内科なり外科なり眼科なり總ての方面へ手を出さねはなるまい。恚ふなると充分の事は出来ぬ、出来ぬのは勿論の事で、之れを責むるのは却て間違だ。それで内情は充分御察し申すが、然し是非願ひ度いの、其の病氣に就て十分能く知つて居つて貰ひ度い事だ。それから、自分の手で治療の出来兼ねる様な病人は、直ぐ専門醫なり病院なりへ送る様に爲て貰ひ度いものだ。

○自分の力の及ばぬものを、名譽又係はると云ふ点から打算したか、藥價を得らるゝと云ふ点より打算したかは知らないが、徒らに自分療治の下に患者を苦しめ、終には手も附られぬ様を爲て仕舞つて、初めて病院等へ送ると云ふ様な醫師がありはすまいか。いくら人の事だからとは云ひ、其れでは餘り無慈悲の仕業でないか。いくら名譽又係はるからと云ひ、其れは自分の考が曲つて居るではないか。其れを只山鳥の尾の長々しく患者を苦しめ、煩悶せしめ置くと云ふのは抑々何事だ。況してや、人の

困苦を自己の奇利に轉せんとする如き鄙劣の行爲は、愈々以て許すべからずだ、

○暑中休暇で歸省中の事であつた、或る醫師が遊びに來たので、四方八方の嘶から、珍らし患者でもありませんかと云ふ様な嘶に移つた。先生頻りにゼツジョーガンシユと云ふので、何の事だか一寸も解からぬ、聞いて見ると、吾に出来る腫物と云ふので、初めて舌の癌腫と云ふ事か解かつた。それで「此の患者があるが何ふすれば宜いか」と問はれたので、其れは舌剔出か舌切除より外に仕方があるまいと云つたのである。そこで先生曰はく「僕も切開すればよいと云ふ事は聞いては居るが、して見ると其の切開之僕には出来ないナア」と云ふて居つた。それで今はどんな療治を爲て居るかと聞いて見ると、先生數ヶ月も只含嗽させて置いたとさア。愈々以て險呑の次第、恚う云ふ名醫に罹るまは、先づ自分の命を差出してからで無いと、馬鹿を見るテ。

○木村博士に長く仕へて居つたる外科の老小使、大ぶ能

く知つて居るので、四年級生徒の頭を傾げる程のもので、一見診断を附ける様な事がある。之れが是れ、一見百聞不若とでも云ふべきものだらふ。▲ろれで或る學生が、開業試験でも受けたらどうだ、と謂ひ掛けたさうだ。すると先生「もう五六年も若かつたら、さうする所だつた」と、溢したげな▲この小使先生、手術も見て居るから刀も取り得るだらふし、田舎へでもつれて行き、フロツクコートでも着せたなら、頭を禿げて居るし、体格はよし、一見経験を積んで居る大先生に見ゆるだらうテ。其處で「於多年金澤病院奉職中……」とでも公告したなら、定めて患者が多からふテ、云つたものがある。(小尾)

* * * * *

天地非新人物新。有爲時節是青春。

我儕自命爲英傑。進步暇暇速似輪。

* * * * *

(兩城)

孤 録

○北豐吉氏ドクトル學位請求

論文ノ梗概

本會贊助會員北豐吉氏ハ一昨三十五年二月獨乙遊學ノ途ニ上ラレライプチヒ大學ニテ衛生學研究中ナリシガ、昨年三月「米飯ノ微生物體及ビ腐敗ニ就テ」ナル論文ヲ提出シ目出度同大學ニ於テドクトルノ學位ヲ獲ラレタリ、今該論文ノ概畧ヲ摘マンニ、スベテ八項ヨリナリ、緒言トシテ日本ニ於ケル米飯ハ歐米ニ於ケルソレノ如ク必要欠クベカラザル食物タルヲ廻ベ、米ノ産額、日本酒ノ製造基タルヲ、代價、日本一日ノ需用量、米飯炊製造法ノ詳細、炊具ノ種類構造、米飯ノ成分、米ノ成分等ヲモ説キ、米飯ノ研究ハ日本人ニ取リテ非常ニ必要有益ナルベキ事ニ及ボセリ、本文第一項ニハ米飯中ニ於テ尙生活微生物ヲ含有スルヤ否ヤノ問題ヲ決定センガ爲メニ數種

ノ試驗ヲ施行セルコト、第二項、米飯中ニ發見セラル、
 微生物ノ種屬ハ如何テフコトヲ確定シ、第三項、米飯中ノ
 微生物ハ枯草菌ニシテ其菌數ノ多少如何ヲ測定シタリ、
 第四項、米飯中ニ於ケル枯草菌ノ増殖及米飯ノ腐敗ニ關
 シテ實驗シ、第五項米飯中ニ於ケル枯草菌ノ發育ニ對シ
 テ寒冷ノ及ボス影響ニ就テ、第六項黴菌ノ發育ト乾燥ト
 ノ關係、第七項冷却及ヒ乾燥ガ同時ニ作用スルハ黴菌ノ
 發育如何、第八項么微生物ト氣圈トノ關係等ニ就テ論述
 シ、最后ニ結論ヲ擧ゲタリ、(國家醫學會雜誌第九十六
 號抄録欄ヨリ)、以上ハ唯論文ノ項目ニ過カザルモ、尙氏
 ニ乞フテ其全文ヲ掲載スベシ

○垂胃ト大胃ニ就テ

(醫學士高田研安述、日本消化機病學會雜誌

第二卷二號)

第一項 無害性垂胃ノ多存ヲ論ズ

其一、本邦成人三十八人ノ檢胃ニ於テ七人(18%)ノ垂
 胃アリテ皆運動障礙ヲ有セズ又其ノ六人ハ自覺胃症

ヲ存セズ自餘ノ一人ノミ只ダ之ヲ有シタリ

其二、一昨年檢胃本邦成人(只一人ノ洋人ヲ交ユ)二百
 三十一人中垂胃百五十四人(66%)アリ就中自覺症狀
 ナキモノ百七人(46%)ナリキ

第二項 大胃ノ多存セルヲ論ズ

其一、上記三十八人中十八人(48%)ノ大胃ヲ見タリ皆
 其ノ大彎ヲ臍下ニ存小彎ヲ肝後ニ藏シ而シテ運動障
 害ヲ呈スルモノナク其他デヒヨ一氏法ヲ試ムルモ胃
 筋衰弱ノ徵候ナク便通狀況ニモ特別ナル變化ヲ存ス
 ルナカリキ

其二、上記二百三十一人中ニハ五十(22%)ノ大胃アリ

第四項 本邦人ト歐洲人ノ胃ノ大小ノ比較ヲ論ズ

其一、パカノオスキ一氏カ歐人五十八人ニ於テ水ヲ飯
 マシメ打診シタル結果ニ對照スレバ彼我ノ胃ノ大小
 全然相一致セリ只女子ノ胃ノ橫徑ニ於テ本邦人ハ彼
 ニ勝ルコト二仙米ノ差アルノミ是レ絞搾胸ノ影響ナラ

ン

其二、其他胃高徑及横徑共ニ其多極及少極ニ於テ此檢定シタルモノ彼ニ勝リ只男子ノ胃ノ高徑ノ多極ト女子ノ胃ノ横徑ノ少極トノ相同ジキハ氏ノ檢定シタル人員彼ニ比シテ三倍以上ニ上レルノ影響ニ他ナラサルナリ

其三、歐人ト本邦人ト躰格ノ大小相等シカラサルニ拘ラス胃ノ大小相同シキハ其原因ヲ檢査法ノ差異ト常食品ノ種別等ニ歸セサル可ラズ

○糞便檢査ニ於ケル寄生蟲卵

第一統計報告

(佐伯公之助氏述日本消化機病學會雜誌第二

卷三號)

一、寄生虫卵相互數ノ關係

總檢査人員敬千四百十六人、寄生虫卵ヲ有スルモノ總

檢査人員數ニ對スル五〇、二一%即約二分一

A 蛔虫卵

二一、四四%

蛔虫卵十二抄腸虫卵

六、四二%

全 肝ヂストマ卵

〇、五六%

全 全

十二指腸虫卵

〇、五六%

全 十二指腸虫卵廣節裂頭蠃虫卵〇、〇七%

全 廣節裂頭蠃虫卵

〇、〇七%

總蛔虫卵

二九、〇六%即約 $\frac{1}{3}$

B 十二指腸虫卵

一六、五五%

全 十二指腸虫卵蛔虫卵

六、四二%

全 肝ヂストマ卵

一、九〇%

全 蛔虫卵肝ヂストマ卵

〇、五六%

全 蛔虫卵廣節裂頭蠃虫卵

〇、〇七%

總十二指腸虫卵

二五、三四%即約 $\frac{1}{4}$

C 肝ヂストマ卵

二、一四%

全 十二指腸虫卵

一、九〇%

全 蛔虫卵

〇、五六%

全 全 十二指腸虫卵

〇、五六%

總肝ヂストマ卵

五、二二%即約 $\frac{1}{20}$

D 廣節裂頭蝨虫卵

〇、四三%

全 蛔虫卵

〇、〇七%

全 全 十二指腸虫卵

〇、〇七%

總廣節裂頭蝨虫卵

〇、五七%即約 $\frac{1}{175}$

E 無鉤蝨虫卵

〇、一四%即約 $\frac{1}{740}$

氏ノ鞭虫卵ヲ表記セサルハ本卵ガ非常ニ多クシテ毎檢便中ニ寄生スルニ因レバナリ云々 (以上二項つとむ生抄)

〇 病理學

〇 肺二口虫ヲ寄生スル肺臟ノ彈力纖維ニ就テ (山崎義

雄述東京醫學會雜誌七ノ二三)

肺蝨ヲ寄生セル猫犬及人体ノ肺臟ニ就テ彈力纖維ノ状態ヲ檢査シ單ニ加答兒性炎ヲ呈セル部分ニ在リテ氣胞壁ノ彈力纖維ニ著明ノ變化ヲ見ズト雖モ肉芽組織ヲ増殖スルニ至ル時ハ乃チ彈力纖維ヲ消失スルモノナリト云フノ成績ヲ得タリ

〇 本邦尙僂病ノ病理解剖論 (藤波鑑氏述東京醫學會雜

誌七ノ二四)

初メニ本邦ニ於ケル尙僂病ニ關スル諸說ヲ叙シ次テ患者ノ病歴、解剖及組織學上研究ノ成績ヲ詳述シ本邦ニモ亦眞性尙僂病ノ存在スルヲ証セラレタリ、

〇 夢物語 (信山氏述日本醫事周報四六三)

病理解剖學ノ必要ヲ論ジ醫術開業試驗課目中ニモ加ヘラルベキ理由ヲ叙シテ二三ノ實見談ヲ記載セラレタリ (以上三渡邊抄)

〇 原發性肝臟腫兼籠形二口虫寄生ノ一例 (鵜飼二郎

述中外醫事新報五七〇號)

氏ハ新潟病院ニ於テ解屍ニ附シタル原發性肝臟腫ニ關シ澁川學士ト共ニ其檢索シタル所ヲ報セラレ今又單リ癌腫ヲ有シタリシ而已ニ止マラズ猶籠狀二口虫ヲ寄生シタリ点ニ於テ前者ニ比シ興味更ニ深大ナリトシ之ヲ報告セレタリ

〇 那々條蟲(萎小條蟲)ニ就テ (和仁眞一述中外醫事新

報五七〇號)

氏ハ明治三十五年三月左記第一患者ノ糞使ヲ顯微鏡的檢査中偶然一種ノ蟲卵ヲ發見シ諸成書及報告ニ照シテ之ヲ那々條蟲ノ卵ト鑑定シテヨリ爾來總テ四名ノ患者ニ接スルヲ得タリ其中二名ハ事情ノ爲メニ之カ治療ヲ企テ能ハザリシト

第一患者明治三十五年三月十一日檢便 松崎某(四才)

第二患者明治三十五年五月廿五日檢便 S K (廿才)

第三患者明治三十五年五月廿八日檢便松崎ツ子(五才)

第四患者明治三十六年四月廿三日檢便大野武夫(九才)

以上四例ニ付キ各其既往症ヨリ各症狀療法ニ至ル迄詳シク之レヲ報告シ併セテ其寄生虫ニ付テ病理觸剖上ノ研究ヲ載セラレタリ

○多發性内臟肉腫標本供覽 (醫學士丸山震五郎藝備醫

事第九一號)

中○金○助 廣島市○村(嘉永二年五月生)漁業

右疾患ノ病歴ヲ舉グ屍体病理解剖記事ヲモ述ベタリ

(以上三、建部抄)

○藥物學

○「コンヂュランゴ」流動越幾斯ニ就テ (佐藤捨三郎藥學雜誌二六二號)

日本藥局方追加ニ收採セラレタル「コンヂュランゴ」流動越幾斯ハ獨逸藥局方第三版ニ準據シタルモノニシテ人ニヨリ其程度ノ考察相異ナルヲ免レズド之レ製品ノ比重及越幾斯分ニ一大關係ヲ及ボス原因ナリ從テ其用量ニ關スル質問等モアリキ本品ニ付テハ齊藤藥學士ノ報文アルモ獨乙藥局法第四版ニ日本藥局方追加ノ發刊アリ且獨乙ノ如キハ從來ノ法文ト其規ヲ異ニスルニヨリト稱シ氏ノ試製試驗成績及各國藥局方製法ノ概畧及從來ノ實驗ニ係ル成績ヲ記載サレタリ

○「グルコーゼ」ト「マルトローゼ」トノ分離法 宮川某(藥學雜誌二六二號)

エル、グリュンベル(L. Grunbert)ノ「グルコオゼ」ト「マルトローゼ」トノ分離法ニ關スル作業ノ結果ヲ公ニセリ氏ハ此兩糖ヲ分離スルノ法ヲ述ベタリ

○鹽化アドリナリンニ就テ (醫學博士保利真直藥石新

報四八三號)

氏ハ曩ニ本藥ヲ諸種ノ眼疾病ニ應用試驗セルニ其血管ヲ收縮セシムル作用ヲ顯著ニシテ且迅速ナルハコカインノ及ブ所ニ非ズ之レヲ結膜諸病ニ用ユレバ点眼后暫時ニシテ全結膜面ニ強度ノ貧血ヲ呈ス而シテ又眼深部ノ疾患ニ伴フ角膜周擁充血及ビ深層ヲ侵セル鞏膜炎ニ向ツテモ之ヲ數回点眼スルキハ其奏効亦著名ナリ尤モアドリナリンノ効力ハ一時性ニシテ長時間ニ亘リテ之レヲ持續セシムルヲ難ク且作用專ラ血管收縮ニ止マルヲ以テ結膜及角膜ノ諸病ニ對シテアトロピン、及コカイン等ト併用スルトキニ於テハ其効ヲ補助スルコト決シテ尠ナカラズ且諸種ノ手術ニ本藥ヲコカイント共ニ点眼若シクハ注射スレバ術者ノ妨害トナルベキ出血ヲ見ルコトナク自在ニ手術ヲ施スコトヲ得ルモノナリト論ゼシナリ

○麻醉劑トシテノ「ヨヒンピン」ニ就テ (アレキササン
 デル、ストルツベル中外醫事新報五六九號)

氏ハ右藥物ニ關シ生理的作用並ニ動物試驗等ヲ論ジ併セ

テ醫療上ノ應用ニ付テ詳シク報告セシナリ (以上四、建部抄)

○必苦林酸及其ノ鹽類ニ就テ (中村次郎氏述千葉醫專

校友會雜誌二七)

本品ノ來歴、製法、性質、鑑別、應用(ヒラリヤ虫ニ對シ)ヲ叙シ其ノ鹽類ノ二三ヲ述ベラレタリ (以上一、渡邊抄)

○內科

○肺ヂストマ病ノ一實驗 (渡邊信七郎、北越醫會會報

第百三十八號)

二十五歳男(能登鳳至郡住)ニツキテ該病ノ一實驗ヲ報告セルモノナリ

○稀有ナル麻拉利亞ノ一例 (齊藤政治、全上)

十一歳女ノ突然頭痛、及ビ意識喪失様ノ發作ヲ起シ且ツ嘔吐ヲ發シタルモノ、脾腫ヲ觸レズ、熱發作ナカリシモ、其後隔日ニ全様ノ發作ヲ起スヲ三回、氏ハ之レヲ麻拉利亞トナシ、鹽規ノ投與ニヨリテ治ニツケル一例ヲ報告セリ

○十二指腸虫患者ノ乳糜血尿様症狀ヲ發展シタル一症例
(黒田春吉全上)

氏ハ十二指腸虫病ト診斷セル三十五歳男子ニ就キテ、後乳糜血尿様ノ尿排泄ヲ發シタル一例ヲ報告セリ、而シテ細菌檢査上、膿球ノ外、結核菌、フイラリヤ、特種上皮細胞、脂肪粒、其他ノモノヲ証明セザリシト云フ、氏ハ疑フラク、十二指腸虫ノ泌尿系ノ或ル部ニ進入シテ茲ニ蕃殖シ、之レガ刺戟ニヨリテ膿尿ヲ惹起セルモノナラント

○破傷風患者血清注射ノ一實驗 (篠川保全上)

全身皮膚ニ於テ肉眼的ニ創傷ニ發見スル能ハザルモ、月經後數日ニシテ發生セル四十年某女ニ、破傷風ノ確診ノ下ニ、發病后二日目ヨリ、免疫單位四百ノ破傷風免疫血清ノ注射ヲ初メ、三日間、百二十瓦ノ注射ヲ施セシモ、其ノ効ヲ見ズ遂ニ鬼籍ニ上リタル一例ヲ報告セリ、而シテ氏ハ其ノ進入門戸トシテ子宮内膜ナラント云ヘリ、
○亞斯必林(Aspirin)ノ効果ニ就テ (村上敬始全上)

氏ハ始メ本劑ノ藥物學的性狀及ビ從來内外ニ報告セラレタル二十七ノ實驗的ヲ摘記シ、次ニ自家實驗ノ筋及ビ關節痲麻質斯患者二十四名、偏頭痛及神經痛患者十名、胸膜炎患者六名、糖尿患者二名ニ就キテノ成績ヲ報告シ、終リニ、綻括トシテ、從來使用シ來リタル撒里失爾酸抱合体ニ比シ、其効力一般ニ遊色アルヲ見ザルノミナラズ、儼麻質斯抑制劑トシテ、ハタ亦鎮痛作用ノ確實ナルハ、之レ等ヲ凌駕スルニ足ルト云ヘリ

○メントール吸入療法ニ就テ (今井亥三松述、廣島衛生醫事月報第六十號)

氏ハ先ヅ一般吸入療法ノ歴史ニ筆ヲ起シ、其ノ應用ノ方法、并ニ、メントール吸入療法ノ効用、用法ニ就キテ述べラレタリ

○アメーバ性赤痢(承前)(中村磨礎夫、全上)

○脚氣豫防ノ特效藥 (高橋辰五郎述、助産婦新報第七十一號)

氏ハ陸軍々醫正丸山直方氏ノ大坂鎮台ニ於テ明治十一年

ヨリ全十九年ニ至ル九年間ノ統計ヲ示シ、且ツ實驗上豫防ノ特効藥トシテ「米麥混合ノ麥飯ヲ良シ」ト述ベラレ、尙一般ノ治療法ニ及ボナリ、

○通俗脚氣ノ病理（高橋辰五郎述、助産婦新報第七十二號）

氏ハ日本ニ於テ行ハル、脚氣原因談ノ主ナルモノ、即チ高木氏ノ含水炭素過量說、緒方氏ノ黴菌說、三浦氏ノ青魚說、柳氏ノ米中毒說等ヲ述ベ、殊ニ柳氏ノ黴米說及ビ米ノ中毒說ヲ提ヘテ論駁スル所アリ、而シテ氏ハ氏ノ實驗上ノ見地ヨリ「脚氣は、一種の黴菌が（恐くは黴菌なるべし）米質に繁殖し、或る種類の脚氣毒なる者を生じ、此脚氣毒が人の血中に吸収せらるゝときは、脚氣病を現はす。而して其黴菌の繁殖する場所は、れもに人の腸内で有るが、時としては、米の貯藏中に黴菌繁殖し黴米となつて居て之れを食する人に直ちに脚氣を起さしむることもある。」ト論ジ、緒方氏ノ脚氣黴菌說トノ相違ヲ述ベテ曰ク「緒方博士は、黴菌が、直接に血液中又は組織中

に侵入して病氣を起させると云ふのであるが、我輩のは、黴菌が、身体の内外に拘らず、米質中に繁殖して脚氣毒を造り、人体が其の毒質を吸収して中毒すると云ふの違ひで有る。」ト、然レモ其ノ所謂脚氣毒ナルモノハ、氏自カラモ未ダ其ノ本体ヲ究メザルモ、恐クハ一地方ヨリ他ノ地方ニ蔓延スルモノナラント云フ、脚氣毒ニ侵サレ易キハ、便秘、貧血、及ビ身体排泄ノ不充分ナルトノ三点ニシテ、脚氣ガ妊婦ニ多クシテ、且ツ分娩後著シク増悪スルノ理由ハ此ノ三点ニ歸スベク、又療治ノ方針モ亦之レニ則ルベシト述ベラレタリ、

○両側顔面神經麻痺ノ一例（雨宮量七郎述、成醫會月報 第二百六十一號）

廿六歳ノ男子、別ニ外傷等ノ認ムルコトナク、一朝突然右顔面神經麻痺ヲ起シ受療ノ後漸次輕快ニ向ヒタルニ超エテ三十二日ノ後再ビ外傷暴寒等ノ徴スベキ者ナクシテ兩側全顔面神經麻痺ヲ惹起シ、加フルニ、鼓索神經犯サレ、口蓋ノ侵襲セラレタル一例ヲ報告シ、次ニ、本病原因上

諸家ノ説ヨリ論ジテ、本例ハ未梢性ニシテフアロツピ
 氏管内ニ病竈ヲ有スルモノトシ、梅毒性神経炎(梅毒ヲ
 現存ス)カ、感胃性ノ二者中、其ノ后者ニヨルヲ詳論
 セラレタリ、

○解熱劑ノ應用如何 (花園三、全上)

○肺炎ノ豫防法ニ就テ (野村虎長、成醫會月報第二百六
 十二號)

氏ハ格魯布性肺炎ノ直接傳染ヲナシタル實驗ノ二例ヨリ
 説キテ、肺炎ノ病理及ビ療法ニ及ボシ、東京、合衆國シ
 カゴ等ノ死亡數ヲ掲ゲ、最后ニ豫防法トシテ次ノ事項ヲ
 當路者ニ協議シ、實行ヲハカラント述ベラル、即チ(第
 一)肺炎患者ノ喀痰ノ消毒、(第二)、肺炎患者病室ノ清
 潔法、(第三)冬期ヨリ翌春迄ハ多數人ノ群居ヲサケ、又多
 人ノ集ル場所、家屋ノ換氣法ヲ十分トナスヲ、(第四)、患
 者排泄物ノ處置ヲ嚴重ニナスヲ、ナリ、

○胃下垂症 (雨宮量七郎、全上)

氏ハ甚シク下垂セル本症ノ二例(第一例ハ胃ノ大彎耻骨

縫際ニ達シ、第二例ハ耻骨縫際上ニ指横莖ニアリ、小彎
 ハ二例共ニ臍窩ノ高サニ在リ)、ヲ報告シ、診斷法、療法ヲ
 述ベラレタリ、

○胸膿症ノ一例 (野村虎長、全上)

○氏ノ「デング」熱所見 (川田敬治、研瑤會雜誌第五十七
 號)

著者ガ昨年六月以降、台灣南台地方ニ於テ本病ノ流行ヲ
 來タセル際、多數ノ本病患者ニ就キテ實驗上、從來ノ報
 告、及ビ成書ノ記載ニ異ナル所、マタ未ダ文献ニ見ザル
 所アリトテ、症狀、原因、療法ニ就キ論述セラレタリ

○日本ニ於ケル糖尿病ニ就テ (坪井速水、醫事新聞第六
 百五十三號)

氏ハ明治廿七年一月ヨリ同卅年五月ニ至ル間岐阜縣立病
 院内科部ニ於テ實驗セル八名(總患者數一五六五人)、
 及ビ明治三十二年一月ヨリ同三十六年三月迄、大坂醫學
 校病院内科ニ於テ實驗シタル五十八名(總患者數二二三
 九〇)、ニ就キ種々ノ統計ヲ示セリ、而シテ其結論ニ曰ク、

(一) 糖尿病ハ生活程度豊富ナル大坂地方ニ多クシテ生活程度ノ低キ岐阜地方ニハ尠シ、(二) 大坂地方ト雖モ市町住人ニ多クノ村落住人ニ尠シ、(三) 糖尿病者男性ト女性トノ比例ハ四、三ニ對スル一ナリ、(四) 糖尿病ハ四十年代乃至五十年代ニ多シ、(五) 併發症ハ肺結核最多シ、(六) 輕症ノモノ多クシテ食餌攝生及藥物療法ニヨリ輕快若クハ治癒ス、併發症ニヨリ死スル者アルハ屢々見ル所ナレドモ未ダ糖尿病性昏睡ヲ發シ、或ハ急劇ナル經過ヲ取り死亡シタル者ヲ實驗セシトナシ、(七) 尿量ハ多キモ二千瓦内外ニシテ其上ノモノハ甚ダ稀有ナリ、(八) 診斷上夜食後或ハ夕刻ノ尿ヲ取り驗スルハ甚ダ緊要ナリ、(九) 藥物療法ハ阿片最効アリ、(十) 糖尿病ハ大坂地方ニ於テ甚ダ多シ、歐州ニ比スルニ尠シトセズ、

○大根ノ應用 (竹中成憲、治療新報第廿二號)

氏ノ實驗ニヨレバ大根おろしノ貼用ハ沃度丁幾及ビ芥子ノ如キ作用アリ故ニ痙攣 (Schulterspannung) 及ビ慢性關節痲質斯等ニ効ヲ奏スベク、又内服スレバ發汗劑トナ

リ、感冒、及ビ食欲亢進ニ用ユベシト、(以上十七、小原抄)

○小兒科

○小兒腸膈扶斯ノ一ニ實驗 (小林公四郎、愛知縣醫學專門學校同窓會雜誌第十二號)

氏ハ小兒腸膈扶斯ノ診斷困難ニシテ、小兒科醫ノ慎重ノ注意ヲ要スル所以ヲ述ベ、且ツ自家實驗ノ一例ヲ報告セリ、(以上一、小原抄)

○外科

○初期肺癆ノ手術的療法 (本多忠夫、成醫會雜誌二二六二) 肺癆治療期ト第一肋軟骨ニ於ケル關節形成ノ關係ヲ論シ Freund 氏ノ業績ニ左袒シ手術的ニ假關節ヲ作りテ初期肺癆ノ治ス可キヲ唱道シ且ツ其ノ手術タル些少ノ危險ナク頗ル容易ニテ單ニ肋軟骨ニ切開ヲ加フルノミニテ斜角筋動作ノ偏勝ノ結果切斷部ノ癒合ヲ妨ゲテ關節ヲ形成セシテ肋膜骨切離ニヨリ胸廓ニ起ル可キ變化ハ其ノ上部ノ擴張ナリ即チ肺炎ノ膨脹ヲ促ガシ其ノ結果肺炎ニ存

在セル結核性機轉ニ影響ヲ及ボシ以テ之レヲ治セシム可キヲ推斷シ此ノ小手術適症ヲ得ル時ハ大ニ價値アルモノトセリ、(有壁生抄)

○耳鼻咽喉科

○耳性腦膿瘍ニ就テ并ニ其一治驗 (飯田新、千葉醫學專門學校友會雜誌第二十七號)

氏ハ本症ニ對スル諸家ノ統計ヲアゲ其原因、診斷、療法ニ記述シ終リニ自家實驗ノ一例ヲ報告セリ、

○鼓室乳嘴竇及ビ硬腦膜内ニ生ゼル「コレステアトーム」ヲ根治手術式ニ因テ摘出セル患者ノ供覽(金杉英五郎成醫會月報第二百六十二號)

○喉頭結核ノ療法(上)、(岡田和一郎、治療新報第二十二號)、岡田博士ガ諸大家ノ得タル成績ト博士自家ノ經驗トニ原キテ此篇ヲナシタルモノナリ、(以上、三、小原抄)、

○眼科

○老人環ノ病理的解剖ニ就テ (牛久保政次、日本眼科學

會雜誌第七卷第十一號)

氏ハ諸家ノ所論ヲ述ベ、次ニ自家實驗ノ七例ニ就キテノ成績ニ報告セリ、即チ氏ノ研學ニヨレバ、角膜實質薄層内ノ微細顆粒ハスベテニ於テ見認メ、第三「ズダン」并ニ「ヲスミユム」酸ニヨリテ、之ノモノハ脂肪小顆珠ナルヲ確メ、締結組織維ノ脂肪變性ニ由ルモノナリト論定セラレタリ、

○核性外眼筋麻痺ノ一例、附、感冒性急性出血性上腦灰白質者? (馬杉篤彦、全上)

氏ノ報告セシ一例ノ概略ハ次ノ如シ
三十六歳ノ男子、二日前迄、凡ソ十六日間感冒ニ罹リシモノ、突起視力異常ヲ來シ、明瞭ヲ欠クノ感アリ、全日夕刻ニ些リ身体違和、頭痛、眩暈甚シク、翌日ニハ諸症増劇シ、一二回ノ嘔吐ヲ發シ、且ツ複視ヲ生ズ、續テ兩手ニ輕度ノ知覺異常、下肢ノ無力ノ感アリ歩行困難トナルヲ訴フ、現在症ニテハ左眼輕度ノ眼瞼下垂症アリ、左内直筋ハ全ク麻痺シ爲メニ輕外斜視ノ狀ニ陥レリ、其視

カハ正視ニ至ナルノ外其他ノ變狀ヲ見認メズ、越エテ四日、両眼共外直筋全ク麻痺シ眼ハ運動ヲ欠ク、上肢ノ運動障礙著明ニシテ上肢末端知覺知異常アリ、肩胛無力感、歩行蹣跚、膝蓋腱反射左右全ク消失セリ、二日後ノ診査モ亦上ニ全ジ、而シテ發病后二ヶ月ノ經過後、複視、四肢ノ障害ノ消失ヲ見タリト云フ、氏ハ其原因探究上、諸家ノ証例ヲ引キテ、詳細ナル類症鑑別ヲ施シ、流行性感冒ノ經過後ニ來リシ、重症腦症狀ヲ欠ク急性出血性上腦灰白質炎ニシテ、第三、第四腦室并ニシルヅ井ノ氏導水管ノ Centale Hohlraum ニ於テ出血ヲ有スルモノナラシ乎ト推測セラル、

○眼險象皮腫實驗一例 (關九一郎、全上)

氏ハ長野縣上水内郡鬼無里村産ノ四十五歳ノ一女子ニ就キテ、左上眼險ヨリ發セル二個ノ雀卵大臃瘍及ビ左下眼險ノ梨子狀大ナル共ニ泥樣感覺腫瘍ヲ有スル一例ヲ報告シ、尙其下眼險ニ於ケルモノヲ切除シ、鏡檢上 Elephantymphangiectasia ナリシト云フ、而シテ其ノ誘因タル慢

性炎症ハ梅毒ナラント述ベラレタリ、

○小淚管菌石ニ就テ追加 (小口忠太、全上)

氏ハ會テ報告セル小淚管菌石(假性放線狀菌)ノ一例ノ追加トシテ三箇ノ圖表ヲ掲ゲタリ、

○眼部帶狀ヘルペスノ二例ニツキ (大崎尙哉、全上、北越醫學會々報第百三十八號)

氏ハ河本博士ノ下ニアリテ實驗シタル、何レモ半側ニ生ゼル眼部帶狀ヘルペスノ二例ヲ報告セリ、尙終リニ河本博士ノ追加アリ、因ニ記ス本症ニ就キ未ダ我邦ニ報告ナシト云フ、

○脚氣ニ於ケル異形ナル視野欠損 (市原鍊三、日本眼科學會雜誌第七卷第十一號)

從來脚氣ニ一種ノ中心スコトームヲ發スルヲアルハ數々報告セラレタル所ニシテ、之ヲ以テ一二ノ論者ハ脚氣ヲ一ノ中毒症ナリトノ一論據トナセリ、氏ノ報告ハ從來ノ報告ニ見ザル破格的ニ視野ノ欠損ヲ來セル二例ニシテ、脚氣研究上大ニ興味ヲ有スルモノナリ、終リニ河本博士

ノ追加ヲ載セタリ、

○徴兵検査ニ際セル眼科的觀察 (小口忠太、日本眼科學會雜誌第七卷第十二號)

氏ハ去ル明治三十二年中山梨縣、一圓、神奈川縣(都築、橘樹、二郡ヲ除ク)、下徴兵検査ノ直接視器検査ノ任ニ在リ、其ノ際得タル材料ヨリ眼科學上有益ナル統計ヲ示セリ、

○對馬ニ於ケル小學生徒ノ眼科的検査小報 (堤友久、全上)

コレ對馬國驩原尋常高等小學校ニ於ケル体格検査ノ障得タル眼科的疾ノ統計ナリ、

○高廣ノ近視眼底ニ於ケル「エクダデー」ノ一例 (喜田村朔治、千葉醫二、全上)

氏等ハ京都醫科大學淺山教授ノクリニツクニ於テ實驗セル頗ル稀有ナル本症ノ一例ヲ報告シ、且ツ其ノ「エクダデー」發生ニ就キテ諸家說ニ從ヒ、先天的發育異常ニヨルナラント述ベラレタリ、

○涙道吸引作用ニ就テ (賀古桃次、全上、中央醫學會雜誌第五十六號)

氏ハ臨床上睫毛倒生ト診斷シタル患者ニ就キ偶然脱落シタル睫毛ノ淚囊ヨリ小淚管ニ入レル二例ヲ實驗シタルニ原キ涙道吸引作用ニ就キテ思ヒ及ブ所アリ、從來諸家ガ説明ヲ試ミタル涙液ノ鼻腔内疎通上ノ機轉ヲ論述シ、現今多數ノ學者ガ見認ムル如ク眼瞼ノ壓力、液ノ重力、時ニ少シクハ又吸氣ノ作用スルアランモ、主トシテ「ホルテル」氏筋ノ作用即チ淚囊ノ弛張ニヨリテ、涙道ニハ必ズ吸引作用ノ存スルコトヲ述ベラレタリ、

○檢眼鏡發明ノ期日 (賀古桃次、全上)

氏ハ吾人ガ日常其ノ思惠ニ感謝スベキ Hermann Lüdtwig Ferdinand von Helmholtz ノ檢眼鏡發明ノ期日ニツキ、恰カモ檢眼鏡發明后五十年目ニ當レル一千九百〇一年八月ハイデルベルグニ於テ開カレタル第廿九回眼科學會ニテプレスラウ大學眼科學教授 Geheimrat Prof. dr. Uthoff 氏ノ該事ニ就キテノ報告ノ大要ヲ述ベラレタリ、而シテ

其ノ期日ハ判然タラザモ種々ノ方面ヨリ考察シタル所ニ
 ヨレバ一千八百五十年ノ後半期、若シクハ全五十二年ノ
 初メニシテ、ヘルムホルツ氏ノケエニヒスベルグ大學生
 理學教授ノ職ニ在リシ際ナラント云フ、

○膿漏性結膜炎ヨリ轉移性關節炎ヲ發生セシ一例 (新
 實直、全上)

氏ハ先ヅ一千八百八十七年ドイツマン氏ノ始メテ報告シ
 タルヨリ、爾來文籍ニ載セラレタル二十例ヲ舉ゲ、次ニ
 自家實驗ノ一例ニツキ、報告セリ、該例ハ生後十三日ノ
 男性兒ニシテ、生後三日目ヨリ両眼ノ膿漏ヲ來タシタル
 モ眼療法ニヨリ治ヲ見タリ、然ルニ眼炎發生後十八日ニ
 シテ左膝關節、母趾趾骨關節、右肘關節、右腕關節及同
 拇指掌骨關節ニ炎症ヲ發生セリ、而シテ鏡檢上結膜及膝
 關節内ニ特異ノ細菌ヲ証明スルヲ得タリ、關節ハ、イヒ
 チオイル塗布及温罨法ニヨリ后四週ニシテ全治セリト云
 フ、

○化膿性轉移性眼球炎ノ一例 (盛市郎、全上)

氏ハ先ヅ本症發生機轉ニツキテ述ブル所アリ次ニ六十一
 年男子ニ於テ、左眼ノ化膿性眼球炎ノ一例ヲ報告セラレ
 タリ、其ノ原因ハ顯微鏡檢査上 *Streptokokkus* ニシテ該患
 者ガ有シ、殆ンド治ニ就ケル足部蜂窩織炎ヨリ轉移セル
 モノナラントセリ、

○最稀有ナル眼窩腫瘍ノ一例—纖維性平滑筋腫 (水尾
 源太郎、東京醫學會雜誌第十七卷第二十三號)

二十五歲婦人、十年來著明ノ障害ナクシテ漸々ニ左眼球
 ノ突出ヲ來タセルモノニ就キテ、精密ナル檢査上良性腫
 瘍ナルコトヲ証明セルニヨリクレヨンライン氏ノ法式
Kronlein'sches Verfahren ニ從テ手術ヲ施シ、甚ダ容易ニ
 種々ノ大サト、多様ノ形狀ヲ有セル五個ノ腫瘍ヲ摘出セ
 リ、之ノ腫瘍ヲ鏡檢スルニ平滑筋ノ存在ヲ見認メタリ、
 著者ノ研索ニヨレバ最初ハイネクツヒ、ミユルレル氏ヨ
 リ記載セラレタル眼窩筋 *M. orbitalis* ヨリ發生セルモノ
 ナラント云フ、(同誌歐文抄錄欄、大澤岳太郎氏抄録ニヨ
 ル)。

○眼瞼下垂症ニ對スル河本氏手術式ノ效果ニ就テ (葛

谷貞二、中央醫學會雜誌第五十六號)

氏ハ明治三十年二月初メテ河本博士ヨリ眼瞼下垂症新手術式トシテ公ニセラレタル以來數多ノ實驗ハ、スベテ從來ノ手術式ニ比シテ好成績ナリトシテ觀迎セラレタル該式ノ效果ニ就キ、自家實驗上、大ニ疑ヲ挾メリ、即チ氏ノ欠点トシテ擧ゲタルハ、第一、時日ノ經過後其效果ハ手術當時ヨリモ減少シ、第二、手術部ニ皮膚樣囊腫ノ發生ヲ來タスト云フ、

○糖尿病性白內障ニ併存セル虹彩ノ變質ニ就テ (中島

潮造、全上)

生前糖尿病性白內障ヲ有セル三十歳ノ一婦人ノ死後、間モナク摘出セラレタル眼球ニ就テ鏡檢上水晶体ニハ白內障ノ變化ヲ呈スルノ他、虹彩色素層ニ於ケル著明ノ變質即チ其細胞ノ膨脹及ビ甚シキ色素ノ減少ヲ發見セシ一例ヲ報告シ、猶リテラツール并ニ原因的機点ニ就テ記セリ、
○所謂輻湊強直ノ診斷上追加(承前) (井上通泰、東京醫

事雜誌第千三百三十六號)

○結膜下注射療法ノ一實驗ニ就テ (葛谷貞之、石丸明義

愛知縣醫學專門學校同窓會雜誌第十二號)

氏等ハ結膜下注射療法ノリテラツール三十ヲ述べ、次ニ氏等ノ實驗ニ係ハル、慢性虹彩毛樣体炎ヨリ内壓減降ヲ來タセル患者二、三%食鹽水ノ結膜下注射ニヨリテ治療ニ向ヘル一例ヲ報告セリ、

○稀有ナル全眼球炎一例 (吉村初太郎、全上)

○二三ノ網膜炎(其一)(未完)、(瀨木本雄、全上)

○新潟縣下刈羽郡ニ於ケル眼病調査ノ一般 (布施碩二、

北越醫學會報第百三十八號)

○鉗子分娩ニ關スル初生兒ノ眼障害ニ就テ (水尾源太

郎、醫學中央雜誌第十號)

氏ハ小兒科、産科乃至眼科學上興味アル、シカモ余リ世人ヨリ注意セラレザル本問題ニ就ク、先ヅ諸家ノ說ヲ概述シ、次ニ自家實驗ノ一例ヲ報告セリ、母ハ以前二回分娩シタルガ何レモ安産ナリシモ、第三兒ハ頭蓋位ナリシ

モ分娩ノ第二期ニ於テ兒ニ危險ノ症狀ヲ見認メタルヲ以

テ、鉗子分娩ヲ行ヒ爲メニ死産トナレリ、其危險症狀ト

ハ破水後兒ノ心動鼓動不規則トナリ、遂ニ聽クベカラザ

ルニ至リシニテ、斯クノ如クナリシヨリ、鉗子ヲ應用シ

タルハ四十分後ニシテ、娩出ヲ全フシタルハ實ニ一時二

十分間ノ後ニアリシナリ、而シテ眼球ハ、兩眼共ニ外觀

的變化ノ見認ムベキモノナシ右眼球ヲ摘出シテ切片トシ

檢スルニ、肉眼的眼底ニハ著シキ網膜ノ血管ノ拡張及極

メテ小点狀出血アリ、脈絡膜ハ異常ニ血液ヲ以テ充シ普

通ヨリモ數倍ノ厚サヲ有シ、鏡檢上ニテモ亦、虹彩、毛

様体、脈絡膜、網膜、ニ於テ充血、血管擴張、出血等ノ

變化ヲ見認メ、即チ悉ク變血ニ起因シタルヲ証スベシ、

尙氏ハ斯クノ如キ初生兒ノ生活シタル場合ニ於ケル眼ノ

障害、并ニ分娩及ビ鉗子ノ如何ナル力學作用ニ原因スル

モノナリヤニ就テ論究セラレタリ、(以上二十二、小原抄)

○皮膚科及泌尿器科

○結節膿疱性及潰瘍性臭素皮膚疹ニ就テ (江島章太郎、

皮膚科及泌尿器科雜誌、三ノ六)

著者ハ臭素發疹中稀有ナル結節膿疱性及潰瘍性ノモノニ

就テ一例ヲ舉ゲ其ノ徵候、鑑別ヲ詳述シ該疹病理組織ニ

於ケル Neumann, Seguin, Mackenzie, Fox, Giffes, G.

Peni, 森安學士及ビ自家ノ所見ヲ述シ尙其ノ原因ニ就テ

Kaposi, Fox, Giffes, Peni, Gutmann, Neumann, Panichi,

Clarke, Avarg, morvis, Uuna, Rosenthal 等諸氏ノ説ヲ

舉ゲ自家ハ臭素沃度ト皮脂腺ノ關係薄弱ナルノ説ニ左袒

シ加フルニ著者ノ實驗ニヨレバ愈 Neumann, Rosenthal

両氏ノ説真ニ近シト、終リニ諸家病理組織變化斯ク紛々

タルハ蓋シ、Primäre Gewebeläsionノ差ニヨリ異リ或ハ

初期ヨリ皮膚表層ノミヲ侵シ或ハ深層ノミヲ侵シ或ハ兩

層ヲ侵スモノアリ故ニ其ノ侵襲スル部位ノ淺深大小及ビ

廣狹ニ從ヒ發疹狀態及病理組織變化ヲ異ニスルハ論ヲ俟

タズ故ニ表皮マルヒギ―氏網及乳嚢体血管等ヲ侵スアリ

或ハ毛嚢皮脂腺及汗腺等ヲ侵スアリ一定セズ故ニ又臭素

疹ニハ各適當ナル形容詞ヲ冠セシムル可ナラズヤ累々論

及セリ、

○疥癬藥トシテノデシンフェクトール (東幸次郎、皮膚科泌尿器科雜誌三ノ六)

由來疥癬藥トシテ特著ノ効アルモノ少シトセス然レモ尙治療上、使用上、價格上缺點ナシトセズ著者ハ此ノ理想的殆ンド満足ヲ與フ可キ(疥癬藥デシンフェクトール(下山博士發見)ノ性狀、効用ヲ列舉シ數名ノ患者ニ五十%ノ水溶液ヲ塗布シ其ノ疥癬藥トシテノ効價ヲ賞揚セリ曰ク治療日數極メテ短ク又入院ノ必用ナキ一、用法甚タ簡便且被服ヲ汚染スルコナキ二、價格太ダ廉ナル三、無刺戟性ニシテ副作用ナク續發皮炎アル患者ニモ顧慮ナク使用シ得ル四、奏効甚確實ナル五、等ナリ唯惜ラクハ本劑ハ樟腦精製ノ副產物ナルヲ以テ化學的ニ構成セラレシ純品ナラズ從テ其ノ成分含量ニ多少ノ異同アル如ク感セラ

ル丁是ナリ、
○淋毒性バルトリニ―氏腺炎ニ就テ (森麻吉、日本皮膚科學會演說抄録)

著者ハ實地醫家及ヒ病院ニ於テハ比較的少キ淋毒性バルトリエ―氏腺炎ニ於テ原因各種ノ症狀鏡檢の所見診斷豫后療法ヲ統計上ヨリ詳細ニ述ベリ、

○疼痛性膀胱加答兒ニ就テ (岡村龍彦、順天堂醫學研究會雜誌三七二)

疼痛性膀胱加答兒ハギ―ヨン氏ノ分類ニテ其ノ學問的分類ナラザルハ吾人ノ目スル所ナルモ臨床上ニ於テハ其ノ症狀療法上大ニ他ノモノト區別アルヲ説キ一例ヲ舉ゲテ其ノ説明ヲ明ニセリ、

○婦人ノ軟性下疳ニ就テ (鈴木鋌次郎、中央醫學會雜誌 六五)

著者ハ軟性下疳ノ統計ニ起筆シ其ノ多數ナル淋疾ニ次キ即チ明治三十年ヨリ三十五年ニ至ル六年間ニ於ケル花柳病患者一萬一千五百三十八人中淋疾六千二百〇四人(五十三%)軟性下疳四千九百九十四人(四十三%)アルヲ証シ更ラニ四千九百九十四人中其ノ好發部位症狀ノ差異經過ノ長短等ヲ比較統計シタルニ右位局部ハ處女膜二十九

%子宮膾部十八%肛門一〇%膈壁九、三%尿道、馬氏腺排
泄管口、小陰脣、後連合四、五乃至五、九%舶樣窩、大陰
脣、前庭等ハ少數ナリ次テ治療日數ノ最長ノモノハ子宮
膾部ヲ第一トシ三十二日、六肛門二十六日尿道二十三日、
九等ニテ各局部ニ於ケル各患者ノ治療日數ヲ比較セバ通
常二乃至三週ニテ治スルモノ六十八%アリト次テ著者ハ
定型的症狀ノ他變型的症狀ヲ列舉シ終リニ療法ヲ詳説セ
リ、(以上五、有壁生抄)

○産科婦人科

○流産ニ就テ (ヘーガル、中央婦人科學雜誌一ノ四)

往時ノ所謂流産原因ハ畢竟流産ノ直接原因ナラス唯陣痛
ヲ惹起スル刺戟ノ原因トナシ流産シタル卵ノ異常狀態并
ビニ病理的機轉ヨリシテ原因經過ヲ極論シ進ンテ遺殘物
ノ運命結果ヲ論シ延ビテ診斷豫後療法ヲ詳述セリ、

○妊婦ノ嘔吐症ニ就テ (醫學博士榊順次郎、全上)

妊婦ノ嘔吐ニ就テハ苟モ班ヲ産科醫ニ列スルモノ研究セ

ザルハナク從テ其ノ報告亦多數ナリ然レモ其ノ原因ニ於
テモ療法ニ於テモ諸家ノ報告相背馳シ諸說紛々後進ヲシ
テ迷ハシム著者研究數年妊婦ノ頑性嘔吐症ノ原因ニ關ス
ル「リテラツ」ヲ舉ゲ原因ヲ論シ數多ノ異例ヲ引キテ
是ガ療法ヲ述ベ尙治療法ノ「リテラツウル」ニヨリテ其ノ
長短ヲ論シ著者ノ考案ニナル刺戟療法ノ法式併ビニ之ヲ
應用シタル二十三例ノ悉ク比較的佳良ノ結果ヲ得タルヲ
説キ結論トシテ該症ノ原因及ビ頑性ノモノ、定義、合併
症、療法ヲ細説セリ、

○子宮外妊娠ノ七例 (後藤誠一、全上)

原因ヲ列舉シテ實驗セル七例ヲ細論セリ、

○子宮外妊娠並ニ其胎兒及附屬器ノ異常ニ就テ (警瀨

雄一、岡山醫學會雜誌、百六十七)

子宮外妊娠ノ原因ヲ列舉シ其ノ總テノ場合ヲ述ベ其妊娠
ト淋疾トノ關係及處置ヲ詳論シ氏ノ實驗例ニ依リ原因症
候診斷手術上ノ要点ヨリ延ヒテ胎兒及附屬器ノ異常ニ論
及セリ、

○産褥ニ於ケル急性多發性神經炎 (磯山昇之助、産科婦人科學雜誌、六ノ一)

ライデン、ヂュメニール、シヨッフロア等ニヨリテ吾人ニ紹介セラレタル末稍神經ノ變性的炎症ノ産科學上ニ於ケル關係ハ未ダ之ヲ詳説シタルモノアルヲ見ズストリユンベル云ヘリ窒扶斯猩紅熱實扶の里敗血性傳染病産褥性疾患ノ如キ急性傳染病ノ經過中若シクハ經過后ニスル多發性神經炎ハ恐ラクハ當該傳染ヨリ生シタル毒素ノ末稍性神經纖維ヲ毀損スルニ因ルナラント唯其ノ眞理ノ闡明セラレザルヲ恨ム

本邦學者間ニ於ケル産褥ト多發性神經炎トノ關係ノ報告ハ蓋シ稀有ニ屬ス氏ハ三十三歳ノ經産婦ニ於ケル本病ノ實例ヲ擧ゲラレタリ、

○産褥子癇 (磯山昇之助、産科婦人科學雜誌、五ノ十二) 子癇ノ一例トシテ二十四歳ノ經産婦産褥ニ於ケル子癇ヲ詳細記述セリ、

○難産ニ因スル稀有ナル膀胱破裂症ノ一例 (藤井良吉、

全上)

難産ニ際シ兒頭又ハ鉗子使用ノ爲メ子宮ノ破裂若クハ膈壁ノ損傷ニヨリ膀胱子宮瘻又ハ膀胱膈瘻等ヲ發スルハ稀有ナラザルモ著者ハ腦水腫兼畸形兒ヲ分娩スルニ際シ膀胱ノ腹腔ニ向ヒテ破裂セル稀有ノ一例ヲ紹介セリ、

○急性羊膜水腫ノ實驗 (山田謙次、東京醫事新誌一三 四〇)

急性羊膜水腫ノ原因トシテ最多數ナル單卵双胎ニ因ルモノ、一例ヲ詳述セリ、 (以上八、有壁生抄)

○衛生及細菌學

○所謂腦膜炎ノ大便檢査ニ就テ (大内豊、福井縣醫學會雜誌第五十二、三號)

熱心ナル著者ハ本問題ニ就テ屢々所論ニ學會ニ、雜誌ニ公ニセラレタル所ナルガ、今、マタ該病患者ノ大便ニツキ詳細ナル細菌學的檢査ヲ行ヒ、遂ニ一種ノ病原菌ヲ發見スルニ至レリト云フ、其結論ニ、(第一)、所謂腦膜炎患

兒糞便ヨリ一個ノ細菌ヲ發見セリ、其細菌一般ノ性質ハ Proteus ニ屬スベキモノトス、(第二)、本菌ハ十八名ノ所謂腦膜炎患兒ノ糞便ヨリ每常檢出シ得タリ、(第三)、本菌ハ健康兒タリ他病兒ノ糞便ヨリハ見出サズ、(第四)、動物試驗ニ於テ人体ノ症狀ニ全然同様ナラザルモ兎ニ角髯鬣スル所ノ狀態ヲ發見シタリ、(第五)、以上ニヨリ余ハ本菌ヲ假名所謂腦膜炎ノ病原菌ト斷定ス、(第六)、糞便檢査上本菌ノ有無ハ本病ニ關スル總テノ診斷學上價值ヲ有ス、(第七)、斯ク本菌ヲ確信斷定スル以上ハ本病ハ傳染病即チ中毒症ナリ、トアリ

○癩病ニ對スル動物ノ感受性研究第三回報告 (菅井竹吉、東京醫學會雜誌第十七卷第二十三號)

著者ハ全誌第十六卷第十八號ノ第一回報告ニ於テ癩病ハ癩結節ノ乳劑ニツクリモルモツトノ腹腔内ニ注射スルハヨク之レニ傳染セシムベキコトヲ述ベラル、次デ全卷第廿四號ニ其第二回報告ヲ公ニシ、次ノ成績ヲ舉ゲラレタリ、一、白鼠ハ試驗動物トシテ最モ適宜ス、

二、癩結節ヲ乳劑トナシ、之ヲ該動物ノ腹腔内ニ注射スルニ二乃至三週后ニシテ病症表レ來リ、三乃至四週后ニハ斃ル、ニ至ル、

三、斯クノ如キ動物ニ生ゼル顆粒狀物ヲトリ、第二回移植ヲ行フニ、第二動物ハ此ノ毒ノ比較的僅量ヲ以テヨリ速ニ死ニ至ル、

四、病患者ニ於テ每常特異ノ癩菌ヲ有スル顆粒狀腫瘍ヲ見認ム、

五、鼠ニ於テハ肝、腸管膜腺、及腹腔内脂肪織ハ最モ侵襲セラル、モ、脾、肺及氣管支腺ハ僅微ナリ、

六、癩病性顆粒狀物ハ比較的屢々乾酪變性或ハ硝子樣變性ニ陥ル、

本號ニ於ケル其ノ第三回報告ハ白鼠廿五匹ニ施シタル試驗ヲ述ベタリ、即チ二名ノ結節癩患者及一名ノ神經癩患者ヨリ各結節ヲ切取シ、之ヲ其ノ儘或ハ乳劑トナシテ應用シ、尙二回ハ六十三日間アルコール中ニ保存セル皮膚結節ノ小塊ヲ用キ、腹腔又ハ皮下ニ移植セシニ乳劑トシ

テ注入スルトキハ多ク好成蹟ヲ収メ、結節其儘テ以テセル時ハ否ラズシテ唯一回皮下接種ニテ陽成蹟ヲ得タルノ三、硬固ノ新結節ヲ用ユルキハ其ノ結果確實ニシテ、軟化セシ結節ハ大ニ劣リ、神經癩患者ニ發生セシ陳舊ナル小結節ノ如キハ全ク失敗ニ終レリ、又結節患者ノ結節ニシテ長ク酒替中ニ浸漬セシ一片ヲ以テセシモ是亦無効ナリキ、而シテ第二回報告ニ於ケルト反シ一回動物ニ接種シ癩症狀ヲ惹起シタル後、其結節ヲ取り更ニ第二動物ニ移植モシモ其効力著明ニ減弱シ、多クノ場合ニハ發生ヲ見ザルヲアリ(全誌大澤氏歐文抄録ニヨル)、

○アクチノミチエス培養ニ就テ (太田季次、中央醫學會雜誌第五十六號)

氏ハ廿七歳女ノ右腸骨窩ヲ發生シタル「アクチノミコーゼ」ノ膿汁ニ就キ肉眼的、及顯微鏡の所見、該菌染色所見、并ニ培養上所見ニ於テ述ベラレタリ、其結論トシテ、培養上本菌ハ通性好氣性菌ニシテ、培養スレバ「コイレレン」ヲ失ヒ且ハ分岐菌ヲ認メザルニ至ル、故ニ本菌ハイスレ

リー氏ノ人体ヨリ發見セル放線狀菌ニ類似セルモ其ノ部ノ好氣性ナル点ハホルリングル氏ノモノニ近シ、然レモ培養上分岐菌ヲ見認メザルヲ以テ又該菌ニ符合セズ恐クハ他ノ一種ノ放線狀菌ナラント、

○柴山君ノ「本年日本ニ於テ流行シタル虎列刺病ノ細菌學的檢査報告」ヲ批評ス (石原喜久太郎、醫事新聞第六百五十一號)

○腸窒扶斯ノ傳染經路ニ就テ (都築宗正、東京醫事新誌第千三百三十六、七號)

氏ハ此ノ重要ナル問題ニツキ、外國ニ於ケル新説ヲ述ベ氏ハ東京、佐世保ノ軍隊ニ於ケル興味アル實驗ヲ示サレタリ、而シテ腸窒扶斯ノ傳染媒介ヲナス者ハ不良ノ飲用水及調理水ニ在リトテ、之レガ樸滅策ニ論及セリ、

○肉又蚊第二回報告 (前號ノ續)、(木下嘉七郎、研瑤會雜誌第五十七號)

○アメーバ赤痢ノ原因問題(承前) (田中祐吉、東京醫事新誌第千三百三十七號)

○明治三十六年大阪府ニ於ケル吐瀉患者糞便ヨリ得タル數種ノ「ツイブリオ」ニ就テ (川村六郎、諏訪瑩、岩城崇、東京醫事新誌第千二百四十號) (以上八、小原抄)

○法 醫 學

○四人詐病論 (板津七三郎、愛知縣醫學專門學校同窓會雜誌第十二號)

氏ハ職ヲ名古屋監獄ニ奉ズルコト十數年、其間屢々遭遇シタル實驗ニ基キ、在監人拘束ノ狀況、并ニ四人詐病ノ實驗例二十ヲ舉ゲ、終リニ結論トシテ詐病構成ノ原因ヲ論述シ、尙詐病鑑定ニ於ケル注意數項ヲ示シタリ、即チ(1)檢者ハ獄情ヲ知悉スルヲ要ス、(2)檢者ハ病理及法醫的ハ勿論心理的觀察力十二分ナルヲ要ス、(3)檢者ハ病理的法醫的論理發綻ニシテ所謂頓智の手腕ヲ要ス、(4)檢者ハ虛心平氣ヲ裝ヒ却テ病者ニ同情ヲ表スル言動ヲ以テ對スルヲ要ス、(5)檢者ハ診査ヲ可及的迅速ニ終了スルヲ要ス、(6)檢査ニ當テ同一症狀ヲ訴フルモ同一ノ方法ヲ可及的避クルヲ要ス、(7)檢査技術ハ療病法ニ擬シテ行フヲ可トス、

(8)四人ノ詐病ハ多ク病ノ極期ヲ摸擬スルコト多シ、(9)詐病構成ハ再犯以上ニ多シ、(10)四人ノ詐病ハ實驗的ニ來ルコトアリ、(11)四人詐病ノ多數ハ眞ノ詐病少ク既存ノ疾病ヲ誇大ニ訴フルモノ多シ、(12)詐病的誇大ノ訴ト病的誇大ノ訴トヲ嚴ニ區別スベシ、(13)詐病及詐重ニ於テハ最モ慎重要ス、(14)匿病ハ日本監獄ニ於テハ極メテ稀レナリ、

○聽器毆打ノ鑑定例 (木村重、醫事新聞第六百五十二號)

○法醫上鑑定實例(四) (緒方定四郎全上) (十、原抄)

○雜 部

○魔睡ノ常態ニ就キテ (大澤謙次氏述、國家醫學會雜誌二〇〇號)

催眠ノ方法、魔睡ノ程度ヨリ説キ出シ「スツゲスチオン」ヲ説明セラレ題意ノ講話記述アリ、

○催眠術ノ「デモンストラチオン」 (塚原傳氏、全上)

催眠術ノ術式(心理的及生理的)ヲ述ヘラレ二三ノ「デモンストラチオン」ヲ記載セラレタリ、

○催眠術ノ治療上ノ價值 (吳秀三氏口演、全上)

其方法ヲ説明シ諸病ニ於ケル治療的價値ヲ論セラレ更ニ
 診斷的應用ニ及ビ且ツ術者ノ注意ト其ノ弊害トヲ口演セ
 ラレタル其ノ記述

○催眠術ト國家醫學トノ關係 (大澤謙二氏口演、全上)
 衛生上、法醫學上ノ關係ヲ述ヘラレ左ノ如ク結論セラレ
 タリ、

- 一、魔睡自己ハ健康ヲ害セズ
- 二、其ノ方法ヲ明カニセザレハ不測ノ禍ヲ招クコトアリ
- 三、仮令其ノ方法ヲ明カニセル者ト雖モ非醫者ハ之ヲ治
 療的ニ應用スルコトヲ禁スベシ
- 四、之ヲ禁セントスルニハ醫療ノ定義ヲ確定セシメザル
 可ラズ

- 五、醫師ト雖モ充分之ヲ學バザレバ行フコトヲ能ハズ
- 六、醫者ハ之ヲ學ハサル可ラズ然ラザレハ非醫者ノ跋扈
 ヲ防クコト能ハズ

- 七、之ヲ公衆ノ前ニ興業スルコトヲ禁シテ俗人間ノ流行
 ヲ防クコト

八、此ノ術ハ放火、放蕩、盜賊、偽証々券偽造、猥褻等
 種々ノ犯罪ノ目的ニ供スルコトヲ得ベシ

九、魔睡間ノ行爲ハ精神障礙ノ爲メナレバ無罪ナレトモ
 術者ハ罪人トシテ罰スベキモノナリ

十、魔睡時ノ言語ハ法律上無効ナレトモ又參考スベキ場
 合アリ

十一、醒覺時ノ教唆ハ法律家モ醫師モ特別ニ注意セザル
 ベカラス

○澳國ニ於ケル催眠術應用ノ取締規則 (國家醫學會雜
 誌二〇〇)

○醫士ト催眠術 (大澤謙二氏述、日本醫事周報四六三)
 施術ノ取締法ニ就キテ注意セラレタリ

○最高學府名實 (佐多愛彦氏述、全上)

「名ハ實ノ賓ナリ實ニシテ備ハルレバ名ハ問フ所ニ非ズ
 ト云ハン乎、吾最高學府ノ名實ニ就キテ感ナキ能ハズ」
 テフ冒頭ヲ以テ筆ヲ起シ先ツ Akademie, Universität,
 College ナル起源ヲ論シ、歐米ノ先進諸國ニ就テ通觀スル

トコロヲ明カニセラレ、獨、佛、英國ノ學制ハ本號ニ於テ記載セラレタリ、(未完)

○現代醫人ノ本領 (山根正次氏述、全上)

醫士ガ高等ナル教育ヲ受ケ榮譽アル技能ヲ有スルノ点ニ於テ國民ノ先覺トシテ太タ勉メザル可ラズ即チ先ヅ立法府中ノ一大勢力ヲ起サザル可ラズ云々

○天笠神醫者婆ノ傳 (猿涯漁史、全上)

奈女者婆經ノ一部抄録

○醫論 (承前)(櫻軒氏述、廣島衛生醫事月報六〇)

本號ニ叙述セラレタルハ「宜ク工夫鍛練スベシ」トアリ

○千八百十二年拿破崙第一世露國侵入時ニ於ケル軍隊法

類 (公衆醫事七ノ七森林太郎氏述)

千八百十二年ノ露佛戰爭ノ原因及ビ經過ヲ詳述セラレ未ダ本論ニ及バズ(未完)ナリ

○獨逸語文法ニ形容詞ノ用法 (獨逸語學雜誌六ノ四)

(以上十二、渡邊抄)

○ウキゲン氏室内光力計 (小川劍三郎、岡山醫學會雜誌

一六六號)

教場トシテ工場トシテ室内ノ光力適當ナルヤ否ヤヲ檢スルハ眼科衛生上必要ナルコトナリ我邦ノ學校醫職務規定第三條ニ「學校醫ハ學校視察ノ際左ノ事項ヲ調査シ之レヲ視察簿ニ記入スベシ」トアル内ノ第二項ニ「採光ノ適否」ヲ舉ゲタリ、今日ノ多數ノ學校醫諸君ハ何ヲ標準トシテ檢査方法トシテ教室内ノ採光ノ適否ヲ調査セラル、ヤ否ヤ「ドウモ結構、デス、中々明ルイ、ヨサソウデス」等ノ言語ヲ以テ満足セラル、ニ非ルナキカト論シ近時發明セラレタルウヰンゲン氏ノ室内光力計ニ付キ其造構ト使用法トヲ説明セリ、

○飲料水中ノ硫酸銅 (藥石新報、四八三號)

櫻井勘六氏ハ此程某地ニ至リ深瀬某氏方ノ井水試驗ヲ行イタルニ其飲料水中ニ硫酸銅ノ含ミアルヲ發見シ其原因ニ付キ取調べタルニ同地ニ設置アル電柱ニ含ミタル硫酸銅ノ分泌シテ井水ニ浸潤シタルニ起因スルコトヲ確メタリ之レ電柱ニ硫酸銅ヲ注入スルコトハ電柱ニ耐久力ヲ與

ヘンガ爲メニシテ此法ヲ行ヒタルモノハ然ラザルモノニ
 比シ三乃至四倍ノ年數ヲ保ツベシト云フ而シテ其銅ノ含
 量ハ甚ダ少ナシト雖モ定性試験ニヨレバ普通電話線ニ鍍
 金シ一時ニ達スルコトナレバ久シキ歲月ヲ經レバ自然銅
 ノ中毒ヲ受クルハ免ルベカラザルコトニシテ腸胃ヲ麻痺
 セシメ衛生上等閑ニ附スベカラザル問題ナリ尙此例ノミ
 ナラズ電柱ニ接近シタル飲料水并ニ村落ノ用水路等ニシ
 テ右ニ類スルモノ頗ル多カルベシト云フ

○新發見ノ護謨ノ樹藥石新報 (四八三號)

ゴムハ近來技術上及ヒ科學上必要益々増加シタルガ此頃
 使用者ニ取リテ大ニ喜ブベキヲ發見セリ即チ新ニ樹膠ヲ
 產出スル樹木ヲ見出セリ此樹ハ「白マングローヴ」ト稱ス
 ルモノニテ中央「クインスランド」ノ海岸ニ近キ沼地ニ多
 ク成長スルモノナルガ其皮ヲ切り流レ出ズル液汁ヲ以テ
 護謨ヲ製シ得ルナリトヒウ (以上三、建部抄)

* * * * *

漫 録

○異郷の新年

醫一 野村雨城

あかつきつぐる鶏の
 若水くまんどおりたてば、
 くれなるるむる東雲の
 いづる初日の影さよし。
 軒にはたかさ日の御旗
 萬象歡喜の情をひく、
 宿のかさねにきのふけふ
 めでたきみ代の匂ひかな。
 やよ垂鬢子よ野邊まで、
 辰の新年きたりけり、
 やよ少女子よ庭に出て
 辰の新年きたりけり。
 聲にむかしの夢さめて
 高ねはるかに天の戸を
 吹くとしもなき朝風に
 ほころびそめしの梅の花
 紙鷺をあげずやもろ共に
 羽根をつかずやもろ共に

* * * * *

學びの色香かほらせにけり

○冬の月

照さずと寒さはいとごます鏡

かげさへ氷る冬の夜の月

○卯辰山の積雪

辰卯山冬の手向のいちじるく

今日面白し雪の明ぼの

○鏡

しろさをば白さとみせていつはらぬ

鏡を人の心ともがな

○述懐

をしみつゝ學べ世の人ひく弓の

矢よりも早くすぐる月日を

○綱引

泣くをやめよ女々しわが學友^{トモ}十年の

遺恨を露らす時機しばしまて

○友人某のみまかりし時

諸ともに學びしものを思ひさや

雪ふみわけて君を見んとは

○甲板上の感

矢 峯

月之皎々浪を射り

星飛ぶ夜半に吾獨り

デッキに立ちて思ひせば

希望の光、胸又満ち。

轟々として浪に和す

機關の響さも心地よや。

やがて月落ち陸眠り

暗黒の裡に吾獨り

靜かに胸に手を置きつ

我が行く先きを思ほへば

嗚呼吾が責を思ほへば

熱き血汐の湧くを覺ゆる」。

○白山登山之記

米 溪 生

人生の目的は活動にあり遠くアリストートル、ソクラテ
ス、祖とし儒教佛教の説く所近くはホップス、スピーザ
等より現今の倫理學者の唱ふる所大概此軌に出ず予も亦
双手を擧げて之を賛同し快樂主義を排し精力主義を以て
人生究竟の目的となす

然らば活動主義とは何ぞ曰く人的生活及其發展是れなり
換言すれば自然及人的周圍の要求に適應して一切の人的
能力の完全なる發揚を意味す凡る物の本分とは其の性能
を活動せしむるに外かならず其物の本性に従ひて動く是
れ其の者の目的なり

一生に於て目的あらば又一年の目的なかるべからず一週
の目的なかるべからず而して目的を活動とせば活動に隨
來する快樂なきを得ず一呼吸一搏動にして一膺息あり勞
働よりして輕快の精神を得、繁忙の晝よりして安眠の夜
を得一週の煩悶を醫するに日曜を得積月の繁勞を鼓舞す
るは暑中休暇を得之れ皆な天帝の享賜せし快息時なり然
らば夏季實に愛すべし愛せざるべからざるなり之れ平和
と健全と清福を享有すればなり此の期節に於て一年の輕
快の精神を鼓舞せざるべからざるなりロングフェロー曰
く「健康なきの生命は重荷なり康健に伴ふの生命は歡喜
快樂なり」と一年の歡喜快樂は一生の歡喜快樂を繋ぐ是
れを鼓舞するに夏の愛すべき涼味にあり人南窓の下午睡

に耽るの時高吟天然と親み山深く樹綠なる所、崇高の氣
に圍遶せらるゝ事、抑も何等の快事や

吾故郷は東北の山間幽地、山は秀て水は清し予七旬の休
暇を得ては常々此處に歸臥するを樂とす今夏感ずる所あ
り山海に放浪せんと欲し白山の跋涉と河海の漁獵とを企
てにき予の白山に登らんとせしもの己に幾年宿望を達す
るに此の休暇にありと即ち宮田先生及學友數輩と共にす
るを約す某經驗家に依れば登山は八月上旬より中旬の間
を好しとす然らざれば風雨に逢ひ雲霧に包まれ往々危險
を陷ることありと時は己は八月の上旬心の駒は勇めども
七月以降連綿たる霖雨如何ともする能はず天よ我は謝す
神よ我れは祈る皇天靈あらば冀くは雨雪を拂へと空しく
天空の密雲を仰くのみ八月三日漸く快晴、黎明中村惠君
旅裝を調へ來て予を訪うて曰く我等故あり同行し難し將
に本日を以つて先行せんとすと何事や兄弟と思ひ羅針盤
とも頼みし子友予を捨て、先行すとは君にして若し前日
一言の通知をなさば予等も亦其の意なきに非ざりし者を

嗚呼今を捨て、行かずんば登山の機を失ふも計り難し胸宇忽ち陰憂を催し天無情なるか將た友子多情に非ざるかと熱涙睫を衝き万感交々來り心緒紊れて茫然たるのみ乃ち走せて宮田先生に迫る先生曰く二名にて行く亦可ならずや且つ天候未だ定まらず二三の同行者を勸誘し歸山者の一言を俟つて一行の材となし晴朗を卜して發するも未だ遅からずと日余にして先行者歸り來れり其の状況を訊すに滿悦し難かりしが如し今や天候も畧々定まり且つ同行を約せられたるもの村上先生并びに其令息あり八田、熊澤、二氏あり乃ち八月十日を以て愈々登山の途に就かんとす而して八田、熊澤の二氏事故遂に同行する能はざりしは予の遺憾とする所なり

既よ心の行方も定まりて愈々明くる八月十日午前三時條つく雨に非ざるよりは旅立せんとの誓約を以て九日の夜は廉しき夕映に明日の快晴を喜びつゝ、行季勿々臥床に入よぬ宿志を遂ぐる婬しさに容易くは眠り得ず明日行く旅路の状況を早や心中に書き出され未だ蹈やらぬ山河の景

色のはや眼前より彷彿するもゆかし明日は早や眠らざばと自ら勵ませども生憎よ響き來る犬の遠吠山鳩の慕親の鳴吟、想は再故郷に走せて轉た情然たらざる能はず、嗚呼我胸中期する所あり慈親に垂き兄弟に別れ天涯に客たるもの幾年前も身不肖にして業ならず白髮の父母をして空しく倚門の望よ堪へざらしむ思うてこゝに至れば涙潜然として禁ずるざるものあり夜己に深かるべし四隣聞として聲なし

八月十日

ふと眼を覺せば時己に四更乃ち起つて旅装を整へ行季を肩よして村上先生の宅に參集し午前三時半を以て出發の途に就く恰も陰曆六月十八日弦月は皎々として中空に懸り吾人を迎ふる風情あり金澤市街も何時しか過ぎ去りて山科温泉の追分に至れば時正に黎明野田の山頂漸く紅を呈し殘月次第に薄れ行く所一抹の曉霧縹緲として山麓に驟き畦畔を覆ふ何等の好景や何等の情趣や鶴來町に至る頃ほへ金鳥赫灼として倉ヶ嶽絶頂の松樹に蹲踞し吾人の

旅行をして雨風の患なからしむるもの、如し遠く手取川

に架せる天狗橋を望み近く七個の用水工事を眺め國幣小
社白山比咩神社前の一茅屋に投じて朝食を喫し休憩を取

るもの一時間余之より中島、福岡、江津、吉岡の諸村を

經下吉野に至る頃擔荷の一脚男、行旅の一女子に逢ふ乃

ち就いて名蹟を問ふ答へて曰く左に見ゆる疊むが如き谷

は太白山の九十九谷にして、彼處にドンドとて響く音毎

に太鼓の囂囂たるに似たりと、眼前麓に鬱蒼たるは倒

杉なり、昔名僧死に臨み吾再び生を娑婆に保つを得ば此

の手植の杉倒に生ねよといへり彼の杉即ち倒に生じ鬱

然として繁茂し今は廣袤一反歩に及べりと云ふ聽て上吉

野に達し一旅店に入り晝膳を求む飯黒くして玄米の如く

一種異様の臭味あり硬き事恰も乾飯を嚼むが如きも吾等

の空腹に取りては實に山海の珍味、大椀を代ふること四

五に及ぶそれより千蠅万蚤攻圍の下に午睡する二時間余

時已に午後一時半に及ぶ頃ほひ天候一變拭ふが如くなり

し碧空何時しか黒雲を湛へて窓を打つ小雨の音さへ交り

ぬ

斯計りの雨何程の事やあらん却て酷熱を洗ひ旅情を慰む
る天の賜予いで出で立たばやと行季を調へ行く事半里余

にして炎帝再び赫灼たり佐倉、市原、間の溪流に架せる

橋畔の綠翠滴たらんとする樹蔭に清涼を取り勇を鼓舞し

て進めば鳥聲遙に耳衆に達す正にこれ往年の晩夏避暑よ

り鑛山を見舞し時のろれ問へば答へに「詩人に買はれ都

人に名を垂るゝ郭公乎」と

郭公啼や田舎の山の端に

都にて又なきものに愛でらるゝ郭公も田舎に無風流の

骨頂啼く音を聞きてもろれやと顧る人だになしあはれ郭

公も都にありたらんには如何に佳人才士に愛賞せらるべ

きに其の幽しき妙音を賦有しなから可惜空しく田舎の松

風と和し果つるとは然も尙田舎は好き所なるか郭公よ汝

は何か故に其の愛つる人に付かずして疎んずる人に付く

と、かごちつゝ行く程に何時しか木滑新を過ぎ尾添川に

架せる濁澄橋をも渡り岩間より湧き出づる一清泉に喉を

濕し小徑を辿り尾添、女原メナハラの追分に至る、茲よりは新道にて双方より車を挽き通行するも相軋轆する患なき大道なり文明の交通機關さもあらまほしと言ひ合ひつゝ今日の目的地女原村に着し旅舎三谷繁三郎方に投じ一浴汗を洗ひ疲れを醫し鶴來名物油揚の調理を命じ夕膳に向へば言行相反し豈計らんや命ぜし油揚は麩に變じ角は輪に化し其の可笑さ言ん方なし膳終り枕に就さぬ此地は蚊なきを得意とするも不潔にして蚤の多きには殆んど閉口せざるを得ず(自金澤至女原行程十里)

金澤より白山に至るに二道あり一つを尾添街道といひ北路よりするもの(山程九里)一つは西路よりするものにして市瀬街道とす茲より更らに二道あり一つは別山に至るもの(山程三里)一つは御前嶽オンマイダケに至るものなり(山程四里)

八月十一日

宮田先生の一喝に驚き醒めて起床せしは晨の五時なりき前夜捕ひし鱒を稠理し朝餉の膳を運び來れり昨日の疲勞

はあれども未だ踏まざる旅路の床しさに早速膳を終へ仕度を調へ出立せしは午前六時なりき朝の天曇り雲霧いと深く諸山頂を霞め草は茫茫として路を掩ひ冷氣肌に徹し雨滴陰濕旅情をして轉た快惱の感に堪へざらしむ加ふるに昨日の疲勞にてはかくしくは進み得ず宛然千鳥足とも醉十字とも形容し難き風情なり行程十余町、日出でざるに何の虹霓々と熟視すれば女原二口二村の間に架せる二口橋にして此橋山の一隅より起つて高く雲間に驅け入れる如く其の壯觀いふべからず對岸の山は雲表に聳へ橋高く水深くして諸所も深淵をなし嶮岩奇石相對坐し千態万狀得て名狀すべからず河流奔雷し白瀑碧渦之れが爲め又相和して樂を奏するの天地の美を歌ふ詩人に非ざるよりは得て其の風情を穿つべからざるなり互に相回顧する事幾回天賦の勝を賞しつゝ何時しか歩調足並共に調ひ野を徑山を越む行く事亦半里余にして遂に白峯村に至るの一橋に逢ふ之れ連日の降雨の爲め洪水にて流失し今は鉄線にて仮りに鈎舉あるのみ之れを渡るも猶ほ橋の流失せ

しもの二三あり本道を行くと亦頗る不利渡れば乃ち今日中に牛首村に着し難く渡らざるの却て利あるに如かずと懇々たる宿主の教示に従ひ山路に辿りしが其の峻悪なる鳥跡に偽似し一步を過まれば身は忽ち千尋の谷中然かも足取とも言ふべき手取川の上流牛首川に陥らんとす其の危険思ふべしかくて川に下り石原に出て石を涉り巖石を擧り藪を踏み分け山に上り谷に下り山又山を恰も山姥の山廻りするが如く山姥ならぬ吾等の困難筆紙の盡し得る所に非ず山腹に至り山下を一睇すれば一村落あり疾走して下る時に一老婆に逢ふ村名を訊せば深瀬村とて白峯に二里余ありと傍に冷水の滾々として進るあり一掬して渴を消し休憩暫時又行くこと一里程にして桑島村に至る機聲喧しく頗る機業の旺盛なるを見る少時して又陥落の一橋に逢ふ遠く對岸を眺むれば牛首村は西山の端に高位を占め橋若しあらんには寸時にして達し得べきも河水漲りて渡る事能はず己むを得ず歩を轉じて危難の山徑に入り汗を擽りて牛首村下の流失後の仮橋に達す此の橋は對岸

より高く二鉄線を張り板の扉を懸け連ねたるものなれば一步踏めば橋の下垂する事五尺舉ぐれば乃ち浮上する事丈余其様恰も一葉の片舟に駕して大波濤に浮沈するに似たり故に一人渡れば他人笑ひ一人終れば他人渡りて恐笑交々至る

牛首の橋の渡りを眺むれば

いふにいはず繪にも書かれず

と戯れぬ石垣を擧り白峯村累世の金満家永井太平なる旅館に投ず時己に午前十一時空渴甚たしく、來るを遅しと待ち受けて茶を飲み晝餐を喫す、其の淡白甘美なる昔旺盛を窮めたる洞庭湖畔の岳陽樓と山海の珍味を味ふにも似たり正午十二時旅舎を辭して談笑徐行橋又橋を越え鳴谷峰の淺澗を牛首川に沿ふて辿る炎天焼くが如く口乾き喉渴して牛首川を吞盡したき心地す進む事里余にして徑畔の山礫より冷泉の滾々湧出するあり之れ天神の享授し賜ふ者にして黴菌なく毒素なき薬水と掬して其の飽くを知らず靈泉とは夫れ之れを言はんかと仰き視れば果せる

哉小洞奥に安置せる不動菩薩あり不動の人を助くる亦厚き哉と低頭謝意を表して爽快は疲れを走り又行くこと里余にして河水山徑を食み通路之れが爲めに斷つ於是乎峭壁を傳はり幸ひに深淵に葬らるゝことなく徑路に出で出村、赤岩の二村を經棧橋を渡り川又沿て石を踏み小徑を辿り市瀬に至り再び棧橋を越む白山温泉に臻る時己に午後四時此温泉場に二大旅館あり豫て知れる薩摩屋を訪ひしも浴客屋に満ち合宿に非ざれば納るゝの余地なしと因て山田末吉なる旅館に投じ一浴疲勞を醫し下婢の齎せる夕餐を喫して滿腹す翌十二日は待ちに待てる登山の日なれば準備なかるべからずと亭主を呼び糧米雜菜に至るまで山頂の室堂一泊に充分なる準備を命じ赤岩村の若者仁太郎を案内となし傍ら擔荷の任に當て明曉午前六時の出發を約して就床せしと午後十時頃なりき(自女原至白山温泉行程九里半)

白山温泉

該白山温泉は一に河内温泉と稱し能美郡白峰村大字市瀬

村に在り養老年中(今より千二百年前)泰澄大師の發見せるものにして湯谷川の東岸に湧出し戸數十余旅館三四、一大浴槽を共有す泉質炭酸性を帶び人工加爾々斯泉に近し一飲すれば緩下の効を奏し白山登山者の旅行便秘に奏効又著大なり又胃腸病の効驗に富むのみならず盛夏暑氣を此の幽邃に避けなば洵に心身の攝養に益する亦多大ならん此の地には白山神社の社務所ありて登山者より登山料金各人五錢を徴収す(未完)

○交友茶話

無 菌

題して交友茶話と云ふ、是れ日頃吾が親しき友と相會し、無意無識、談笑壯語の間、其の話柄の自ら我が心を動かせし事ども、其の折々、筆にし置きつるを、一つ二つ取り出で、茲に誌面の餘白を汚すことゝなしぬ、

余嘗て我が友を訪ふ、蓋し其の二三日前に借用せる獨逸語學雜誌を返却せんが爲めなり、友在り、例に依て快談壯語、談、獨逸語學雜誌のことに及ぶ、余即ち我が友の斯學に熱心なるを賛し、且つ其の諸書力の髣々乎として

進むこと大河の水を決するが如くなるを羨やむ、友即ち曰く、「……私共も蛇目ですよ、讀むのなら五六遍讀まなけりや蛇目ですよ、一遍や二遍讀んだつて何の役にも立ちませんからねー」と、何ぞ其の言の味あるや、平凡なりと云はゞ云へ、然も眞なるを如何せん、友よ眞なり、君よ然り、一遍や二遍讀みたりとて何の甲斐かあらん、尻の糞にもならぬやかし、語學に於て然り、然るを何や、教課の書をしも、常に之を書架に幽し、嘗て机上に見ゆるを許さず、偶々教室に至るも、主人公之居眠りや、つまりぬ押戯おしあそびに時を費し、表紙をだに開かずして家に歸り、歸るや又机上を通ぜずして直ちに書架に幽して一顧をだも與へざらんとす、何等の惰生や、是の如きハ蓋し此の語の必要を感せざるが故か、あらず二三子拜集れば、即ち此の語の必要を論じ、其の進歩の遅々たるを嘆ずるよあらずや、將た又教課時程の不都合を嘆じ教授の法を云々にあらずや、夫れ斯の如し、焉んぞ此の語の必要を感せざるが如きあらんや、寧ろ此の感彼等の腦裡に

轍しつゝあるや明かなり、而して然も自から勉めず只に嘆息をのみ是れ事とす、嗚呼薄志弱行も亦是に於てか極まれりと云ふ可し、如かず自から勉めんには。滿校有爲の士よ、須く蹶起せよ、奮起せよ努力せよ、徒らに嘆息するを止め相携へて勉めん哉、相共に勇進せん哉。

二、

嘗て某君を訪ふや、談偶々獨逸語のことに移る、某君曰く、「……何……君みろんなに嘆くことはいらんよ、……先づ熱心に學校の獨逸語課をやつてさ、それで若し暇があつたら、何か易いものを少々づゝやり給へ……凡て語學之早朝に限るよ、……それは語學はなんですなー初歩の間に頭角を現はす位でなければいけませんよ、力の附く可き時期が定まつて居ると云ふ譯けでもありませんまいが、兎に角基礎がしつかりして居らんと、次ぎ次ぎにやるのを充分に了解する事も出来んから、從て興味も趣味もなく、努力を費した割合に力もつかず、所謂勞多くして効少なしの方だからねー、……だから進んでやるなん

と云ふ譯にはとんと、いかない様になるんですな……君まー毎朝三十分位づゝでよいから、熱心又規則正しくやつて見給ひよ、夫れはく、君、愉快でたまらん様になるから……」と、宜なる哉言や、三十分と云へど熱誠を以て机又向ふの時は實に短かきにあらざるなり、先づ試みよ、日に月に其の力の増進するを覺ゆるに至り、愉快絶、手の舞へ足の蹈む所を知らざらんとするに至らん、又愉快ならず、

夫れ語學を學んで一定のさかいに達せば、是れ其の方面に於ける新たなる眼と耳と、舌と手とを具へられたるものなり、何ぞ多とせざるを得や、何ぞ愉快ならずとせんや、

人あり患を得て、將に失明の不幸に陥らんとするや、彼は必ず甲醫に至り、乙醫に走り両醫を訪へ、以てあらゆる手段を盡し是れが保全快復の法につとむるに汲々とし毫も其の煩を厭はざるや必せり、若し夫れ藥石其の効を奏し、己が熱望せる視力の日々く治に向ふを覺へなば、

彼が心情果して如何ぞや、愉快云ふ可からざるの理の當然なり、

又茲に盲目者あり、常に其の不自由を嘆き、其の不遇に泣くや久し、偶々名醫あり、其の盲目の全く廢棄せるに非らざるを知り、彼に告ぐるに是の事を以てし、且つ若し彼が受療に倦まざるの熱心と、之に施すに醫の熱誠と功妙なる治法とを以てせば、必ずや明を得ん事を以て諭さば、彼が胸中果して如何の感あらん、思へやるだに心地よき極みならずや、彼が滿腔の希望を抱へて治を醫の門に乞はんとするは云ふ迄もなき事なり、若しうれ其のたどへ遅々たるにもせよ、順々として治に向と、思はず快哉を呼んで手の舞へ足の蹈む所を知らざるに至らん、況んや彼れ若し盲と啞とを兼ねたるものにして此の如くなりしならんには、誰か再生の思をなさざるものあらんや、蓋し其の愉快筆紙の盡す所にあらざるものあらん、吾人が未だ或る國語に通せざるや、其の文を見れとも讀む能はず、其の語を聴けども解する能はず、將た談る能

はず書く能はず、宛然此の語に對しては盲にして啞なるが如く然らん、然るに時運の進歩ハ謝す可きかな、吾人の熱心と恩師の熱誠とによらば、遂に其の與に達し、さながら再生の思を見るが如き快事ある難きにあらざらんとす、亦愉ならずや快ならずや、

然れども良藥之口に苦がしとかや、且つ夫れ近時醫學の驚く可き進歩と功妙なる手術によりて其の治を早むるを得るに至りしと雖も、亦時に是が疼痛を忍ばざる可からざる事なしとせじ、然るに若し若れ彼、治を乞ふもの、づるくして口に苦き良藥を嫌らへ、腑甲斐なくして手術の痛みに耐へずとなし、跳ね廻るが如きあらば如何、加之、其の醫、若し患者良藥の苦きに顔を蹙むるあれば即ち是れに與ふるに甘さを以てし、手術の痛さを訴へば即ち其の手を止むるが如くんば如何、彼患者の運命知る可きのみ、憐む可き哉彼は其の処方如何に依て快復の望み満々たる目と耳とを持ちながら、遂に盲目に終り永へよ其の不自由に呻吟せざる可からざるなり、何等の痴漢や

や、然りと雖も一時患者の意を得んが爲め、其の處方を緩にして、遂に彼をして憐む可き失明に終はらしめたる醫も亦罪なしとせず、是よ於てか彼れ失明者よして心あらば、否な苦し心なくとも、生命だにあらしめば、己が腑甲斐なかりしを悔やむと共に、又恨を彼の醫に残すものあらん、而して其の恨は其の失明と共に永へに消へざる可し又憐ならずや、若し彼醫たるもの強硬の態度に出で、口に苦き良藥を興へ、心に痛き治法を施したなんには、彼に却て恩人として永遠に其の高恩を忘れんとして忘る能はざらしむるものありしならんに、嗚呼愚なりしかな、若し醫たらんとするもの鑢みざる可けんや。

語學を學ぶものも又心せよ、徒らに苦き良藥を忌み、心に痛き治法を嫌はゞ遂に失明の不幸に終らん、是に於てか悔ゆとも亦及ばざるなり、友よ起て、友よ進め。

○級友豫備近衛歩兵少尉七五二

龜吉君を送る

すみれ

東洋の事局益々切迫生等徒らに空論を闘かはしては其の解決の遅々たるを恨むの時宛も六日正午一葉の電報は七五三君の寓を叩き告ぐるに召集を以てし君は翌晨を待て當地を發せられんとす予輩交を厚ふする茲も多年豈も此行を壯にせずして可ならんや乃ち四五の士は即刻東奔西走。熱誠と誠意とは能く送別會をして短時間に成立せしめぬ。當日午後一時兼六公園覽勝亭に集ふもの三四年生百。爲めに當日同時より開かるべき講話會は延引の厄に遇ひぬ講話會以上に君の送別會の重せらる時機の然らしむるとはいへまた如何も君が平日親誼の厚さを知らむ。恒の會合とは其の性質を異にする今日我れは一種の感にうたれき。山本君の開會の辭七五三君の挨拶池田(菱)君上野君伊藤君池田君(恒)君朝倉君石橋君笹田君等の送別の辭何れも句々悲壯。熱誠其の行を壯にするは一。或は吟聲朗々左偶に起れば右偶凄壯の琵琶を以て和し或は劔を抜て舞ふあれば鐘を叩きて踏るあり……………やがて凱旋の曉にや胸にかゞやく金瑤章……………など、謠ふそん

じよろこらの公達もありき我れは胸の蟠りの解けやらで一種の感のみち／＼ては嗚呼女々しくも君の此の行を送るに血と涙とよりはあらさりさやかにて敵をば散らす木の葉饅頭戦に勝栗等の當日委員諸氏の能く氣づかれしを賞めた、へつゝ晚餐を喫し惜別の話泉盡くるの期なしされども君とて明日の準備もあるものから萬歳の聲に大手森の眠鴉を驚かしあかぬ別に袂を分ちしは午後七時三十分銀漢空に横はり暗の世を照し一道の光明を與ふるも我や霧中彷徨……………吁！君か今宵の夢や如何ならん。

二月七日君を金澤停車場に送るもの三十余名。送る者は留め難く去る者之行き難し窓を隔て、唯潜然たるのみ。やかにて瀛車一聲黒煙を残して走る……………萬歲聲裡……………西と東に……………扉東袂を別つまた何日か再會を期せむ。(送別會の夜君に送る)

今一度聞きて行きませ小金澤

松の尾山に鳴く鶴の聲

行く君よまた何日よして大手堀

有明月夜五位鷺の啼く

西百里名所古跡の多き所

露營の夢に御端書賜へ

我れもまた歌筆すて、劔とりて

君と謳はん長江の水

雪とけのモンゴルの道は我知らず

行きます君は何を贈らむ

アムールの濁りの極み澄さんと

立ちよし男の子何をたゆたふ

○學會を起すべし

吾人は十全會を有せり、否、吾人は本會の一分子たり、然れども尙ほ學會を起すべしと云ふ所以のものは他なし、本會が文武兩道を兼備し其の武道に於ては稍々遺憾なきが如しと雖も、獨り文藝部が雜誌、講話の兩部を有するのみにして未だ充分の設備あるを見ず、之蓋し余は學會を起して其の欠を補ふの急務なるを信すればなり、而し

て之れ是を措て他に良策の存せざるを認めればなり。果して斯の如くんば夫れ何を以て然る乎、乞ふ少しく所信を述べん。

雜誌部を見よ、圖書及交換雜誌の類或は吾人の希望に稱ふものあらん、然れども十全會雜誌は原著を除き何等攻學の資とすべきものなし、之れ本法が一面に於て會報として大部を領せらればなり。更に講話部を見よ、二十分間の有限時刻に於て好材料を得んと欲するは亦甚た難ひ哉。之れ他側に於ては辨術の修練場として其の任務を有すればなり斯の如にして各々他に主眼とする所あり學術の研究場としては誠に囑望少なく茲に學會の設備を俟ちて其の欠を補はざる可らざること其の一なり。

尙ほ或る一定の講演は或る程度の知識を有せされば理解し能はざることあり、然るに雜誌、講話部にありては不平等學級よりなる全体を網羅す、甲には甚だ恰好なる好問題として熟讀玩味將に傾聽斜ならずと雖も、乙にありては學級尙未だ其の域に入らず、空しく之れ他山の石、

何等得る處あることなし。斯の如きは當部の欠点にして吾人は茲に平等分子よりなる或る専門的學會を要とする其の二なり

更に轉じて正科の上に見よ、近時規則の改正せられてより授業時間は減少し或る學科は其の全般に涉ること能はずして中止せざる可らざる悲運に際會すること往々之れあり、若し幸よして完結を告げたりと雖も或は單に失するの虞なき能はず此の時に當りて當該専門の學會を設け傍ら之れを完成せしめんが爲めに本會を要とする其の三なり

日常の講儀は只だ其の骨子のみ、之を上塗りして軟部を具備せしめざれば未だ完きこと能はざるなり、之れ或はクリニック其の他の實習に由て其の機會を興へらるべしと雖も尙ほ一步進んで將來自己の嗜好の上に或る専門學科を講究せんとするもの、素地を固むるに於ては、正科以外、又大に活動せざる可らず、茲に於てか専門學會の必要起る、是れ其の四なり

近來學生の員數は頗る増加したるに拘らず、之を修容すべき新築學校未だ成らず、生等の不便は凡ての方面に波及し、クリニック、細菌、病理、解剖、其の他種々の實習一として此の影響を被むらざるものなし、知る可し入員の増加と其の不利とは全く轉比例し來ることを、之れ蓋し其の欠を補ふ爲めに學會を要とする其の五なり

一時會合の流行時に際しては、二三同好の士集まれば茲に會合の動機をなし、屹然として起り屹然として消ゆ、之れ實に流行性なるもの、特徴として知られたり、一盛一衰、諸多の會合は或は存し、或は滅び、聞として聞かずなりぬ、之れ抑々流行性なるもの、通有性なればなり。初め各級に於てクラス會の組織せらるや余輩之甚だ囑望せるの一人なり、而して之れ今日に至るまで一縷の希望を繋ぎし唯一の會合なりしなり、然れども今や將に衰へんとして——毎月一回の開會は毎學期又一回となり或は又每學年に一回となるが如く——其の經過流行性——一過性に似て馳て其の徴を現はし來るものには非ざるなきや

茲は於てか吾人はクラス會と相關連するところなく専門學會を起して専ら學術を探究する一道の光明によらざるべからざること之れ其の六なり

如上の述ぶる所略々起すべき所以を盡せりと信ず、故に之より其の性質及び成立に就きて一言せん
學會 || 専門的學會は例へば次の如し

一内科學會 (主として三、四年生)

一外科學會 (主として三、四年生及二年生)

一産科婦人科學會 (主として三、四年生)

一眼科學會 (全 上)

一皮膚、花柳病學々會(全 上)

一病理學々會 (主として二、三年生)

一解剖學々會 (主として一、二年生)

一獨逸語學會 (全校生中より)

其他

斯の如くみな設置するに否とは會員の成立と否とに由りて或は置かれ或は欠くべし、然れども此等の學會は漫然

として成り漠然として組織せらるゝ將た這般の流行性 || 一過性なる……忽ち起り忽ち滅する……始めは脱兎の如く終りは處女の如く……不良の轉機を取るものを頗る指彈す可べし。冀くば勦勵——熱心——忠實——耐忍……の要素を有する健全分子を綱羅して精神ある活動する恒久性なる意志的團體を組成せざる可からず之れ會運の死活存亡は健全なる分子を得ると否に關すればなり若し一部銷沈して不良の徵候の現はるゝあらは、之を鞭達し之を同化して醫効を奏さしめ抑も初めより其の要素を有するものを集むることは容易の業に非ず、然らば則ち類化せしめよ、自覺を喚起せしめよ
已に某學會が組立せられたりとせんか學校に出席して斯會存立の承認を受け、開會に當りては當該教授の有益なる講演を乞ひ、學校若し之を定認せらるゝや、斯會に對して相當の便宜を與へらるべく、會員自ら専門的知識を涵養せんか爲めに適切なる方法を講じ一意其の主張を貫くことに勉めざる可らざるなり

余は予の言ふところを尙ほ明晰ならしめんが爲めに斯專門學會の規約を假想し其の成立の内容を窺はん

何々科(學)學會規約(愚案)?

第一條 本會ヲ何々學會ト稱ス

第二條 本會ハ何々科(學)ニ於テ充ラサル所ヲ補ヘ更ニ深ク研究シ後來實力ヲ涵養セントスル基ヲ立ツルヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ金澤醫學專門學校何々級ノ學生ヲ以テ組織シ尙ホ他級生ト雖モ本會力適當ナルヲ認メタル時ニハ入會ヲ許ス

但シ一員同時ニ數會々員タルヲ得ベシ

第四條 本會ハ本會主旨ヲ贊助スル名望アル先輩及ビ教授ヲ以テ贊助員トナス

第五條 本會ニハ會長(教授中ヨリ推撰)(然ラズンバ幹事若干互撰)ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理ス

第六條 本會ハ其ノ目的ヲ達スル爲メニ毎週(或ハ隔週或ハ毎月)一回開會シ贊助員及會員ノ演說講述討論質問相互間ノ知識ヲ交換シ更ニ宿題ヲ備ケテ互ニ論究ス可キ

第七條 會員ハ猥リニ退會スルヲ能ハズ寧ロ誘掖シテ斯學ヲ獎勵シ一同ヨク團結シテ會運ノ隆盛ヲ計ルベキ

第八條 、、、、、、、、

之れ誠に蕪雜なるもの只だ僅かに其の根底を掲けたるのみ

不省自ら揣らず敢て此の重大なる問題に筆を染め、其任務や甚だ輕からざるを覺ゆ、由來愚鈍の質、其の人に非

すと雖も余か熱誠の致す所は之を言はざらんと欲して止むること能はず暫く記して諸賢の反響を得んと欲するや切也。若し夫れ予と感を同くし其の成立に努めんとする

同好の士よ、あらは幸に予が衷情を諒として扶助するところあれ、學校同感の士よ學に忠實なる諸氏よ、我等は心に希望の光を描き耳に凋落の響を聞けり、胸に革新の光明を思ふて眼は固陋の縉まるを見たり。されと我が警醒の聲の低くして遂に何等の齎らす處なきか歟。噫。

二月三日 醫ノ三 渡 邊 彊

* * * * *

會 報

○ 四 方 拜

乾軸一轉、歲華新也旭日の昇る所、五千萬の忠良、等しくみな新春の曙光を拜す。伏

して惟みるに萬世一系の皇室は連綿として
究まりなく二千五百六十四年を迎へ明治の
聖代も亦茲に三十有七を重ねて、普く上天
の惠澤に浴す、臣等の至幸曷ぞ限りあらん。
是に於てか吾等は其の天職を全ふし、微軀
敢て奉公の誠を盡さすんばあらざるなり。
謹んで祝し奉る

本校に於ては例年の如く一月一日午前九時、四方拜の
式を舉行せられ、職員一同、在澤學生皆臨場せらる、
今其の式次を記さんに

- 一、御眞影の開龕、職員一同―學生一同の最敬禮
- 一、醫學科總代林篤氏―藥學科總代臼井順次氏の祝賀の辭あり
- 一、高安校長「職員一同に代りて生等諸君よ向ふて新年を祝し奉る」との詞あり
- 一、退場せるは同十時過ぎなりき (會報係)

○叙任及辭令

海軍々醫學校練習學生ヲ免シ横須賀海軍病院附ヲ命ス
海軍少軍醫候補生 堀井 吉平

海軍少軍醫候補生 土田 久三郎
全 越田 信吉

海軍々醫學校練習學生ヲ免シ吳海軍病院附ヲ命ス
(以上十二月三十一日、海軍省)

石川縣金澤病院調劑員ヲ命ス 林 京次郎

月俸金拾五圓給與

(以上十二月十四日、石川縣)

石川縣金澤病院醫員 加藤 慶三

月俸金五拾五圓給與

石川縣金澤病院醫員 辻本 辰之助

月俸金貳拾五圓給與

石川縣金澤病院醫員 春日 健治

月俸金貳拾圓給與

(以上十二月二十一日、石川縣)

石川縣金澤病院醫員 花岡 佐太郎

依願職務ヲ免ス

(以上十二月二十三日、石川縣)

石川縣金澤病院醫員 田中 一次郎

依願職務ヲ免ス

石川縣金澤病院醫員 沖野 彌一郎

金澤娼妓検査醫並石川縣娼妓病院醫員ヲ命ス

月手當金拾圓給與

(以上十二月十四日、石川縣)

依願職務ヲ免ス

石川縣金澤病院醫員

春日 健治

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

吉江久米太郎

月俸金貳拾圓給與

(以上十二月二十八日、石川縣)

湯本四郎右衛門

七尾町娼妓病院長兼醫員並ニ七尾娼妓検査醫ヲ命ス

月俸金參拾五圓給與

(以上一月九日、石川縣)

任陸軍三等軍醫

八牧 政孝

近郷 重孝

渡邊 十治

各通

村田 讓

堀 政次

吉江 榮太郎

武會 三郎

(以上三十七年二月三日、陸軍省)

○會員動靜

▲館昇榮氏 は一月上旬研究の爲め上京の序に本校へ立寄られたり

▲太田長作氏 は冬季休暇を得て歸郷一月十九日寄校せられたり多分本月三日頃廣島衛戍地へ歸任の筈

▲小山田繁三郎氏 は舊獵海軍少軍醫候補生として海軍々醫學校に入校せられたる處目下日露の風雲急なるより本月本三日海軍々醫學校を開散し吳海軍病院附となられたり

▲陸軍衛生依託生徒 左の通常會員四名は一月二十日附を以て陸軍衛生部依託生徒を命せられたり

鈴木 實 水上 俊三

内海 友七 久我 龜

▲東良平氏 は本校解剖學校授業分擔の處院務多忙の爲め辭職せられ其後任として金澤病院外科部勤務の深美貞之助囑托せられたり

▲森岡惣太郎氏 は本校病理學講師として奉職中の處開業の爲め辭職せられ自ら大坂市に居住せらる

▲諸橋嘉久治氏 一と先づ歸省の上來春早々大坂緒方病院に就職さるゝ由なり

▲笠島吉郎氏 佐賀の池田病院に就職の約成歸郷されたりと云ふ

▲加藤寛氏 在學中より獨逸語學熱心にして高等學校エッケル氏及びウヲールフアールト氏等に親炙せられたる

同氏は今般研究便宜の爲にユ氏宅に寄寓されたり

▲根守正記氏 高岡市東病院に聘せられたりと云ふ
▲松原三郎氏 前號に詳記せる同氏は先月十七日横濱出帆米國遊學の途に上られたり

▲林義輔氏 從來福井縣立病院醫員たりし同氏は今般七尾町鹿江病院眼科主任に聘せられ本月十五日赴任されたり

▲眞柄佐一郎氏 金澤病院内科一部醫員なる同氏は緊急召集により陸軍三等軍醫として第二師團輜重兵隊へ入營せられたり

▲渡邊十治氏 金澤病院外科醫員なる同氏も全上
▲蓮村外男氏 は今般横濱市青木町四百五十五番地へ移轉せられたり

▲中屋重樹氏 は本校物理學講師囑托の處動員令の許に去る七日豫備陸軍工兵少尉の資格を以て小倉第十二師團に應召せられたり

▲眞柄佐一郎氏 は金澤病院内科醫員勤務の處全しく去る九日豫備陸軍三等軍醫の資格を以て第二師團(仙台)に應召せられたり

▲七五三龜吉氏 通常會員(醫學科四年級)たる同氏は動員令の許に去る七日豫備陸軍歩兵少尉の資格を以て近衛師團に應召せられたり

▲渡邊十治氏 金澤病院外科部醫員勤務の處先月下旬よ

り家兄病氣看護の爲め歸省中別項記載の如く叙任せられ直に陸軍三等軍醫の資格を以て第二師團に應召せられたり

○木村博士の祝電

曩に第十六回卒業証書授與の式典を擧ぐるや恩師木村博士の懇篤なる祝電を辱ふす、然れども編者の粗漏之が記入を忘る、罪元より我にあり幸に諒せられよ。併して前號該記事の追加となす(會報係)

○十全會雜誌部第三十一號編輯會

一月二十三日午后一時より庶務所内に開く

出席

編輯長	小川勝陳
雜誌部庶務委員	松田菊治
全 著 係	宇野益之
全 報 係	小原芳雄
全 會 報 係	有壁一雄
全 通 信 漫 錄 係	波邊 彊
議 事	吉野 要
一寄贈及交換雜の抄録の件	藤井一雄

一校歌募集の件

一投書函設置の件

以上

かくて諸般のこと済み退散せるは午后五時過ぎ

因記す上記校歌の募集、投書函の設置に關しては他日其の方法を講して詳報すべし (會報係)

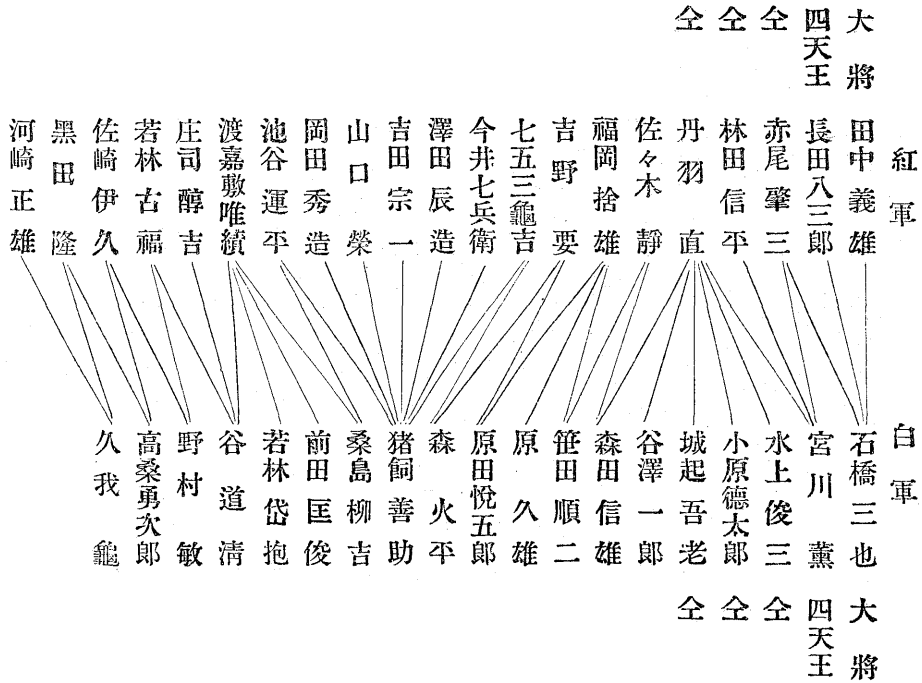
○寒稽古の開始

柔劍両道部に於ては例年の如く寒稽古を施行し去月十一日より開始せられ各部の出席毎日三十余名ありと聞く。北國の天今や朔風のふさまくる所となり雪舞霰散る酷寒の烈しさ洵に之れ雪國の此の頃健兒の武力を練ふべく時と來れり龍攘虎搏、風生電擊、練るべく鍛るべし柔客劍士、之れ炬燵を擁して徒らに壯言する意氣鎖沈の青年の膽を寒らしめ、猛省起て事を爲さしむるの好刺戰劑と知らすや、勉めよ諸氏、腕を撫てし通ひよ三句、聽て榮譽ある賞牌は諸氏の胸間に輝かん (二月三日會報係)

○劍道紅白勝負

東亞の一角風雲頻りに動きて北海浪漸く荒み電雷一閃正に乾坤を震暖せんとす壯士空しく髀肉の嘆を洩して覇氣胸宇に溢れ夢魂已に馳せて朔化の野にあるの時我が劍道

部紅白勝負は本校濟々堂に擧げられぬ時は維れ一月廿三日奇寒料峭骨に徹し六花粉々面を撲つをも物ともせずいでや我敵推來なれ目に物見せて呉れんずと勇心鬪勃堂に集れに健兒は其數多からざるも皆之れ雪虐風饑の寒天を冒し月光斜に窓を射るの道場に武を鍊れるものいかで屠龍搏虎の慨なからんや奮然一躍撃たんとして拒まれ衝かんとして却りて勝を制せらるゝ隼人あれば悠然太刀を青眼に構へ動せず騒かず寸毫の隙に乗して敵の虚を衝かんとする沈勇の士、さては音にも響かぬ雜兵原何程の事かあらん一撃の下に打捨てなんと轟然躍出縦横無尽薙き立て斬り立て鋭鋒當る可らざる猛士何れも意氣軒昂正氣滿身に溢れて憂々刀に神あり兩軍の群雄己に滅して二將堂々陣頭に見ゆるに及ひては滿場鬨として音なく相互片唾を呑んで勝敗如何を憂ふ細心翼翼一進一退苟くもせず激して嘯虎疾風を呼ひ靜にしては蛟龍深淵に潜むの慨あるもの之れ一軍の命脉を一身に負へる兩將が互に鎬を削れる秘術にあらずや去れとも白軍運や拙かりけん、あわれ中原の鹿逐に紅軍の將が掌中に歸しぬ勝負了るや直に茶話會に移り壯談壯話尽くるを知らず全く了りを告げしは午后五時當日は高安會長福見先生其他二三の醫員諸氏の臨席ありしも部長高山先生には病氣の爲め出席せられざりき



○特別會員東良平氏に謝す

一昨年來、解剖學講座の一部を擔任せられたる我が特別會員東良平氏は、昨夏、高岡に於て開業し、業務多端の身を以て而かも遠隔の地通勤の勞と厭はず、十年一日の如く教鞭を執られたるは生等の甚だ感泣する所、氏が今や職を辭して校を去らるゝに臨み、恩師の洪大なるに感し、謹んで謝す、(つとむ)

○細菌實習の開始

三年級は第一學期に於て細菌學各論を終へたるを以て第二學期より實習を始め
 因に記す、イロハニの四組は豫定日數の實習を経て本月十八日結了せり

○名譽會員及特別會員諸氏より年賀狀を受けたり其住所氏名左の通り

明治三十七年正月

十 全 會

- 名譽會員 在大坂 木村孝藏君
- 特別會員 在常陸 飯塚忠男君
- 全 東京陸軍々醫學校 池田 耕君
- 全 越后長岡甲野病院 井口正察君

但シ五十四部ハ本年卒業生五十四人ヲ見積リタリ
 第二 通信費 三五、五六〇
 右通信費ハ雜誌發送費及通信費ノ二項ヲ含有ス
 第三 雜費 二、〇〇〇

○統計

○明治三十五年度入學者父兄職業類別及全三十六年度入學者父兄職業類別及學用患者表

○明治三十五年入學者
父兄職業別

職業別	父兄職業別	
	醫學科	藥學科
醫師	三人	一人
農業者	五人	二人
商業	二人	六人
官吏	一人	二人
會社員	二人	二人
辯護士	一人	一人
無職業	八人	一人
藥劑業	〇人	四人
合計	一〇四	一八
	三三	三三

○明治三十六年入學者
父兄職業別

職業別	父兄職業別	
	醫學科	藥學科
醫師	三人	二人
農業者	四人	五人
工業	三人	一人
商業	一人	一人
官吏	七人	一人
辯護士	二人	〇人
神職	二人	〇人
僧侶	三人	〇人
無職業	一人	二人
合計	一六	一六
	三三	三三

○學用患者表 (三十年度)

種別	學用患者表	
	內科	外科
皮膚病科	五	五
耳鼻喉科	八	八
小兒科	一五	一五
婦人科	三三	三三
產科	一三八	一三八
眼科	二七	二七
合計	一、六七	一、六七
外來	三、四六	三、四六
再來	六三	六三
合計	四、〇二	四、〇二

○三十五年度醫學專門學校學用患者表

三十六年十月調

院入 延人員	來計	外新		千葉醫學 專門學校	仙臺醫學 專門學校	岡山醫學 專門學校	金澤醫學 專門學校	長崎醫學 專門學校	計
		再	來						
九七二 一六、三九	二七、五四	一、二五	二六、三九	一、二五	一、二五	一、二五	一、二五	一、二五	八、一五〇
七九	一四、八〇〇	一、六七	一三、一三	一、六七	一、六七	一、六七	一、六七	一、六七	七五、七四
七九	一三、七二	一、八六	一二、八六	一、八六	一、八六	一、八六	一、八六	一、八六	八三、九三四
二六	九、一六九	一、三七	七、八二	一、三七	一、三七	一、三七	一、三七	一、三七	七五、七四
一八九	一八、七九	一、九七	一六、八二	一、九七	一、九七	一、九七	一、九七	一、九七	七五、七四
二、三六二	五六、五〇一								

○三十五年度醫學專門學校解剖屍體表

三十六年十月調

在員者ニシテ 死亡ノ者		監獄署ヨリ送 付ノ死體		法醫學上ニ關 スル死體		其 他		總 計	
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
八	五	七						一六	一六
二	一							二七	二七
一								一	一
二	一							二	二
三	二							三	三
四	三							四	四
五	四							五	五
六	五							六	六
七	六							七	七
八	七							八	八
九	八							九	九
一〇	九							一〇	一〇
一一	一〇							一一	一一
一二	一一							一二	一二
一三	一二							一三	一三
一四	一三							一四	一四
一五	一四							一五	一五
一六	一五							一六	一六
一七	一六							一七	一七
一八	一七							一八	一八
一九	一八							一九	一九
二〇	一九							二〇	二〇
二一	二〇							二一	二一
二二	二一							二二	二二
二三	二二							二三	二三
二四	二三							二四	二四
二五	二四							二五	二五
二六	二五							二六	二六
二七	二六							二七	二七
二八	二七							二八	二八
二九	二八							二九	二九
三〇	二九							三〇	三〇
三一	三〇							三一	三一
三二	三一							三二	三二
三三	三二							三三	三三
三四	三三							三四	三四
三五	三四							三五	三五
三六	三五							三六	三六
三七	三六							三七	三七
三八	三七							三八	三八
三九	三八							三九	三九
四〇	三九							四〇	四〇
四一	四〇							四一	四一
四二	四一							四二	四二
四三	四二							四三	四三
四四	四三							四四	四四
四五	四四							四五	四五
四六	四五							四六	四六
四七	四六							四七	四七
四八	四七							四八	四八
四九	四八							四九	四九
五〇	四九							五〇	五〇
五一	五〇							五一	五一
五二	五一							五二	五二
五三	五二							五三	五三
五四	五三							五四	五四
五五	五四							五五	五五
五六	五五							五六	五六
五七	五六							五七	五七
五八	五七							五八	五八
五九	五八							五九	五九
六〇	五九							六〇	六〇
六一	六〇							六一	六一
六二	六一							六二	六二
六三	六二							六三	六三
六四	六三							六四	六四
六五	六四							六五	六五
六六	六五							六六	六六
六七	六六							六七	六七
六八	六七							六八	六八
六九	六八							六九	六九
七〇	六九							七〇	七〇
七一	七〇							七一	七一
七二	七一							七二	七二
七三	七二							七三	七三
七四	七三							七四	七四
七五	七四							七五	七五
七六	七五							七六	七六
七七	七六							七七	七七
七八	七七							七八	七八
七九	七八							七九	七九
八〇	七八							八〇	八〇
八二	八〇							八二	八二
八三	八一							八三	八三
八四	八二							八四	八四
八五	八三							八五	八五
八六	八四							八六	八六
八七	八五							八七	八七
八八	八六							八八	八八
八九	八七							八九	八九
九〇	八八							九〇	九〇
九一	八九							九一	九一
九二	九〇							九二	九二
九三	九一							九三	九三
九四	九二							九四	九四
九五	九三							九五	九五
九六	九四							九六	九六
九七	九五							九七	九七
九八	九六							九八	九八
九九	九七							九九	九九
一〇〇	九八							一〇〇	一〇〇

○女兒身長體重の調査

明治三十五年十月調査の在學女兒の身長體重平均數と三島醫學博士(文部省學校(衛生主事)の調査に係る女兒(東京畿内山陽山陰九州四國奥羽)七千四百六十七人の身長體重平均數と對比するに左の結果を得たり

長はセンチメートル重はキログラムを單位とす

年齢	區別	身長	體重
十一年	三島	一二五、九	二四、四
	本島	一二四、五	二三、八
十二年	三島	一三一、三	二七、八
	本島	一三一、六	二六、三
十三年	三島	一三九、〇	三一、四
	本島	一三六、五	二九、七
十四年	三島	一四三、二	三六、五
	本島	一四一、五	三三、九
十五年	三島	一四四、七	三八、二
	本島	一四三、九	三五、七

本校女兒の身長體重共に三島平均以上に達せし者を調査するに左の結果を得たり

年齢	調査人員	三島平均以上の者	百分比
十一年	二五五	九一	三五
十二年	二八四	八四	二九

十三年	二二六	六七	二八
十四年	一五九	四一	二五
十五年	五九	一四	二三
合計	九九三	二九七	二九

石川縣 高岡町高等小學校

○高安校長の訓辭

日露の外交は斷絶せり、日本帝國の國力を賭して覺悟したる戰端は開かれたり、東洋の天地は今や戰雲を以て滿され人は將よ干戈の爲免に眩せん。誠に之れ臥薪嘗膽の秋千載の一遇、國を擧げて熱腸忽ちにして猛然、万事を捨て、劍に代へんとす、況んや吾兵勇の義烈頗りに戰勝の報を齎するや。衆人の將に狂喜して職に洵せんとるもの故なしとせんや。

此の時に當り高安校長は職員學生一同を濟々堂に集め訓誨しらく

今や日露兩國は砲火を以て相見ぬ我忠勇なる將卒は能く其戰捷の偉功を奏し吉報の頻々として吾人の耳朶に響くや、諸氏も亦胸中に湧騰する熱血を汲み爰に猛勇

なる軍人を嘆美し邦家の前途の爲めに激越の意氣滄州を凌ぐの慨なかるへけんや、之れ國民同胞と共に國運を對して滿腔の熱情あるもの、等しく禁ずること能はざるところなり、

然れども期せよ人各天職あり一國の人心戰爭に酔ひ躁狂徒らば學生の襟度を失し學業を疎んして戎軒を之れ事とせんとするが如きは太たしき誤解予の殷慮亦實に茲に存ず、夫れ敵は世界の強國なり戰局の終を告ぐるに至るは尙ほ遠き將來よあらん、此の間諸氏は各天職の存する所に依り益其の本領を發揮せしめざる可からず云々

之れ元より其の處生等は其の教訓に依り當だ帝國の萬歳を祈り帝國の生民として將た學生として九仞の功を一簣に欠くか如きことなからんことを期す

十全會々長の提議

此の訓辭の外に高安校長更よ又十全會々長として建議せられたるは戰爭の援助の一端として軍資金を献すへきか將た軍資充實の爲め本會の基本金を擧げて軍事債券に應募せんか又本會經營事業に制節を加へ或る甚だ緊要ならざる一部を中止するや又は全廢して以て聊か忠誠の微志を表彰せんことを提議せられたり」

右に關しては尙ほ他項の記事を照見せらるべし

(二月十五日つとむ記)

○本會之經費節減

別項高安會長の提議に對して本會各部委員の曩日臨時會を開きたるが其の結果左の如く佐々木理事より報告せられたり

明治三十七年二月十八日別記ノ通臨時協議會ニ於テ決定サレタリ

記

- 一金拾四圓四拾錢 講話部大會費
 - 一金七拾貳圓 雜誌部雜誌費
 - 一金參拾圓 遊技部大會費
 - 一金拾五圓 同 ロンテニス費
 - 一金拾圓 弓術部大會費
 - 會務費
 - 一金參拾壹圓四拾參錢八厘 豫備費
 - 合計金百七拾八圓八拾參錢八厘
- 右ハ本年度經常部支出豫算決定額ヨリ各部ニ於テ節減致シ而シテ資金四百八拾六圓拾六錢貳厘ヲ加ヘ合計金六百六拾五圓ヲ以テ今回大藏省令第四號國庫債券額面七百圓申込ム

○雜誌部の決議

前項記事の如く當部に於て七拾貳圓の雜誌費を節減せられたるに由り去る十九日委員會を開き左の如く決定せり

- 一、本誌三十一號と同三十二號とを合冊にして數紙を増加し今回發刊すること
- 二、本誌の右の節減により發行回數を減せざること
- 三、故に本學年に於ては爾后二回發兌すること

右の如くなるを以て本誌は第三十一號發刊の筈なれども次號を合併せり之れ元より今日の時局に對して吾人の誠意を表はす美學に出でたるもの幸よ諸賢の御諒察を冀ふ

* * * * *

通信

○島誠郁氏の通信

(前畧)尙本校卒業生にして歩兵七聯隊に入隊せられしは

第十中隊 太田 精 一

(通信)

松田 研吉
高森 万次郎
島 誠 郁
福岡 喜洋
永江 直之

第十一中隊

小生等起床午前六時半にて午前八時より九時半迄學科の講義を聞き午前九時半より十一時半迄術科有之候尙夜一時間學科有之午後八時半消燈嘸と共に着床致候先づ稽古は以上の時間に之有候得共尙他に仕事澤山有之學生々活より實に忙しく有之候尙月日進めば中々面白き様に感じ候食物の御案内の通に有之候入隊初めば消化吸収稍困難なりしと見へ糞量平素に五倍も便出致得共五六日後に至れば漸次慣れて消化吸収し便量通常の如く相成候を見ても吸収十分に相成候事と感じ申候術科は當今柔軟体操が第一にし小生を除く他は皆々關節十分に屈伸致候小生の元來關節の屈伸硬く然れども漸次稽古の結果運動區域も弘まり喜び居り申候實に柔軟体操は必要と感じ申候現役見習軍醫の吉井康次郎、小島顯治、羽根田信次の諸氏に御座候。

○平田一若氏よりの通信

(小川教授宛)

(前略)私事秋元先生に別かれし以來舵なき舟に異ならず

充

其日くを暮し居り候へば去年十一月遂に病院を辭し當院に奉職致し申候其際十全會へも御通知申上置き候故多分御承知くだされし事と存申候當地方にも Gynaecologie Thologie との醫者之れなき爲め私も幾分か間に合ひ申候併し口惜しきは何も知らざる産婆に好を通せざれば富貴の病家を得ること能はず産婆の權勢驚愕の外之れなく候依て自己の修得せし力を充分に行ふこと能はざれば如何にも残念至極に存候併し尙ほ半年を経過し候へば大概の重なる患家を占領し現今産科技術の昔日に異なる所以を知らしめんものをと力み居り候、只今は産婆養成などに従事仕居り候次第にてかゝる事に従事候ては常に念頭を離れざる研究の方には無頓着にて思ふて初めて年の経過候を自覺いたし候次第御座候(後略)

一月九日

* * * * *
* * * * *

會告

○寄贈及交換書目

(一月廿八日迄領取ノ分)

日本眼科學會雜誌 七ノ三、二、

全

會

- | | | |
|--------------------------|---|------------|
| 順天堂醫事研究會雜誌 三七、二、 | 全 | 愛知縣立醫學專門學校 |
| 同窓會雜誌 三、 | 全 | 會 |
| 日本醫事雜誌索引 三十四年分 | 全 | 日本醫事年報社 |
| 學友會報 三、 | 全 | 山口高等學校 |
| 東京醫事新誌 一三五、六、七、八、九、四〇、一、 | 全 | 局 |
| 藝備醫事 九〇ノ八ノ六、九ノ八ノ七、 | 全 | 發行所 |
| 醫海時報 四九五、六、七、八、九五〇、一、二、 | 全 | 社 |
| 岡山醫學會雜誌 一六、七、 | 全 | 會 |
| 産婆學會雜誌 四、九、 | 全 | 日本産婆學協會 |
| 治療新報 三、二、 | 全 | 社 |
| 日本醫事週週報 四九、六〇、一、二、三、四、五、 | 全 | 社 |
| 藥石新報 四三、四、五、六、七、八、 | 全 | 社 |
| 弘田教授在職十五年紀念會誌 下一冊 | 全 | 弘田教授紀念會 |
| 北海醫報 三ノ六、 | 全 | 北辰病院研究會 |
| 皮膚科及泌尿器科雜誌 三ノ六、 | 全 | 日本皮膚科學會 |
| 學士會月報 一八九、九〇、一、 | 全 | 會 |
| 中外醫事新報 五九、七〇、一、二、 | 全 | 社 |
| 成醫會月報 二六、二、 | 全 | 社 |
| 醫事新聞 六五、二、三、 | 全 | 會 |
| 醫談 八、九、 | 全 | 發行所 |
| 産科婦人科學雜誌 五ノ三、六ノ一、 | 全 | 會 |
| 助産ノ栞 九、二、 | 全 | 緒方助産婦學會 |

千葉醫學會雜誌 五、	全會
公衆醫事 七ノ七、	全會
東京醫學會雜誌 一七ノ三、四、八ノ一、	全會
神經學會 二ノ五、	全會
日本助産婦新報 七、二、	全發行所
植物學雜誌 一七ノ三〇、二、	東京植物學會
福井縣醫學會雜誌 五、三、	福井縣醫學會
國家醫學會雜誌 二〇〇、一、	全會
北越醫會々報 一三、	全會
校友會雜誌 初、	岡山醫學專門學校
軍醫學會雜誌 一三、	陸軍々醫學會
藥學雜誌 二六、三、	日本藥學會
好生館醫事研究會雜誌 一〇ノ六、	全會
廣島衛生醫事月報 六、	全會
大日本私立衛生會雜誌 二四七、	全會
醫學中央雜誌 一〇、	長崎醫學專門學校
研瑤會雜誌 五七、	全會
中央醫學會雜誌 五、六、	全會
神經學年報 第一卷一冊 三十五年度	日本神經學會
獨乙語學雜誌 六ノ四、	全會
北辰會雜誌 三、	第四高等學校
衛生談話 三、	通俗衛生茶話會

校友會雜誌 二七、	全會	千葉醫學專門學校
中央婦人科學雜誌 一ノ四、	全會	緒方婦人科學會
臺灣醫學會雜誌 一六、	全會	臺灣醫學會
校友會雜誌 三、	全會	京都府立醫學專門學校
醫科器械月報 二〇、	全會	熊本縣立熊本中學校
江原 三、	全會	熊本縣立熊本中學校

○十全會々費領収

(明治三十七年
一月廿三日迄)

金貳圓	(自三十五年 至三十六年度二ヶ年分)	本下克 雄君
金參圓	(自三十五年 至三十七年度三ヶ年分)	吉住 保君
金貳圓	(自三十五年 至三十六年度二ヶ年分)	辻本辰之助君
金貳圓	(全)	越野義三郎君
金貳圓	(全)	上 加藤慶三君
金貳圓	(自三十六年度 至三十八年度三ヶ年分)	高崎 二郎君
金壹圓	(自三十五年 至三十五年度一ヶ年分)	宮井 勇君
金貳圓	(自三十五年 至三十六年度二ヶ年分)	沖野彌一郎君
金壹圓	(自三十五年 至三十五年度一ヶ年分)	津川 恒君
金貳圓	(自三十五年 至三十六年度二ヶ年分)	竹多乙三郎君
金參圓	(自三十四年度 至三十六年度三ヶ年分)	酒井佐太郎君
金參圓	(全)	上 三木三郎君
金壹圓	(自三十六年度 至三十六年度一ヶ年分)	大西瀨 治君

謹告

○本誌第三十一號は先月中發刊すべきの處延引今日に至れり加之今回の經費節減に於て一回發行の金額を割讓するや茲に委員會の決議に依り本誌に加ふるに又次號の原稿を以てし兩號相合して發刊するごせり

○本誌の末尾に添へたる會員名簿は最近の調査に依るものなれども亦多少の異動なきを保せず願くは住所變更の都度必ず御報導あらんことを

○本誌八十九頁以上に於て欄外記入の「十全會雜誌第三十二號合冊」を脱す

次回發刊の第三十三號は四月中に配附すべく原稿ノ切を三月十日と定む、續々御投稿あらんことを冀ふ
二月

十全會雜誌部

ドクトル 富士川 游主幹

治療新報

毎月一回刊行〇一部定價金二十五錢郵
稅壹錢〇一箇年分(十二冊)前金貳圓八
拾錢〇半箇年分(六冊)前金壹圓五拾錢

治療新報は、獨逸國にて盛行はる、中央雜誌 Centralblatt の體裁に倣ひ、治療に關する論說及び實驗の内國並に外國醫事新聞に登載せられたるものを摘録し、一目の下に治療方則の進歩を綜覽するに便するを趣旨とし記事の欄を別ちて

論說 〔斯道専門の大家に乞ひ、治療に關する論說の草稿を得て、これをこの欄に收む〕

實驗 〔治療上の實驗説を輯め以て各種治療の方法及び其價値に關する諸家の所見を報告するものとす〕

綜覽 〔一定疾病の療法につきて、歐米諸邦に於ける最新の報告を網羅し、これに關する吾人現在知識の程度を示さむとす〕

摘録 〔歐米及び我邦の醫事雜誌より治療に關する業績の概要を摘録す〕

新著 〔治療界に於ける最新の著述の主なるものを舉げて之を紹介し、又目錄を作りて隨意購求の便に供す〕

學會 〔内國及外國の學會記事中よる治療に關する者を抄録し以て學界の趨勢を知るの便に供す〕

器械 〔新發明にかゝるもの若くは改良製作よかゝるものを圖畫を挿みて掲載す〕

藥品 〔新藥及び新榮養品につきて、精細に報告す〕

右の如く、あらゆる方面より、治療に關する諸専門家の斬新なる報告の萃を抜き、これを一部冊子の中へ網羅して以て治療新報の名に背かざらむことを期す
我邦に於て中央雜誌 Centralblatt を刊行するの擧は蓋し、この雜誌を以て嚆矢とすべし我儕微力自から固より其任に適せざるを知る、而かも進でこの事に當る所以のものに私かに醫學の趨勢を見て、這般の擧の一日もこれを緩ふすべからざることを感じたればなり、願ひく我同僚諸彦のこの業を贊助あらんことを

發行所

〔東京市本郷區龍岡町三十四番地〕
〔電話〕下谷 一六七二番

治療新報社

(廣告)

後三

謹 賀 新

弊舖儀安政四年始メテ外科器械業ヲ起シ候テヨリ爾來年ヲ遂ヒ隆盛ニ趣キ候事全ク江湖大醫諸先生方ノ御陰ト深ク奉感謝候就テハ何トカ愛顧諸君ニ御禮申上度平素心掛居候處今般去ル御客様ノ勸獎ニ隨ヒ從來御厚情ヲ蒙リ候御禮ノ印トシテ金屬製函入袖珍外科サツク及新式消毒器ノ二品ヲ製造致シ格外ノ廉價ヲ以テ豫約販賣仕候事ニ致シ申候抑モ以上ノ二品ハ世上未ダ一般ノ開業ノ諸先生方御使用ニ便ナル者少ク爲ニ常ニ御不自由ヲ感セラル事多ク御見受申候ニ付弊店ハ右ノ遺憾ヲ補ヒ候物ヲ製作仕度心掛此度漸ク完全無缺實用裝飾共ニ全キ物ヲ製造致シ得之ヲ大醫諸先生方ニ乞ヒ御試驗ノ上ニテ委ク賞讚ノ詞ヲ頂キ候儀ニ有之候間此度左記ノ如キ豫約ノ方法ヲ設ケ御購求ノ便宜ヲ企畫仕候此儀宜敷御諒察ノ上續々豫約御加盟成被下且御知人方エモ廣ク御勸誘ノ程奉懇願候謹言
追而豫約申込ノ時期ヲ過ラザル様此際至急御申込被下度候

金屬函入袖珍外科サツク
最新式綿紗消毒器 豫約方法

最新式袖珍外科サツク

○本品之體裁

洋白製金屬函入ニシテ形狀小形ニシテ謂ユル
ボツケヅト入ナリ體裁實用共ニ無比ノ良器ナリ

○本品之內容

金屬柄 刀三 齒子二 普通 齒子一 溝付 消血子一
曲直 券二 シーヘル 鑷子一 持針 器一 普通 消血子一
縫合 針五 縫合 糸一 糸 卷 器一 磨 草一

○本品之定價

一個 金拾貳圓也

○豫約代金及拂込方法

(甲種) ハ本年二月二十五日迄ニ一時 金九圓二十五錢ヲ拂込事
ハ本年二月二十五日迄友三月三十日迄ノ
(乙種) 兩度ニ金五圓宛ヲ都合 金拾圓ヲ拂込ノ事
外ニ小包郵税金拾錢也

最新式綿紗消毒器

○本品ノ體裁

シムメルブツシユ式蒸氣消毒器ヲ稍ヤ小形ニ縮メ多年弊舖ハ大ニ諸先生ヨリ説明ヲ受ケシ結果苦心ノ曉キ此完全無缺ノ良器ナリテアラワル

年

○本品ノ内容 附屬綳帶貯槽器大形二個及鉄製コンロ寒暖計

○本品ノ定價 一個 金二拾七圓五拾錢也

○豫約代價及拂込方法

(甲種)

ハ本年二月二十五日迄ニ一時

金二拾圓ヲ拂込事

(乙種)

ハ本年二月二十五日迄及三月三十日迄ト
ノ兩度ニ金拾壹圓宛郡都合

金二拾貳圓ヲ拂込事

外荷造料金七十五錢也

豫約申込期限 豫約申込期限ハ本年二月二十五日トス期日後ハ定價復ス

現品出來期限 現品出來豫定ハ本年三月十五日ヨリ三十日迄ニ豫約拂込ミ金ノ順序ニ依リ其都度配達可

仕候

見本圖面御入用之節ハ御一報次第御送附申上可候

東京市淺草區北元町五番地

明治三十七年一月

遠州屋

石代重兵衛

●發賣豫約廣告

○赤穂義士銘々傳

信夫怨軒先生講演
全一冊定價十五錢

右ハ本會講演會ニテノ講演ニ係ルモノニテ來二月ヲ以テ終了スルニ依リ實費ヲ以テ廣ク讀者ニ頒タントス凡百
頁全篇總振假名、文章平易、事實正確、歴史、修身ノ好參考タルハ勿論、家庭用トシテモ亦良伴侶希望者ハ一
月三十一日迄ニ本會事務所へ宛申込マルベシ

東京市麴町區有樂町東京市役所内

東京市教育會

廣島衛生醫事月報

目下第五十六號發行

毎月一回二十五日發行

定價
 一部 金五
 半年分 金參
 一年分 拾
 拾錢
 廣告料一行(廿四字詰) 金拾 錢

廣島衛生醫事月報は廣島縣下唯一の専門雜誌にして苟も衛生醫事に關する行政上の利害得失を論議講究するの自由あり殊に大日本私立衛生會廣島支會、廣島縣郡市聯合醫會及京都醫學校廣島縣出身同窓會記事を掲載するの委囑を受けたれば向後の紙上燦然たる光彩を喚起すべし其項目左の如し

論說 諸家の衛生醫事に關する正確なる論説を掲載すべし

衛生醫事 適切有益なる講義、演説、談話、實驗等を掲げて讀者諸彦に紹介せん

摘錄 切に斬新なる内外諸家の卓絶、奇拔なる原著より要を摘し粹を録す

問答 衛生醫事に關する質疑應答を世に紹介すべし

統計 醫事衛生界に於ける評論、史傳、通信等を集む

寄書 江湖諸彦の投書寄稿は甘んじて此欄に掲ぐ

公會 醫事衛生及藥學等に關する諸會の記事は詳細確實に報道す

公報 衛生醫藥業に關する時々の官令、公報は本欄に掲げて洩すことなし

雜報 内外の醫事衛生藥業界に關する日々ので來事は精細正確迅速に報道す

廣告 斯道に關する有益なる廣告を登載す

廣島市猫屋町百〇六番屋敷

發行所

廣島衛生醫事月報社

藥品名	性 狀	醫 治 効 用	用 量 及 用 法
甲 狀 腺 越 幾 斯	羊ノ甲状腺ヲ取テ乾燥 越幾斯トナシタルモノ 粉末一弓ハ膠嚢百個人 ノ一個中〇、一二三錠劑 百個人入、一個中〇、一 三ノ三種アリ	其ト要ナルモノヲ擧レ バばせどラ氏病、肥滿 病、甲状腺腫、粘液水 腫、血友病、重皮病、濕 疹、鱗屑疹、重性梅毒、 骨形成微弱等	〇、一二乃至〇、三ナレ ト實験者中多量一、〇 以上ヲ用テ著効アリ毫 モ藥品ニ依テ起レル害 ナシト報告セル者アリ
鹽 化 ア ド リ ナ リ ン	高峯工學博士ニ由テ發 見セラレタル副腎中ノ 有效主成分ニシテ目下 醫藥ニ供セルハ千倍液 ナリ殆ド無色無味ニシ テ膏寫入半弓入瓶ノ二 種アリ	鼻耳咽喉及眼科等總テ 粘膜炎及外皮ノ小手術 ニハ無血ニテ施術スル チ得内藏出血ニハ内服 又皮下注射等應用シ	外用ニハ一萬倍ヨリ千 倍粘膜炎ニハ塗布外皮 ニハ注射ス内臓ノ出血 ニハ千倍溶液二三滴 チ内服シ半乃至一筒 注射ス
タ カ チ ア ス タ ー ゼ	灰白色ノ粉末ニシテ高 峰博士ニ由テ發見セラ レタル純正品ナルヲ以 テ効力強ク變質腐敗ノ 憂ナキハ本品ノ特長ナ リ粉末膏寫、半弓四分 一弓及錠劑ノ兩種アリ	無比ノ澱粉消化藥ニシ テ胃ノ澱粉不消化ヲ治 スルノミナラス慢性下 痢ニ於ケル腸ノ不消化 ニ又著効アリ	〇、五乃至一、〇食事ノ 半バニ於テ若クハ其直 後ニ一日三回ニ分服ス 多量ニ過ルミ只無用ニ 歸スルノミ敢テ障害チ 認メス
ク ロ レ ト ー ン	美麗ナル雪白色ノ結晶 ニシテ其臭味共ニ龍腦 ノ類シ酒精、依的兒、コ ロ、ホルム、偲里設林 等ニ溶解シ水ニハ僅ニ 溶解ス膏寫撒入ナリ	有力ナル催眠防腐局所 麻酔ノ効ヲ兼有シ殊ニ 惡阻船暈喘息咳嗽胃痛 等ニ賞用ス外用ニハ火 傷其他ノ創傷ニ應用ス	内服ニハ〇、三乃至一、 三局所麻酔ニハ〇、二 乃至〇、五ヲ注射シ外 用ニハ〇、五乃至一、 撒布又ハ溶液トナシテ

東京市日本橋區三共商店鹽原又策南茅場町番地

<p>カスガ ラサグ ラダ錠</p>	<p>糖衣錠結 麗阿舊篤</p>	<p>グリスリ ン坐藥</p>	<p>ヨヒン ビン</p>
<p>乾燥越幾斯チ糖衣錠ト ナシタルモノ恰モ基石 形ニシテ直徑一分モ 衣ノ甘味アルノミ毫モ 苦味チ感ゼズ百個人入及 五百個人入ノ二種アリ (一)錠含量〇、一二三</p>	<p>基石形ニシテ唯純良ナ ル糖衣ノ甘味アルノ外 藥品固有ノ臭味共ニ感 ゼズ含量〇、〇二五及 百、〇五各百個人入及五 百個人入ノ四種アリ</p>	<p>グリスリン含量ハ九十 五%他ノ含量少ナキ幾 多ノ製品ニ比スレバ其 効ノ確實ナル論チ俟タ ス大人用小兒用各六個 入十二個人ノ四種ア リ</p>	<p>純白色針狀ノ新アルカ ロイドニシテ結晶品ト 錠劑ノ二種アリ結晶品 ハ水ニ溶解シ錠劑ハ其 含量〇、〇〇五ナリ</p>
<p>頗ル緩和ナル下劑ニシ テ健胃ノ効アリ常習便 秘ノ特效藥ニシテ小骨 盤内ノ充血チ起サズ故 ニ妊婦ニ用テ妨ケナシ</p>	<p>肺及ヒ其他ノ臟器結核 ニ賞用セラル、ハ記載 ノ要ナク又腐敗性嘔吐 ニ最モ適當ナルコトヲ 賞揚セリ</p>	<p>高壓浣腸チ必要トスル モノ、外總テノ便秘ニ 賞用ス殊ニ妊婦及初生 兒ノ排便ニハ必要缺ク ベカラザルモノトス</p>	<p>古來未曾有ナル催養劑 ニシテ殊ニ神蒸性陰萎 症ニ効アリ獨リ未梢ニ 作用スルノミナラス中 樞ニモ作用スト論セリ</p>
<p>普通ノ便狀ニテ排泄ス ルニハ三錠乃至五錠軟 下ノ目的ニハ五錠乃至 七錠チ空腹時ニ用ユ</p>	<p>日本局法ニテ一日一、 〇チ極量トスレバ實際 其數倍チ用ユ腐敗性嘔 吐ニハ本錠劑チ一日三 回一錠宛チ用ユ</p>	<p>大人及ヒ小兒共ニ坐藥 一個チ肛門ニ挿入シ効 チ奏セサルコトナク反 復チ行フノ必要ナ シ</p>	<p>内用ニハ〇、〇〇五乃 至〇、〇〇七五注射ニ ハ〇、〇〇二五乃至〇、 〇〇五實驗者ハ尙多量 チ用テ著効アリ害ナキ チ報ス</p>

東京市日本橋區三共商店鹽原又策南茅場町二番地

金澤醫學專門學校 十全會會則摘要 (明治三十四年十月改正ス) (全文ハ本誌第廿號ニ在リ)

- 一本會ハ本校職員、卒業生、學生及本校ニ緣故アル者ヨリ成リ職員及卒業生ヲ特別會員トシ學生ヲ通常會員トシ本校ニ緣故アル者ヲ贊助會員トス
- 本校職員及學生ハ總テ本會會員タルノ義務アルモノトス
- 一本會ニ講話部、雜誌部、遊技部、劍道部、柔道部及弓術部ノ六部ヲ置ク
- 一本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會員ノ負擔トス
- 本校職員タル特別會員(校内特別會員)ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附スベキモノトス
- 本校卒業生タル特別會員(校外特別會員)ハ會費トシテ一ケ年金壹圓ヲ納ムベシ但シ一時ニ金參圓ヲ納ムル者ハ五ケ年ヲ一期トシ該期間本會發行ノ雜誌ヲ配布ス
- 將來卒業ノ特別會員ハ卒業ノ當時必ズ三ケ年分ノ會費金壹圓ヲ納ムルノ義務アルモノトス
- 通常會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓五拾錢ヲ納ムベシ
- 一本會ノ會計年度ハ毎年九月ニ始リ翌年八月ニ終ル
- 一講話部ニ於テハ毎年一回以上講師ヲ聘シテ道義上ノ講話ヲ聽聞シ又隔月一回醫學及藥學ニ關スル講演會ヲ開ク
- 一講話部ニ於テハ特ニ醫學會ヲ開クアリ
- 一雜誌部ニ於テハ毎年五回醫學及藥學ニ關スル會員ノ演說談話並ニ本校ノ現況、會員ノ動靜等ヲ記載シタル雜誌ヲ發行シテ會員ニ頒ツ
- 雜誌部ニ於テハ本會所屬ノ圖書ヲ管理ス
- (運動部規定ニ關スル規定摘要ハ畧ス)

▲投稿心得七則▼

- 一投稿用紙ハ中折紙を用ひ必ず楷書たるべし殊に洋字ハ字體を明かに記入せらるべし
- 一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て沒書トす
- 一誌上匿名を望まるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし
- 一言の政治に涉り或は德義に背くものは一切登載せず
- 一未完の原稿は採録せず
- 一原稿採否の權は編輯長にあり
- 一一旦寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

十全會雜誌部

明治三十七年二月二十四日印刷
明治三十七年二月二十六日發行

編輯兼發行者

石川縣金澤市廣坂通新道二十六番地
森 島 彦 夫

印刷 者

石川縣金澤市尾張町八十二番地
宇 野 孝 太 郎

印刷 所

同 所
活 文 堂
電話【六十五番】

發行所 金澤醫學專門學校十全會

金澤醫學專門學校十全會會員名簿

(查調月一年七十三治明)

金澤醫學專門學校十全會會員名簿

(明治三十七年一月調査)

名譽會員

大坂府立高等醫學校 教諭 醫學博士 木村 孝藏
 京都帝國大學 教授 醫學博士 鈴木文太郎
 內務省衛生局 野田 忠廣

贊助會員

廣島高等師範學校 學校長 北條 時敬
 金澤市止善堂病院 山田 謙次
 江沼郡大聖寺病院 波多野彌五郎

外國留學中

愛知縣幡豆郡西尾町西尾病院

岡山醫學專門學校

石川縣第二中學校

第四高等學校

醫學博士 中濱 東一郎

高山 正雄

田中 正鐸

教授 醫學博士 上坂 熊勝

講師 堤 從清

書記 藤井 鏡

唐津中津中學校

教諭 末近 義介

東京帝國大學耳鼻醫局

岩田 一

大坂府立難波病院

谷中 正勝

特別會員 (5)

金澤醫學專門學校

教授 石川 喜直

全

教授 磯田 正謙

金澤病院

醫員 醫學得業士 伊野宮長民

金澤醫學專門學校

教員 石川 龍三

金澤市止善堂病院

醫員 醫學得業士 井上 敏吉

富山市立病院

開業 全 池田 秀雄

醫員 全 石川 齊

開業 全 生駒 廣大郎

步兵第四十八聯隊

陸軍二等軍醫 池田 耕

開業 醫學得業士 石倉 宗嗣
 開業 全 飯塚 忠男
 開業 全 井原 悟

開業 全 飯森 益太郎
 研究 全 石黒 均造
 醫員 全 井口 正察

新潟縣古志郡長岡町
 甲野病院
 (は)

金澤醫學專門學校
 助教授醫學得業士 林 常雄

第九師團軍醫部
 陸軍二 醫學得業士 橋本 監次郎
 等軍醫

東京醫科大學病理教室
 全 濱口 廣海

姫路歩兵第十聯隊
 陸軍二 橋本 喜久三
 等軍醫

開業 原 貞治
 醫學得業士 林 美輔

開業 全 長谷川 清一

學校醫全 蓮村 外男

小倉工兵第十二聯隊
 陸軍三 早瀬 三求
 等軍醫

鳥取歩兵第四十聯隊
 願兵 一年志 全 原田 正廣

歩兵第三十五聯隊 全 全 林 正雄
 金澤病院 醫員 全 八田 智証

開業 全 花岡 佐太郎
 全 春田 久太郎

金澤病院藥局 藥劑員醫學得業士 林 京次郎
 歩兵第七聯隊 見習 醫員 羽根田 信次
 醫官 醫學得業士

開業 醫學得業士 本田 三郎

全 堀 半次郎

台北衛戍病院 全 全 星野 正齊

全 全 星子 元真

全 堀 政次

横須賀海軍病院 海軍少軍 堀井 吉平
 醫候補生

(と) 開業 醫學得業士 時國 良作

旭川歩兵第二十六聯隊 陸軍二 戶田 伊代次
 等軍醫

開業 全 德木 千秋

神戸病院

職員 全

富田 稔 醫

(ち)

開業 醫學得業士 千華 玄也

(を)

金澤醫學專門學校

教授 小川 勝陳

全

教授 大西 克孝

全

雇 大瀬 謹一

金城診察院

職員 醫學得業士 岡本 京太郎

開業 全

大屋 保治

開業 全

小野 郁藏

開業 全

大橋 富

開業 全

大澤 五月

東京醫科大學生理教室

研究 全 生沼 曹六

開業 全

大塚 正一

開業 全

小栗 熊次郎

開業 全

太田 他計作

開業 全

小倉 嘉一郎

海軍中 全

軍醫 全

大西 瀨治

開業

開業

岡田 剛吉

金澤病院

職員

沖野 彌一郎

步兵第七聯隊

醫學得業士

小川 爲吉

一年志 全

願兵 全

太田 精一

開業

開業

大木 則雄

富山病院

職員 醫學得業士

尾倉 一美

工兵第五大隊

陸軍三等軍醫 全

太田 毛作

京都醫科大學

助手 全

岡島 敬治

開業 全

開業 全

小野 謙三

開業 全

全

小幡 學雄

東京醫科大學內科教室

開業 醫學得業士

渡邊 九壽松

研究 醫學得業士

研究 醫學得業士

渡邊 子貞

開業 全

開業 全

渡邊 順吉郎

金澤病院

職員 全

渡邊 十治

步兵第三十五聯隊

一年志 全

鷺山 他三郎

願兵 全

願兵 全

鷺山 他三郎

(か)

外國留學中

教授 金子治郎

開業 醫學得業士

河合 鷹

全

川北 辰吉

全

河村 宗作

醫學得業士

笠間 大作

陸軍二等軍醫

全

神谷 貞次郎

開業 全

梶川 藏重

開業 全

萱場 七之助

金澤病院

加藤 度三

東京醫科大學

研究 醫學得業士 河野 勇

開業 全

勝木 直吉

開業 全

金子 太須計

開業 醫學得業士

柏本 敬介

開業 醫學得業士

輕部 修一

開業 全

鎌田 勘之助

東京醫科大學

研究 全

加納 景成

步兵第三十三聯隊

一年志願兵 全

片岡 正

開業 全

全

春日 健次

金澤醫學專門學校

開業 全

河崎 有作

全

教員

吉村 新六

醫學得業士

開業

吉崎 郡太郎

全

醫學得業士

吉川 砥直

開業 全

醫員 全

吉田 幡誠

開業 全

醫員 全

米村 吉太郎

金澤病院

開業 全

吉江 象太郎

金澤病院

開業 全

米澤 恭次

步兵第七聯隊

醫員 全

吉住 保

見習 醫官 全

全

吉井 康次郎

金澤醫學專門學校長

醫學博士

高安 右人

金澤醫學專門學校

教授

高山 基重

全

書記

高柳 鎌次郎

(九)

金澤市止善堂病院

醫員 醫學得業士

高口保太郎

金澤病院

醫員 全

田中一次郎

■■■■■

開業 醫學得業士

高松倉吉

全

全

竹多乙三郎

■■■■■

開業 醫學得業士

高澤甚作

小倉衛成病院

陸軍三等藥劑官 醫學得業士

高多久正

■■■■■

全

武田久米藏

台灣基隆病院

全

高柳元六郎

■■■■■

全

田中他治

■■■■■

開業

高辻喜作

■■■■■

全

橘左内

■■■■■

醫學得業士

高田文齊

■■■■■

全

高田範圍

■■■■■

全

高岡高勝

■■■■■

全

橘 薰

■■■■■

全

谷口長松

■■■■■

全

高橋常作

■■■■■

全

館昇榮

栃木縣足尾銅山本山
醫局

開業 醫學得業士

田上清貞

■■■■■

開業 醫學得業士

園崎孫次郎

海軍中 全

田代保次

■■■■■

醫學得業士

辻本辰之助

軍醫 全

武田正壽

■■■■■

醫員 全

築紫末雄

第十卷雜誌第三號

步兵第七聯隊

開業 全 辻 岡 律

陸軍一等軍醫 全 鶴見 金十郎

金澤病院

津川 恒

東京共濟生命保險會社

都築 熊藏

京都醫科大學

助手 全 辻村 耕夫

吳海軍病院

開業 藥學得業士 築山 菊雄
海軍少軍醫候補生 醫學得業士 土田 久三郎

(な)

金澤醫學專門學校

講師 中屋 重樹

全 雇助手 永原 松太郎

全 雇助手 中野 鑄太郎

全 書記 永山 一昌

東京神田錦町永樂病院

開業 醫學得業士 中島 正泰
醫員 全 中川 幸庵

京都醫科大學

助手 全 中西 政太郎

三河國幡豆郡西尾病院

醫員 全 永井 環

開業 全 中野 玄次

海軍中軍醫 全 中野 才幸

近衛步兵第三聯隊

開業 藥學得業士 中田 徳次郎
一年志願兵 醫學得業士 中村 屋八

(む)

金澤醫學專門學校

教授 村上 庄太

全 講師 村木 維夫

開業 村田 太二郎

東京衛戍病院

陸軍一等軍醫 醫學得業士 村田 醇

全 開業 全 村本 笹次郎

福井病院 醫員 全 武會 三郎

(ろ)

金澤醫學專門學校 教授 上田 計二

全 雇 宇野 益之

步兵第三十五聯隊 一年志願兵 醫學得業士 爪生 尹重

(の)

金澤醫學專門學校 雇 野崎 芳孝

步兵第七聯隊
 三等軍 全
 野村 亮吉
 野口 詮太郎
 野嶽 利七
 步兵第七聯隊
 一年志 全
 願兵 全

金澤醫學專門學校

開業 醫學得業士 藏 尙太郎
 教員 補 正可

愛知縣立醫學專門學校教諭

全 全 黑川 由己
 久保 武

橫濱市野生病院

全 全 熊谷 兵次郎
 久津木 勝作

東京本郷湯島順天堂

全 全 桑 折 直

金澤病院

全 全 熊澤 清隆

(カ)

外國留學中

教授 山崎 幹

金澤病院

全 全 山田 正忠
 八牧 政孝

全

全 全 山田 金一郎

金城療病院

全 全 山田 孝太郎

岐阜病院

全 全 山崎 秋津醫

全

全 全 安村 順吉

全

全 全 山崎 芳太郎
 山口 敏雄

金澤醫學專門學校

全 全 助教授 松田 菊治

全

全 全 增野 與三九

全

全 全 松浦 啓三

臺中衛戍病院

陸軍二等軍醫 醫學得業士 松川 甫恭

全

全 全 松田 龜太郎

全

全 全 松井 梅二郎

全

全 全 松原 三郎

外國留學中

全 全 松王 數男

大坂桃山高橋病院

全 全 松井 宣正

全

全 全 眞柄 佐一郎

金澤病院

全 全 松村 魁

步兵第三十六聯隊

陸軍三等軍醫 全

步兵第三十五聯隊

開業 全 牧 良 一

陸軍三等軍醫 全 增田 貞吉

開業 全 九山 六郎

全 全 前田 豊作

全 全 政山 龍雄

(乙)

金澤醫學專門學校

助教授 福見 常太郎

金城療病院

院長 藤井 亥三吉

開業 醫學得業士 藤井 溫良

全 全 藤岡 勝次

全 全 藤井 助雄

全 全 藤井 榮四郎

全 全 深美 貞之助

一年志 願兵 全 藤 浪 謙

一年志 願兵 全 福岡 喜詳

(乙)

金澤醫學專門學校

講師 小西 俊三

金澤病院

醫員 醫學得業士 越野 義三郎

保險員 全 小島 佐藏

開業 全 國分 金城

研究 全 兒島 亮吉

陸軍三等軍醫 全 小林 茂樹

陸軍三等軍醫 全 駒井 定哉

開業 全 神坂 勇治

開業 全 古丸 藤三郎

開業 醫學得業士 小山庄 治

海軍少軍醫候補生 全 越田 信吉

醫員 全 小林 孝一

研究 全 小林 五作

見習士官 全 小島 顯治

(あ)

醫學 醫學得業士 東 良 平

醫學 全 赤倉 喜久雄

全 全 安宅 治六

(30)

金澤醫學專門學校

教授 櫻井小平太

全 教授 佐々木 達

開業 醫學得業士 澤 賢吉

全 全 酒井佐太郎

全 全 崎 達郎

全 全 齊藤 幸作

全 全 柳 原 久

越前福井病院

全 全 澤田 定信

青森市公立青森病院

全 全 佐伯 亮齊

陸軍三等軍醫 齊藤 義雄

生命保險社 齊藤 賢徳

(29)

金澤醫學專門學校

助教授 金原 三郎

開業 醫學得業士 喜多外太郎

全 全 北 豐吉

外國留學中

全 全 北川 健三

金澤病院

醫員 醫學得業士 木下 克雄

開業 全 近郷 重孝

(30)

金澤醫學專門學校

開業 醫學得業士 湯本四郎 室門

全 全 湯目 隆濱

(31)

金澤醫學專門學校

開業 醫學得業士 湯本四郎 室門

全 全 湯目 隆濱

金澤病院

醫員 醫學得業士 三木 三郎

全 全 宮井 勇

步兵第三十五聯隊一年志願兵全

全 全 宮島 健治

(32)

金澤醫學專門學校

教授 下平 用彩

開業 醫學得業士 島田 加奈也

全 全 島田 吉三郎

全 全 新谷 信吉

後志國壽都郡壽都病院全

全 全 鹽井 竹次郎

步兵第四十七聯隊

陸軍一等軍醫

澁谷 孝慶

工兵第九聯隊

陸軍三等軍醫

清水 秀夫

步兵第七聯隊

一年志願兵

島 誠 郁

開業 藥學得業士

清水 末吉

(乙)

開業 醫學得業士

平賀 東吾

全 全

飛見 丈俊

全 全

平田 一若

(モ)

開業 醫學得業士

諸角 友平

全 全

森川 修

全 全

望月 慶作

研究 全

森田 齊次

全 全

森 亮

醫業 全

百谷 義一

全 全

毛利 靜一

全 全

森島 彦夫

(セ)

醫學得業士 森岡惣太郎

開業

瀨尾 須四郎

石川縣警察部

公醫 醫學得業士

關屋 林之助

臺南衛戍病院

陸軍三等軍醫

關口 通太郎

栃木縣足尾銅山醫局

醫員 全

關根 倉次

(ス)

開業

杉原 幹男

開業 醫學得業士

杉本 悅敏

全

駿河 尙庸

廣島江田島海軍兵學校 海軍大軍醫

鈴木 寛之助

富山市立病院

醫員 全

末岡 外次郎

開業 全

杉山 弦齊

一年志願兵

杉山 政長

全

須田 嘉三郎